創立60周年記念

神戸川漁業協同組合史

神戸川漁業協同組合史

▲ 出雲国絵図（島根県立古代歴史博物館）

春の青葉、秋に逢えば紅に染まり、やがて冬の淡雪の衣に羽織られ、ひたすら花開く春を待つこの移ろいの中で、先人たちは組合創立以来60年の歳月の間、浅からぬ苦しみ無きに非ず、峯の色、渓の響きの乱れる時を過ごし、今に、そして明日に大切な古里の山河を贈り伝えようとしています。その預かりし宝物を書き留め、後生の人たち伝えようと「神戸川漁業協同組合60年史」の発刊を企画いたしました。

表紙写真は「神戸川北方水源付近」

組合史発刊にあたって

神戸川漁業協同組合

代表理事組合長　山　根　　功

神戸川漁業協同組合が発足してから60周年にあたり、節目として発刊する運びとなりました。これもひとえに組合員の皆様や諸先輩のご支援の賜物です。心より感謝を申し上げます。神戸川の源流は女亀山と言われていますが、琴引山が源流の時代があったとされています。平素は穏やかな川ですが気象変動の豪雨によって一変、暴れ川となり、流域ははかり知れない被害を受けました。そのことから治水事業が始まり、災害復旧工事と重なり神戸川も大変なダメージを受けました。この事業が早く完成し自然な流れに戻ってほしいです。今後は神戸川を育てるために何をすべきか、川を蘇らせる努力を積極的に取り組んで行かねばなりません。また今までの鮎産卵場造成や放流事業、魚道整備、川鵜対策、外来魚駆除、親魚の保護、禁漁区、期間、流下仔魚調査等も継続して行います。

放流に頼っていては鮎は増えないようです。鮎自身に再生させるには、親魚を捕り過ぎないことが大切と思います。また最近雑魚も減少したように思います。子ども達が釣りを楽しむ姿を取り戻すにも雑魚がたくさん釣れる神戸川にしたいものです。汽水域では川幅も広がり蜆漁も期待したい一つです。

支流の少ない上流部で水量が著しく減少したり下流部の流速問題等、今後影響が懸念される諸問題は、広い視野をもって皆様の知識を賜り取り組んで行きます。神戸川が地域の憩い場として貢献することを願うばかりです。

組合史編纂にあたりまして国交省、島根県、出雲市、飯南町、行政機関、諸先輩の方々、組合員の皆様にたいへんご協力いただき、この組合史ができました。衷心より感謝申し上げます。編集作業は短期間で仕上げるため献身的なご努力をされ、敬意を表したいと思います。

発刊に寄せて

出雲市長
長　岡　秀　人

神戸川漁業協同組合設立60周年に際し、記念史を発刊されますことを心からお喜び申しあげます。

さて、神戸川漁業協同組合は、昭和24年に旧出雲市、簸川郡、飯石郡の沿岸漁民の専用漁業権取得を目指して設置されたものです。以来、今日まで貴組合では放流、漁業権管理などの事業を通じて、繁殖活動や河川環境の改善などの取り組みを積極的に進められてきたところです。この間、斐伊川・神戸川治水対策による志津見ダム及び斐伊川放水路関連工事や災害関連工事により、河川状況も大きく様変わりしましたが、貴組合では、アユやサケの産卵場、遡上経路の確保や継続した放流事業により漁業資源の維持･繁殖に努められる一方で、地域住民と一体となった河川清掃活動等により河川環境改善にも尽力されているところであり、その取り組みに対し深く敬意を表する次第です。

出雲市としては、放流事業や河川環境改善等の取り組みにより神戸川の漁業資源が増大し、豊かな河川となることを期待するとともに、単に漁業の生産現場にとどまらず、市民の憩いの場として、また、環境学習の場として広く活用されることを願うものです。

この組合史は、神戸川と歩みを共にする組合の歴史を綴るだけではなく、神戸川の変遷や生息する生物などの生態系を知る上でも貴重な資料となるものであり、本史が広く活用されることを期待しています。

漁協組合員の皆様におかれましては、この意義ある設立60周年を契機として、これまで培われた豊富な経験と知識を生かされ、直面している諸問題の解決に向け、今後も御尽力いただきますよう御期待申しあげます。

終わりに、神戸川漁業協同組合の益々の御発展と組合員の皆様方の御健勝を祈念しまして、お祝いの言葉といたします。

神戸川漁業協同組合
60年史発刊に寄せて

飯南町長

山　碕　英　樹

春の女神と称されるギフチョウが舞う女亀山に生まれた一滴の水は、やがて源流となり、中国山地の山々を縫って、出雲平野を潤し日本海に注ぎます。

神戸川は、古来より恵みの川として、また、上流と下流の物資や文化が往来する道として、上下流に住む者の生活、心を支えてまいりました。

出雲国風土記が伝える国引き神話は、出雲の神が国引きを行い、島根半島を引き寄せたという神話ですが、神戸川が運んだ三瓶山の膨大な火山性堆積物が日本海を埋め出雲平野を形成したという自然現象をなぞらえたものだといわれています。

後に、この出雲平野が穀倉地帯となり、われわれの誇る出雲文化形成の舞台となったことを思うとき、神戸川の果たしてきた役割の大きさを感じずにはいられません。

さて、漁協の皆様には、神戸川を恵みの川としてこれまで守り続けられ、長い歴史の中で、大切なふるさとの山河を後世に贈り伝えようと努力をされ、例えば、神戸川の５珍料理の開発などに取り組んでおられることに敬意を表し、こうした取り組みが成功することを切に望んでいるものであります。

最後になりましたが、この度、神戸川漁業協同組合60年史が発刊されましたことに対し、お喜びを申し上げますとともに、編集に携わられました漁協の皆様、関係の皆様のご尽力に敬意を表し、お祝いのことばとさせていただきます。

発刊によせて

元組合長　土　岩　　勲
［在任期間　平成11年～平成16年］

新春を穏やかにお迎えのこととお慶び申し上げます。

思えば今を去る60有余年前、当時、日本は急速な経済発展と共に、電力需要が増大し、現況では需要に応えられない為に新たな発電施設を神戸川上流部の来島で造り、その水量を落差の関係で新たな水路により江川への放水途中で発電させる計画が樹立されました。その為に神戸川の流水量の減少は否定出来ない状況が予想されましたが、これも国策であり、且つ地域経済進展の基盤作りでもあるものとの認識と流水量の減少に対しては何等かの形で対処するとの事で組合員は了承しました。然し、結果は何れの対応策も絶対量の水量減ではその効果は薄く、予想以上に流量減少の影響は計り知れないほど大きいのが現状であります。

平成22年、組合発足60年にあたり、これを契機に組合員はもとより、国、県、関係機関等との連繋協調により、この現状を確実に把握の基、真剣に最善の方策を検討する絶好の機会であると思います。

発刊を祝す

前組合長　佐々木　伸　文
［在任期間　平成17年～平成19年］

１期３年の短期間のでき事の中で特筆すべきは、平成18年７月18日夜半、豪雨による河川増水に、来島ダム貯水の限界からと大量の放水が重なり、百年に１度の大氾濫となり、上橋波の故三島正治氏ご夫妻とお孫さんの３名が自家用車で避難途中に濁流に巻き込まれ痛ましい犠牲となられた事は無念でなりません。三島氏とはゲートボール仲間でもあり、転作奨励作物の大国芋（山の芋）栽培のＪＡ部会長で懇切な指導を受け、思いは深く、安らかなるご冥福を祈ります。

役員の定年制を73歳に定め、組合運営に活力を配慮しました。平成19年５月からは、斐伊川・神戸川治水事業の関連から、神戸川が１級河川の斐伊川水系となり、神戸川も１級河川に昇格しました。これは、松江市周辺の水害を緩和するため、斐伊川の水量を神戸川に分散放流する事業のもので、合流点から下流の河川を拡幅する事になり神戸川のシジミ漁場の拡大に繋がり、数少ない朗報となっています。

残念なことでは、鯉ヘルペスの発生で新内藤川で鯉が大量に斃死した事であります。それを受けて鯉の移動禁止令が発せられ、鯉の養殖事業ができなくなり、神戸川７珍の一品が崩れ、鯉料理ができなくなりました。（７珍とは、鮎、鯉、鰻、もくずガニ、蜆、ヤマメ、鮒）

また、預入していた神戸川漁業振興基金の３億円の預金利息が年間36万円と安い為に、県の指導を受けて国債や県債を購入したことにより運用益が200万円になり、稚魚の放流事業や研修基金に活用でき本当にありがたい運用となりました。

本組合の創立60周年の歴史も尊い反面に組合員の高齢化が避けられず、今後も厳しい環境が続くと思われます。最後に編集に当られた各位の労をねぎらい、組合の益々のご発展を祈念し、お祝いの言葉といたします。

歴代組合長

初代組合長
井原　協一氏
（昭和24年～昭和34年9月）

第二代組合長
三島雄太郎氏
（昭和34年10月～昭和40年）

第三代組合長
川上貞之助氏
（昭和41年～昭和52年）

第四代組合長
岩崎恒次郎氏
（昭和53年～昭和55年）

第五代組合長
足立　秀雄氏
（昭和56年～平成7年）

第六代組合長
亀瀧　峯定氏
（平成8年～平成10年）

第七代組合長
土岩　　勲氏
（平成11年～平成16年）

第八代組合長
佐々木伸文氏
（平成17年～平成19年）

第九代組合長
山根　　功氏
（平成20年～現在）

平成22年度 役職員・支部長

理事・監事・職員

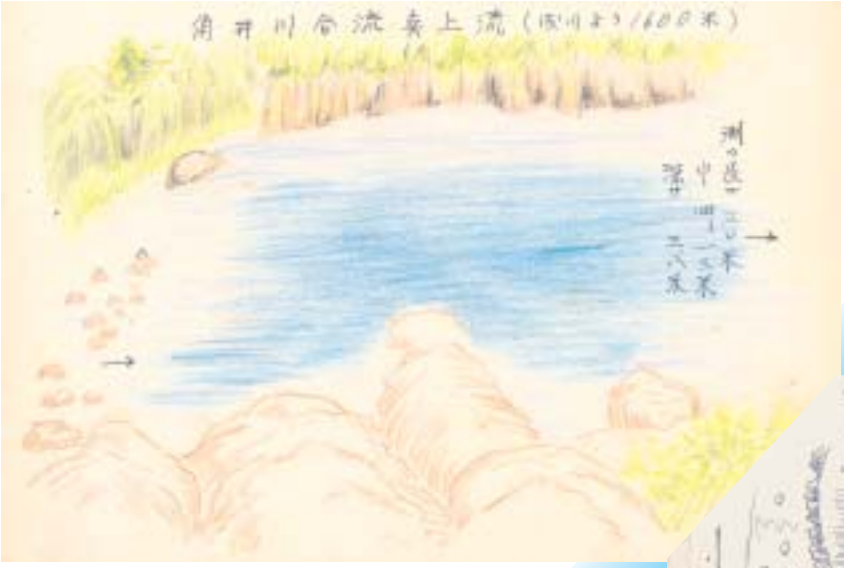
杉山寿美(須佐支部)、上田進一(監事)、岸　修一(窪田支部)、景山　厚(飯南支部)、高見　亮(窪田支部)、森脇晴子(会計主任)
松尾治幸(参事)、成相友弥(朝山支部)、林　政夫(長浜支部)、足立美友(神門支部)、矢田圭吾(出雲東支部)、神田和夫(事業委員長)
長島智年(代表監事)、小村昌一(監事)、山根　功(組合長)、片寄　巌(総務委員長)、安食一成(河川委員長)

支 部 長

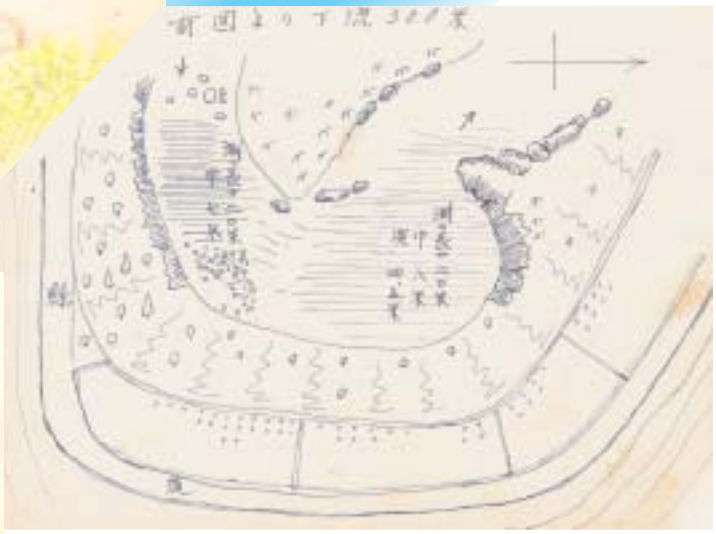
増原克己(朝山支部)、板垣　勝(須佐支部)、三木卓吉(出雲東支部)、藤原國利(飯南支部)、中山幸義(長浜支部)
飯塚　傑(乙立支部)、深井徹郎(橋波支部)、安井敬祐(窪田支部)、布野宏定(出雲西支部)、布野　修(神門支部)

スケッチで見る神戸川の淵と瀬

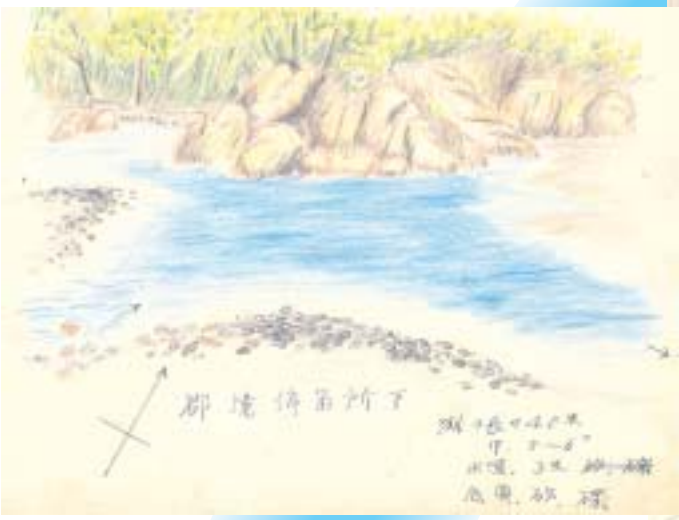
昭和31年８月　三谷栄一氏 画



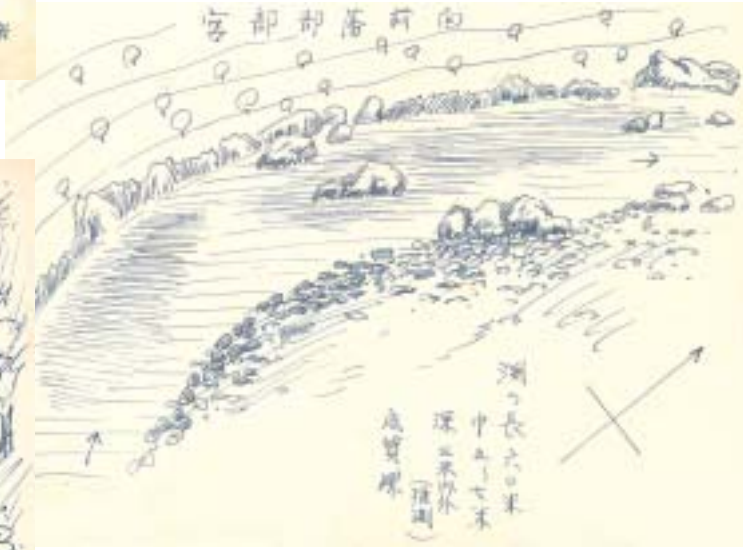
▲ 角井川合流真上流（成川より1600m）



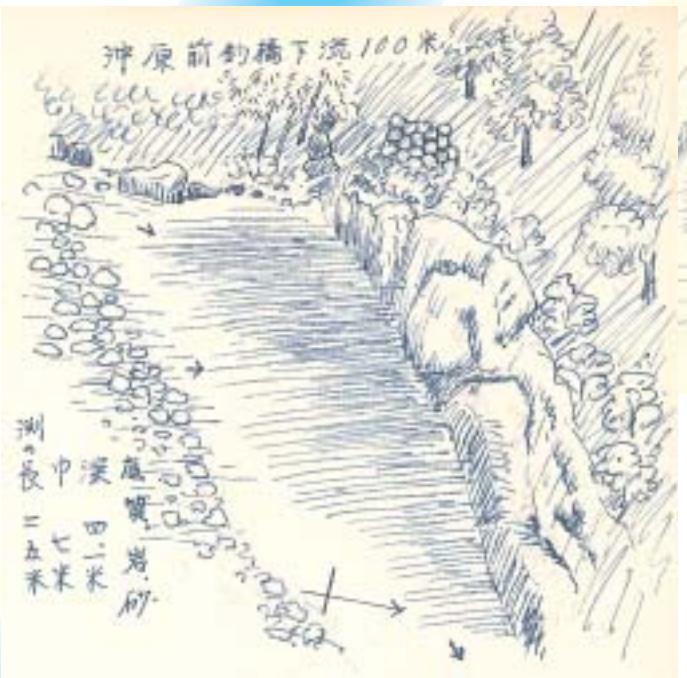
▲ 前図より下流（300m）



▲ 郡境停留所下

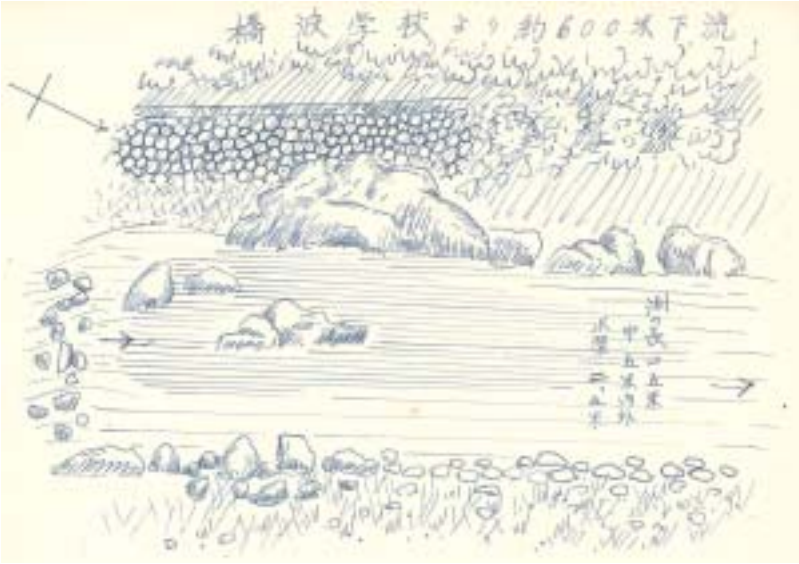


▲ 宮部集落前面



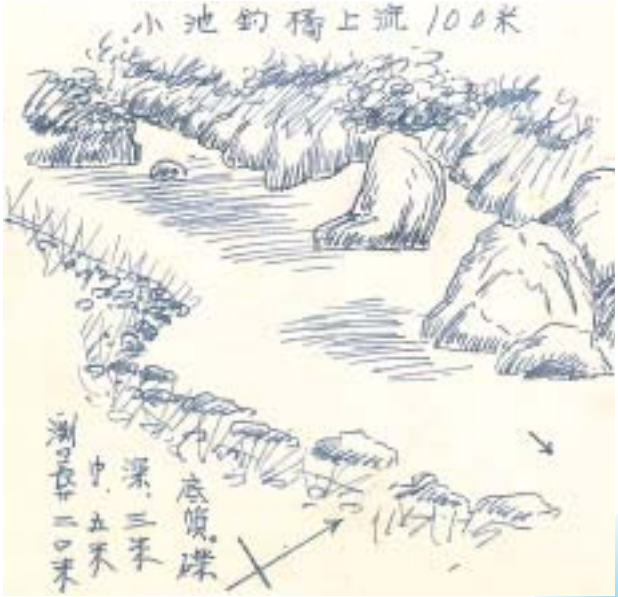
▲ 沖原前釣橋下流（100m）

スケッチで見る神戸川の淵と瀬



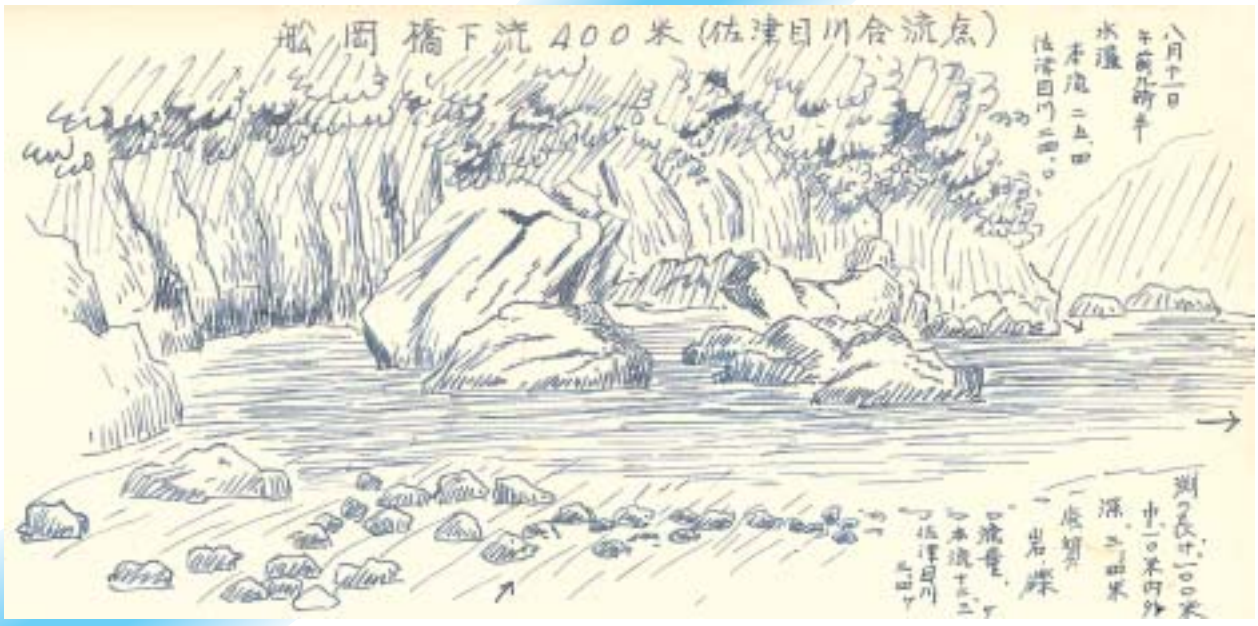
▲ 橋波学校より約600m下流

▲ 宮部集落より約800m下流



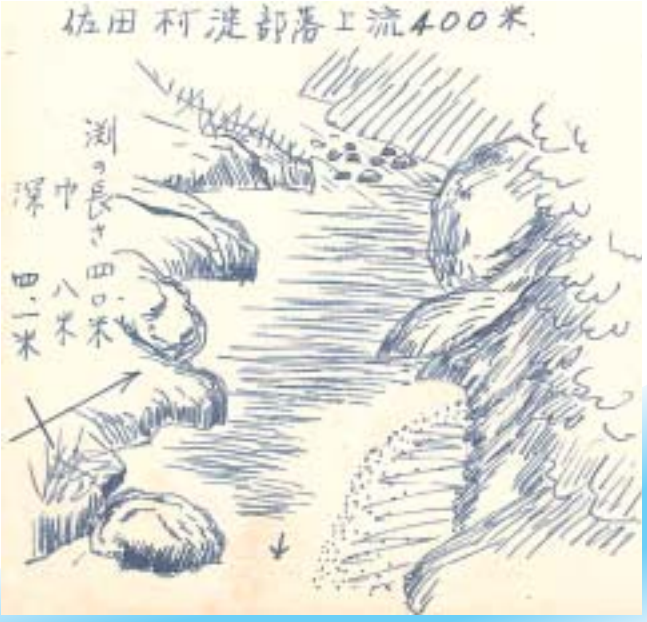
▲ 小池釣橋上流（100m）

▲ 八幡原橋上流（300m）



▲ 船岡橋下流400m（佐津目川合流点）

昭和31年８月　三谷栄一氏 画



▲ 佐田村淀集落上流（400m）

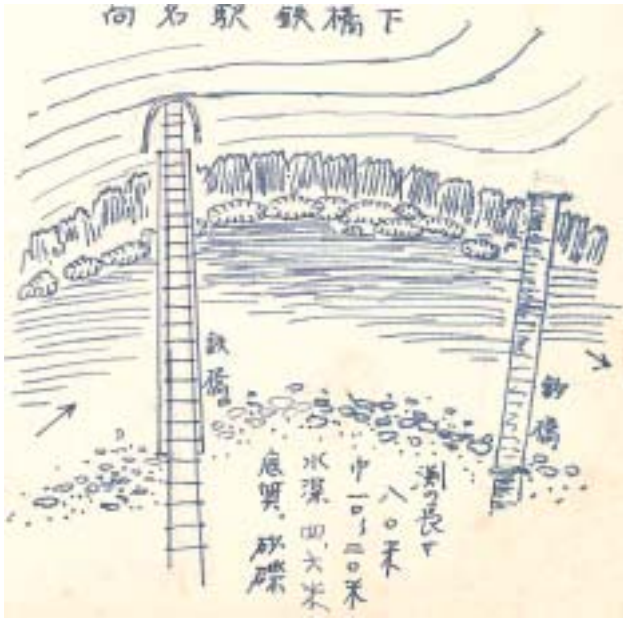
▲ 全図より1, 000m下流

▲ 魚切瀧下

▲ 丸山橋下流（約50m）

▲ 坂本頭首工下流（300～400m）

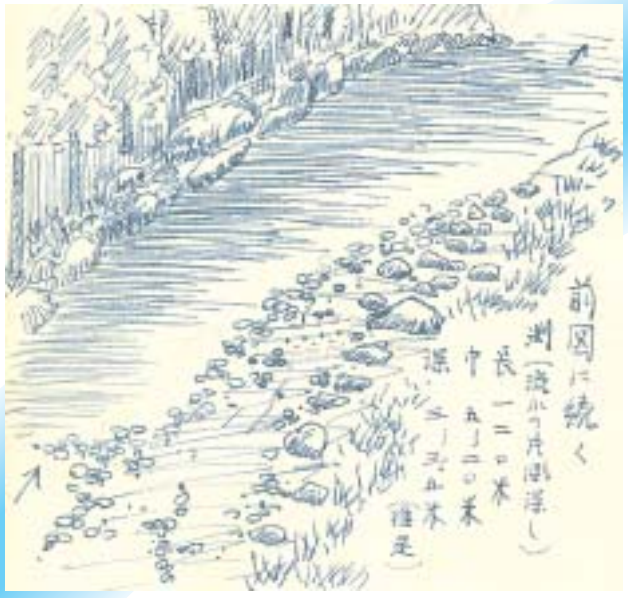
スケッチで見る神戸川の淵と瀬



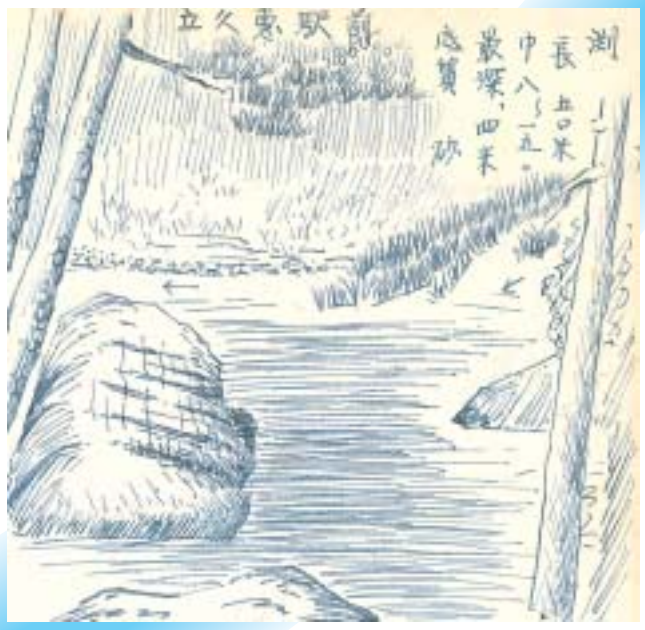
▲ 向名駅鉄橋下

▲ 乙立発電所放水口

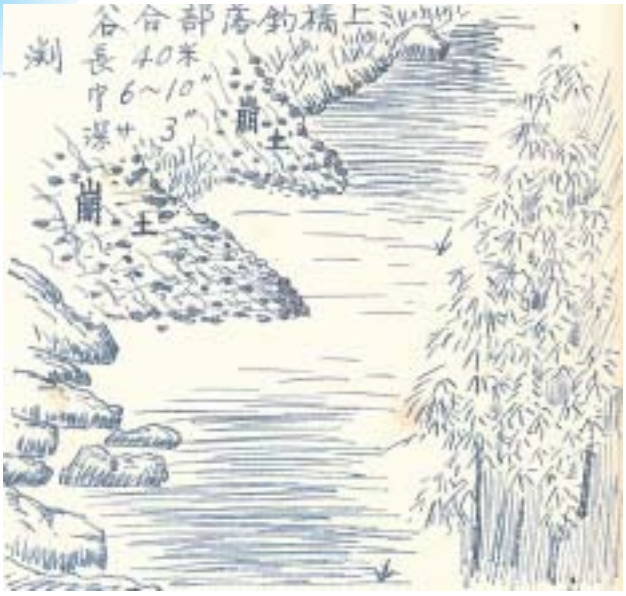
▲ 乙立橋より500m上流



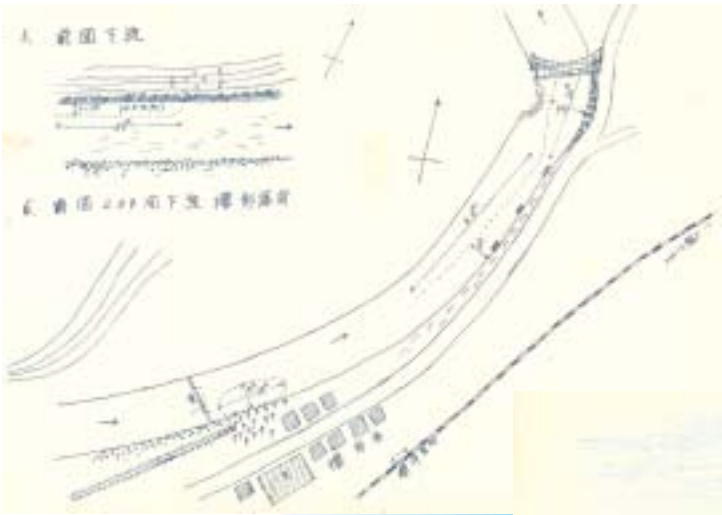
▲ 前図に続く



▲ 立久恵駅前

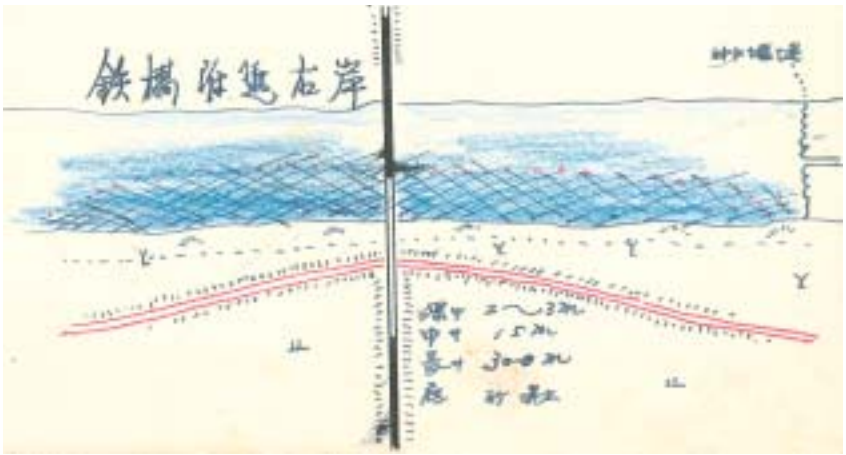


▲ 谷合集落釣橋上

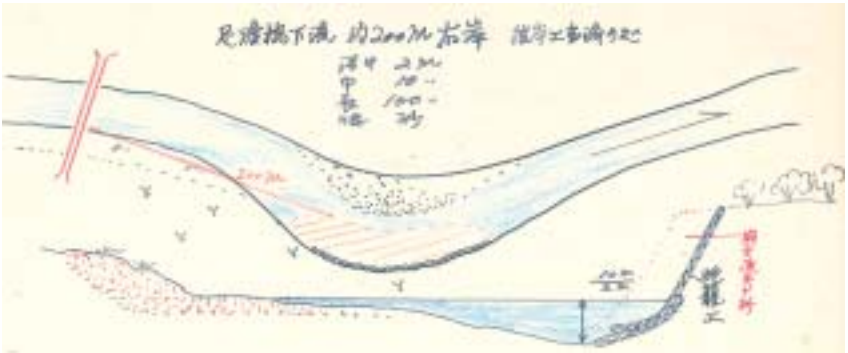


▲ 前図200間下流 櫻集落前

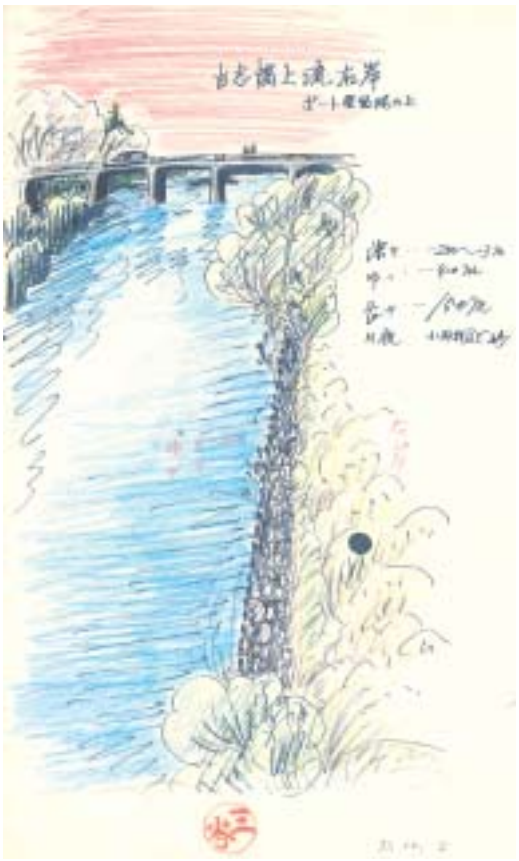
▲ 馬木大井堰（上半面）



▲ 鉄橋付近右岸



▲ 足渡橋下流（約200m右岸）



▲ 古志橋上流右岸

スケッチで見る神戸川の淵と瀬

▲ 妙見橋上左岸

▲ 崎屋橋上より川口を望む

▲ 向原松山より川尾を望む

▲ 神戸川口より崎屋橋方面を望む

写真で見る60年

▲ 乙立のいかだ流し

▲ 組合員の談笑風景

▲ 古志町付近（昭和30年代）

▲ 放流風景

▲ 下流部の放流風景
（昭和30年代）

▲ 上流域での放流風景

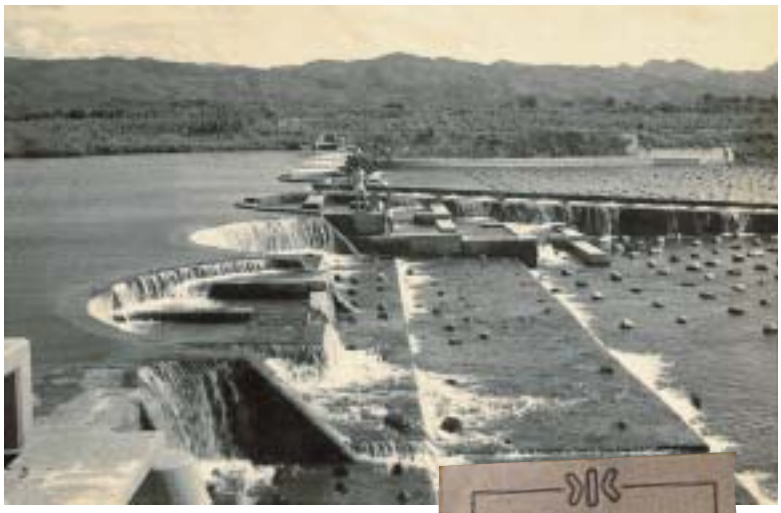
▲ 放流風景

写真で見る60年

▲ 古志町舟本養魚場

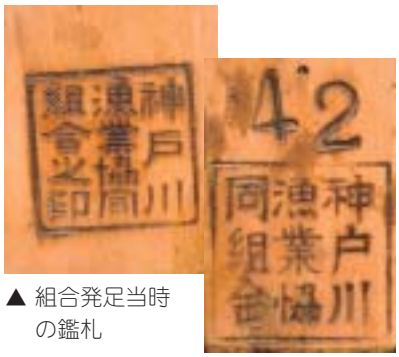
▲ 建設中の養魚場

▲ 窪田の発電所



▲ 妙谷地区

◀ 旧神戸堰



▲ 組合発足当時の鑑札

▲ 組合創立以前の鑑札

▲ 河口開削風景

▲ 古志橋付近のボート遊び

▼ やかた舟

▲ ボート遊び

▲ 組合釣り堀場にて（昭和44年）

▲ 古志橋の下で子供の水遊び

▲ あゆ釣り大会（平成13年）

◀ あゆ釣り風景

写真で見る60年

▲ さけの放流

▲ さけの放流

▲ さけの放流

▲ モクズガニの放流

▼ あゆとヤマメの塩焼き

▲ 乙立地区のあゆの放流風景

▲ 改修前の放水路（塩冶町付近）

▲ 改修以前の神戸川の河口

▲ 斐伊川放水路合流点（平成22年）

▲ 旧神戸堰の固定堰

◀ 馬木産卵場の造成風景（平成21年）

▲ 馬木産卵場の造成風景（平成21年）

▲ 窪田地区鮎解禁前の河川清掃

写真で見る60年

▲ あゆ釣り風景

▲ 馬木町のつり橋

▲ 河口の夕日（投網）

▲ 建設前の志津見ダム（志津見地区）

▲ 志津見ダム工事完了

▲ カヌーの里　志津見ダム放水増加前（平成22年４月10日）

▲ カヌーの里　志津見ダム放水増加後（平成22年４月11日）

創立60周年記念

神戸川漁業協同組合史　目次

はじめに

組合史発刊にあたって　代表理事組合長　山根　功
発刊に寄せて　出雲市長　長岡秀人
60年史発刊に寄せて　飯南町長　山碕英樹
発刊によせて　元組合長　土岩　勲
発刊を祝す　前組合長　佐々木伸文

第一編　神戸川漁業協同組合前史

第一章　地域と漁業の移り変わり
第一節　漁業の始まり …… 1

第二編　支　部　史

第一章　飯南支部
第一節　飯南支部地域概要 …… 8
第二節　組合名簿 …… 10

第二章　橋波支部
第一節　橋波支部地域概要 …… 11
第二節　組合名簿 …… 12

第三章　窪田支部
第一節　窪田支部地域概要 …… 13
第二節　組合名簿 …… 15

第四章　須佐支部
第一節　須佐支部地域概要 …… 16
第二節　組合名簿 …… 18

第五章　乙立支部
第一節　乙立支部地域概要 …… 20
第二節　組合名簿 …… 22

第六章　朝山支部
第一節　朝山支部地域概要 …… 23
第二節　組合名簿 …… 25

第七章　出雲東支部
第一節　出雲東支部地域概要 …… 26
第二節　組 合 名 簿 …… 27

第八章　出雲西支部
第一節　出雲西支部地域概要 …… 29
第二節　組 合 名 簿 …… 30

第九章　神 門 支 部
第一節　神門支部地域概要 …… 31
第二節　組 合 名 簿 …… 33

第十章　長 浜 支 部
第一節　長浜支部地域概要 …… 35
第二節　組 合 名 簿 …… 38

組合員数推移表 …… 39
神戸川魚種別漁獲高推移表 …… 40
歴代役職員名簿 …… 42

第三編　神戸川漁協協同組合事業概要

第一章　指導事業（繁殖保護事業） …… 47

第二章　自 営 事 業 …… 51

第三章　販 売 事 業 …… 53

第四編　神戸川水系の生態と漁法変化

第一章　神戸川の漁法と変遷 …… 55

第二章　神戸川の生態 …… 58
神戸川に生息する魚介類 …… 58
神戸川で見られる鳥類 …… 70

第三章　神戸川の流れと文化
神戸川と出雲大社の巨大柱根 …… 73

第五編　神戸川漁協振興基金の発足

第一章　基金の発足の背景
役員名簿 …… 76

第六編　斐伊川放水路事業

第一章　斐伊川放水路事業
神戸川堰の概要 …… 79

神戸川漁業協同組合創立時定款 …… 81
年　表 …… 89
あとがき

第一編　神戸川漁業協同組合前史

第一章　地域と漁業の移り変わり

第一節　漁業の始まり

1，創立期から現在

神戸川は、中国山地の女亀山（島根県飯石郡赤来町、標高830m）に源を発し、途中頓原川・伊佐川・波多川等の支流を合わせ、出雲市西部の渓谷を蛇行しながら北流し大社湾に流入する。流域面積471km^2、幹川流路延長約82kmの１級河川であり、江の川・斐伊川・高津川に次いで県下第４位の流域面積を有している。

神戸川は古く永禄年間に馬木より塩冶に転流した記録もあるが、これが人為の治水によるものか否かは明らかでない。寛永18年（1641）には、馬木から下流２里余の大土手を築き、下流の河床を西に移して妙見山にそって北流させた記録もある。

神戸川の名称は流域各所の地名で呼ばれている。赤名地域では赤名川、来島川、橋波地域では橋波川、八幡原川、須佐川、古志川などと呼ばれていた。流域の地質は、上流部では閃緑岩類及び花崗岩が大部分を占めているが、中下流部では安山岩類が広く分布している。流域の林野面積は流域約85％であり、広葉樹のクリ・コナラ林と針葉樹のスギ・ヒノキ林が代表林となっている。

江戸時代松江松平藩主は、神戸川を舟で立久恵峡の遊覧を慣行としていた。馬木の神戸川河畔に定宿を設け、高瀬舟に乗船し、大井堰の船川をのぼり、桜、知谷、殿森堰の急流をさか上った。立久恵峡に着くと、船を捨て、絶景を楽しみながら新鮮な川魚に舌鼓を打ち、一日の歓をつくした。また一方では漁業を許可制にし、鮎川（ヤナ、鮎投網）、投網、手だも（さで網のこと）などは鑑札を与え、銀四匁の鮎川運上銀（当時の付加税）を納めさせた。漁の取締には漁業者の互選による肝煎があたり、神門郡神西沖村には松江藩主殺生方鳥見役の出張所が置かれ、漁業者を統制していた。

神戸川漁業協同組合は大正末期に沿岸（現出雲市を中心として）漁民（遊漁者）の一部７名を以って任意組合を結成し、県立養殖場より鯉稚魚等を購入し放流していた遊漁者団体であったのが、昭和13年（1938）に解散。昭和15年頃に塩冶村長坂本元吉氏の主唱により再び神戸川沿岸漁業組合連合会を創立し、専用漁業権を目指し運動を展開したが戦争の進展にともない一時中止の状態になった。

戦後再び組合創立の声が盛り上がり、神戸川産業開発協会の協力もあって昭和24年（1949）11月に沿岸漁民930名を以って神戸川漁業協同組合を組織し、昭和24年12月17日に設立許可を得た。

設立許可前の昭和24年11月５日には理事・監事の選挙を出雲市公会堂にて選挙管理人高橋栄四郎氏、選挙立会人原義春氏、飯塚新一氏の見守る中、同午前11時５分から午後０時47分の間に選挙人137名で投票を行った。結果、理事20名（一部の理事は支部長も兼務）と監事５名を選出した。

神戸川漁業協同組合設立目論見書によると、対象地区は出雲市、簸川郡大社町、同荒木村、同園村、同荒茅村、同朝山村、同乙立村、同稗原村、同窪田村、同神門村、同神西村、同山口村、飯石郡東須佐村、同西須佐村、同頓原村、同赤名村、同志々村、同波多村、同来島村とある。発足当時の組合員数は出雲市105名、神西村18名、長浜村27名、神門村54名、朝山村305名、窪田村220名、西須佐村115名、東須佐村24名、志々村57名、荒木村５名の総数930名で、飯石郡赤名村、来島村、頓原村、簸川郡稗原村、同大社町の組合員は皆無とある。

▲ 昭和初期の神戸川

全体の組織は、上記した理事・監事の他に飯石郡頓原村、同赤名村、同来島村、同志々村、同波多村で各１名、簸川郡窪田山口村12名、飯石郡東須佐村２名、同西須佐村５名、出雲市６名、簸川郡朝山村20名、同稗原村１名、同神門村４名、同神西村２名、同長浜村４名、同大社町２名の総数63名の総代会で組織したとあるが、定款にある50名との違算に発足当時の苦悩が窺える。

組合員の出資は１口200円で１人５口までと制限があった。昭和25年度の賦課金額は第１種600円、第２種400円、入漁料は１カ月500円、１日200円とある。当時の物価を考慮すると、かなりの高額であったと思われる。

島根県による共同漁業免許は、昭和26年（1951）９月１日に昭和36年（1961）８月31日までの許可を恒松安夫知事より受けている。

昭和24年（1949）11月５日時点では出資金額18万円とあるが、昭和25年２月20日には養殖場設置計画案及び事務所接収移転案が協議され増資に向かっている。養殖場の概要は敷地面積785坪、内訳は産卵池１カ所８坪、孵化池10カ所25坪、親鯉池２カ所212坪、鯉養成池１カ所162坪、付属建物は事務所９坪と倉庫９坪とある。総工費1,168,724円で償還方法は、神戸川電源開発に伴う補償金にて返却とある。

また、神戸川養殖場設置促進期成同盟会を結成し、積極的に養殖場設置に向かって運動をしている。一方の組合事務所接収移転案には、元燃料配給組合事務所に建坪12坪を家賃5,000円、電話接収5,000円の計10,000円で接収とある。ちなみに、当時の電話番号は435番とある。昭和25年２月16日には登記を完了する。

▲ 出雲市古志町徳連の風景

その後、昭和32年（1957）に出雲市古志町徳連に養魚場が完成し、事務所を移転する。当時の貸借対照表を見ると出資金は168千円とあり、当初から見ると幾らかの乱れが生じている。

漁業権の認可は、宍道湖漁業協同組合、神西湖漁業協同組合、高津川漁業協同組合、江川漁業協同組合、三隅川漁業協同組合と同年度である。

当時の管理規定によると漁法として、１.鮎瀬張網、２.投網、３.鮎竿掛、４.釣魚、５.又手網・放流網、６.ウロ及び釜、７.升網、８.鵜飼漁業を許可し、それを３種に分類している。第１種漁業として、鮎友釣、チャグリ、投網、四ッ手、放流網、鰻箱、鰻モジ、火振り、瀬張網、突魚、第２種漁業として、モンドリ、ドブ釣、釣具、配縄、又手網、雑魚ビン漬、ウロ及釜、第３種の特殊漁業として、鵜飼、弁網が１カ年間許されている。鏡及び威石、メガネ類の使用は禁じている。

▲ 現在の養魚場の風景（出雲市下古志町）

また、漁獲物については、特別な事由、自家消費で理事が承認したもの以外は総て組合に出荷とある。雑則には、12歳以下の者による釣魚は適用を受けないとの記載もある。

漁獲高には、昭和25年７月13日発行の神漁第50号の報告書によると、昭和20年（1945）には鮎3,700貫（１貫は現在の3.75kg）で販売高1,850千円、鯉870貫で販売高261千円、鰻1,300貫で販売高650千円、うぐい680貫で販売高136千円、ボラ1,600貫で販売高240千円、鮭1,720貫で販売高516千円、鮒4,100貫で販売高820千円、その他1,350貫で81千円、漁獲高合計

15,320貫で販売高合計4,554千円の記録がある。

これが組合創立時の昭和24年（1949）になると鮎7,900貫で販売高7,110千円、鯉2,000貫で販売高1,000千円、鰻1,000貫で1,000千円、うぐい600貫で販売高180千円、鮭2,000貫で販売高2,000千円、鮒5,300貫で販売高1,590千円、ボラ1,700貫で510千円、その他1,500貫で販売高150千円、漁獲高合計22,000貫で販売高合計13,540千円となり、漁獲高で約1.4倍、販売高で約３倍の伸びを記録している。

特に価格変化が目立っているのが鮎で、当時の趣向を表している。

放流事業も創立当初より報告がある。昭和25年（1950）に借入金10万円で稚鮎３万匹、鯉５万匹、鰻等を購入し、放流している。同年、禁漁区の設定を神戸川願楽寺前堰提、乙立発電所堰提、同放水路口、八幡原寺堰提、窪田村堰提とし、３月１日から９月末日期間を禁漁とした。

時は移り昭和47年（1972）の豪雨で斐伊川、神戸川が破堤寸前になると、昭和31年（1956）に当時の田部知事の立案で端を発し、１度は否決された斐伊川・神戸川治水計画案が再び持ち上がる。当初から絶対反対を表明していたが、地域住民の動向を勘案し、組合事務所と養魚場の移転を条件付で同意する方向に傾く。土地を１億3,900万円、建物を55,554,700円で売却し、養魚場、事務所を現在の出雲市下古志町に移転することを決定する。

昭和61年（1986）４月１日～同年７月10日間に宮本建設が施工、総工費24,500千円で事務所新築工事が行われ、同年８月５日に完成する。また、昭和61年10月21日～昭和62年３月20日間に今岡工業が施工、総工費75,000千円でアユ・鰻・鯉・鮭育成池施設工事が行われた。

種苗施設の必要性は放流アユの数に起因する。京都大学名誉教授の宮地伝三郎氏の算出方法によると、生息基準密度は生息適地の全面積に0.7を乗じた数と言われている。神戸川の生息適地は190万㎡と測定されるので、望ましい放流数は133万匹となる。しかし当然減耗するので、減耗率を1/2～1/3とすると必要な放流数は400万匹となる。近年の放流数は40～50万匹が実態なので、必要数の１割程度の放流をしている事になる。そこに種苗施設の必要性が生まれてくる。

２，変 貌 期

（１）第 １ 変 貌 期

神戸川の歴史の中でもっとも大きな変貌を遂げるのが来島ダムの建設である。神戸川本流も上流部ではじめ赤名川と呼ばれ、上来島で小田川を合流し下来島で大万木山に源を発した支流頓原川を合流するが、この地点に人造湖を造り下流部と分断する計画となる。起業者の中国電力株式会社によると次のように計画していた。来島村の計画地付近は峡谷であり、河床付近には堅硬な花崗岩が露出していることや高地部を流れる神戸川と低地部を流れる江川とが最も近接しているなどが、落差を利用する水力地点として天与の地形であるとの判断に至った。即ち、神戸川の流れを一部変更して、発電のために江川に水を流し、280mに近い落差で最大出力36,000Kwを得ようとする計画である。具体的には飯石郡来島村下来島に神戸川を横断して高さ63mの堰提を設け神戸川の流水を貯留し、約3,000万㎥の貯水池を造り、本流堰提上流約1,900m左岸に取水口を設け、延長10,732mの隊道を以って江川沿潮集落山腹に設けた発電施設に導くとある。この説明会が、前身の神戸川産業開発協会へいつ行われたのか定かではないが、昭和24年（1949）10月５日に同協会長森山繁樹氏による陳情書が提出されている。

３点ある内容は、１.ダムの水は必ず神戸川に還流するように配慮して欲しい、２.放水を枯渇しないように農業水利に即した設備を完備して欲しい、３.予定地の被害者に対し充分な補償を考慮して欲しいとあ

▲来 島 ダ ム

る。しかしながら陳情が実らず、計画は実行に向かう。

時を隔て、昭和29年（1954）11月６日午前９時より、出雲市駅通り黒崎旅館にて電源補償問題第１回打合せ会が、県庁側より吉岡漁政課長、重田漁政次長、中電側より本店神津次長、可部管財課長、松江支店長香川所長、井上総務課長等、組合側より井原組合長、前島専務、桐山夏太郎、山根林市、鐘築繁雄、高橋礒助、三原源吉、谷口久市、武田喜蔵、小村良友、伊藤武義、別所豊太郎、釜田春次、森脇賢一郎、石飛秀太郎、大江儀左門、布野広吉、春日清市、岡本行晴、加藤大四郎、矢田政吉の出席で行われ、場面は補償問題に発展する。

第６回の補償交渉の冒頭で当時の井原組合長は、「会社側の交渉態度が私共にはどうも理解できません」とある。交渉の苦悩が窺える。

昭和30年（1955）４月16日から17日の間、県当局立会の下に、組合及び中国電力は、神戸川の現地調査を行い、来島ダム下流より河口付近までの間12カ所を協定し、測量を中国電力が行った。その結果、水量は平均潤返減少率を25.203%と想定した。

これに対して、組合側は異議を唱えている。１つは分水による流量の減少と河床面積の縮小である。この根拠として、来島村大字下来島のダム地点までの止水区域は本流の水源地帯であって流量が多く、かつ渇水の少ない区間である。また、農業用水時期による放水操作は、昼夜の別なく必要である魚族には厳しい。それどころか、最大渇水期の８月、10月期に流水を止めた場合は壊滅的な被害が発生する。更に、上流に上るほど食飼となる藻類や微生物が多くて鮎等の肥育に役立っているが、これは岸に接近できる流量があってこそ可能であって、減水では厳しい。

２つ目は、河川の漁業上の有効水面が著しく短縮することにある。３つ目は、河口閉塞の悪化である。河川から日本海に流下する水が減少すれば、自ずと河口は閉塞する。このことは、海と河川を往来する魚族にとっては遡上ができない壁となる。これらの根拠により、中国電力側が主張する潤返減少率を以って減水による漁業被害率としているが、これは本末顛倒も甚しい。減水率は同じでも、河床状況により、所によって大差があり、水深、返縁の傾斜角で相当相違する。また、減水によって魚族の生活圏が縮小することは、中国電力が想定している如く、下流に進むに従って逐次軽減するものではない。更に、流量が半減すれば、魚族も半減するのではなく、魚族の生活圏が半減すれば魚族は1/4に減ずる。と、強く抗議を行う。

しかし、最終の交渉は昭和30年（1955）12月19日に今市町中町片岡旅館にて徹夜で行われ妥結に至り、昭和31年４月16日本協定の調印を終了する。

昭和31年（1956）２月に通水開始、同年４月16日には神戸川水系潮・乙立・窪田の各発電所の建設に関する契約が交わされ、一時補償、年次補償、養魚場の設置、河口の開削、魚道の整備等に進展するが、漁場の著しい低下は壊滅的と表現するのが相応しい。

妥結した補償内容は永久補償54,500千円、年次補償でアユ放流費800千円、鰻放流費400千円、養魚場管理費300千円とあり、永久補償金から各組合員に平均20千円を分配している。

昭和57年度に入るとダムの水権利の更新期になり、足立秀雄組合長を筆頭に各理事に加え、森山、卜部、佐々木、板垣、青木、福間、影山氏の各県議の応援を戴き、水を戻せの１点に絞った交渉が行われ、昭和59年（1984）８月から、来島ダムからの環境放水が行われるに至った。少しではあるが流水が戻っているが、それ以上に温暖化による雨量の減少があり、厳しい状況は変わらない。

（２）第 ２ 変 貌 期

第２変貌期は斐伊川・神戸川の治水事業による変貌である。昭和44年（1969）６月、当時の島根県知事田部長右衛門氏によって、再び斐伊川・神戸川の治水及び関係地域の開発に関する基本構想が発せられる。

古来、斐伊川のたび重なる洪水により幾多の人命と財産が失われた史実を背景に、地域の住民生活の安全を確保する為に出雲市内上流部より水路を設け、洪水流量の一部を神戸川へ分流する。神戸川の治水については、抜本的な改修を行う。斐伊川と神戸川の上流部に、洪水調整および利水のための多目的ダムを設けるとある。

計画諸元によると、斐伊川上流部に尾原ダム、神戸川上流部に志津見ダムを建設し、下流における両河川

の接近域に斐伊川から神戸川に流出する斐伊川放水路をつくり、洪水調節を行う。また、松江市の大橋川を改修して日本海に流出させる。ダム建設事業、斐伊川放水路事業、大橋川改修事業の３事業である。

明治以降の大洪水を顧みると、明治６年（1873）８月28～29日に発生している。古志橋上流船元の堤防が決壊し、天神、白枝、浜の一帯が浸水し、死者70余人、流失家屋470余戸、堤防、道路、耕地の損壊は想像を絶するものであった。明治26年（1893）10月16日、翌27年にも連続して発生している。大正7年（1918）９月14～15日、大正15年（1926）７月22～23日、昭和９年（1934）９月19～22日と続く。

昭和18年（1943）９月19～21日洪水では、馬木、古志橋上流の堤防、十間川堤防等が決壊し、昭和20年（1945）９月17日には大井堰が決壊している。昭和36年（1961）７月４日、昭和39年（1964）７月18～19日と繰り返し、昭和47年（1972）７月、昭和50年（1975）７月、昭和58年（1983）７月、平成９年（1997）７月、平成10年（1998）10月、平成18年（2006）７月18～19日の大洪水に至る。これらの災害に終止符を打とうと計画されている。

▲ 建設中の志津見ダム（2009年撮影）

明治時代の流域認定は、神戸川の河口から朝山村大字所原鍛冶屋上まで河川法準用河川とされていたが、昭和５年（1930）４月赤名村の堂々川合流点まで、次いで昭和22年（1947）９月に赤名川合流点まで、さらに昭和33年（1958）３月には赤来町大字上赤名字八反歩地先まで延長認定された。その後、昭和40年（1965）４月に新河川法による２級河川に指定されるが今回の治水事業により、河川は１級河川となった。

しかしもっとも変貌するのは、魚介類の生態である。昭和59年（1984）３月と平成４年（1992）２月に神戸川漁業現況調査報告書の中に参考になるデータが報告されている。必ずしも明確ではないがと前置きがあるが、河川の整備工事で使用する護岸用ブロックと天然岸との河川形状の差が魚類の分布生態に与える影響が記載されている。

それによると、冬季に天然岸では稚魚が多く確認されることから越冬には天然岸が必要であり、春季以降については、天然岸に遊泳力の大きな魚類の生息がみられるのに対して、河川施工区では低層に生息する魚類が多いとあるので代表的な鮎にとっては天然岸が欠かせない事になる。神戸川を往来する魚類にとっては、いかに天然岸を必要としているのかが分かる。

また、治水を目的としている為に水量、流速が安定しているが、自然発生的に生じる深みや淵が消え、魚類の棲家が消滅する。さらに、神戸川の上流である志津見流域で付着藻類が良く繁殖しているが、これが減少することは渓流性生物に与える影響は図り知れない。加えてダム湖で蓄えた水は出水時に汚濁水となって下流に流れ続け、その結果河床に届く光量が一時的に減少、さらに河床の表面に細泥が沈着し藻類が付着しにくくなり、付着している藻類も泥により光がさえぎられて光合成ができにくくなるなどの結果、ダムから下流部では魚類の餌となる植物プランクトンが減少する。

このような背景の中、平成４年（1992）10月22日に建設省出雲工事事務所長松本直也氏に当時の組合長足立秀雄氏より要望書が提出されている。内容は１．神戸堰の改修、２．鮎の産卵場の設置３カ所、３．人工河川の導入、４．新内藤川付近の堤外地に鯉、鮒等の産卵場設置、５．魚の待避所の整備、６．魚巣ブロックの設置、７．船舶の係留施設、８．現在の流水を維持し、石類は外部に持出さないことを要望し、平成６年（1994）３月14日に回答を受けている。その翌日である３月15日には、中国地方建設局長松浦乾氏との間で契約書が締結された。

第１変貌期ほど大きくはないが、治水工事あるいは災害復旧工事が昔の自然状態からみれば、半病人に近い状態を進行させ、漁場価値低下速度を上げている。河川工事を最小限に小規模化すると同時に、日本の河

川は国有地であるが、流域開発の土地全般の私権になんらかの規制を行い、官民一体となって多自然的な川造りを行わなければ病は進行する。

（3）組合の事業

創設時の定款によると組合事業は多岐に及んでいる。それによると、組合員の事業又は生活に必要な物資の供給、共同利用施設、漁獲物その他生産物の運搬加工又は販売、水産動植物の繁殖保護、漁業に必要な設備、福利厚生に関する施設、水産に関する技術や知識の向上を図る教育並び情報の提供、経済的地位の改善のための団体協約締結、必要な資金の貸付、預金の受入等の記載があるが、実質的に行っていたのは漁獲物の販売事業、水産動植物の繁殖保護事業、放流事業、指導事業、購買事業等が行われていたようである。

これらの事業は規模の差こそあるが、概ね継続されている。その中でもっと大きな事業が放流事業である。組合創設以前から行われている事業で魚種に一部の変更はあるが、安定した実績を放流していることは組合運営の財政状態を見事に反映している。

平成21年11月には、新たな試みとして出雲市佐田町のゆかり館を会場に、神戸川漁業協同組合が選んだ神戸川五珍（仮称）のプレゼンテーション（試食会）が開催された。

（4）現在の神戸川漁業協同組合

昭和61年（1986）８月５日に現在の事務所が完成以来、出雲市下古志町に居を構える。変貌期に記した様に、河川環境が大きく変化したことを受けて、現在では懸命に水量や栄養素を含んだ水質の改善、河川の連続性や淵や流速の見直しに取組んでいる。人間の立場から河川を見ると、河川整備は更に進み治水や利水に関しては不足のない状態になってきた。一方、魚族の立場で河川を見ると、猛々しい暴れ川の姿から一変し、虎から子猫になった流れは、魚の棲みかを消失させた上に、小石や大岩に付着する苔類も急流や早瀬の遊び場とともに奪い取ってしまった。

神戸川の主力的な魚種は鮎が一般的ではあるが、近年はシジミに著しい資源量の増加が見られる。温暖化による海面の上昇、河口から境橋付近までの拡幅による漁場拡大と神戸川漁協にとっては貴重な朗報である。

▲ 初期の放流風景

▲ 最近の放流風景

ヤマトシジミは比較的流れの少ない汽水湖に育つが、神戸川には流れがあり漁場としては安定していない。漁獲高で資源状況を把握しながら管理をしないと資源確保が厳しい。これら課題にどう取組むかで神戸川の魅力と評価が決まる。

神戸川漁協は魚を獲ることだけでなく、魚、組合員、河川造り、周囲の環境作りに配慮した「市民組合」を目指している。

３，そ の 他

（１）神 戸 川 五 珍

平成21年11月６日（金）に出雲市佐田町のゆかり館において、神戸川漁業協同組合が選んだ神戸川五珍（仮称）のプレゼンテーションが開催された。

当日は長岡出雲市長、山﨑飯南町長、板垣掛合総合センター長、今岡出雲観光協会会長とマスコミ各社が招かれ、神戸川で水揚げしたアユ・ウナギ・ヤマメ・シジミ・モクズガニが調理され、試食会が行われた。

披露されたメニュー（24品）

ア　ユ：アユ骨煎餅、アユの昆布〆、子持ちアユ甘露煮、アユの化粧焼

ウナギ：肝の生姜煮、うざく、ウナギ骨煎餅、ウナギの酒蒸し、う巻玉子、ウナギの献珍蒸し、ウナギの印籠煮、ウナギの蒲焼、ウナギの天婦羅

ヤマメ：ヤマメの塩焼、ヤマメの魚田、ヤマメの南蛮漬、ヤマメのイタリアンフライ

シジミ：シジミの饅和え、シジミの酒蒸し、シジミ汁、神戸川蜆のもぐり寿司

モクズガニ：珍味モクズガニの香煎、モクズガニの蒸し蟹、神戸川五珍サラダ

▲ 試食会風景

プレゼンテーションは午前11時30分から13時（試食時間40分）の予定だったが、参加者の箸が納まらずに予定を30分余り過ぎてやっと終了した。

試食終了後の行政、報道関係、漁協の役員による意見交換会の中では、「神戸川でシジミが獲れるのか、モクズガニが獲れるのか」という驚きの声が上がり、漁協にとっては宣伝不足を痛感する会合となった。

▲ うなぎ・モクズガニ・ヤマメの料理

▲ あゆの化粧焼き

▲ ヤマメの塩焼き

（２）今 後 の 漁 協 の 取 り 組 み

神戸川漁業協同組合としては、今後、出雲市、飯石郡飯南町、雲南市掛合町等の行政と一体となって神戸川で獲れる天然の地元資源を掘り起こし、流通の中では欠かせないブランド化やオンリーワン商品の開発も視野に入れて活動することを考えていくことになった。また、産学官連帯でのプロジェクト発足も視野に入れて、単独の漁協では解決できない諸課題を、大きな、総合的なビジョンの中で策定し、短期・中期・長期の事業計画を展開することも必要だという認識に至った。

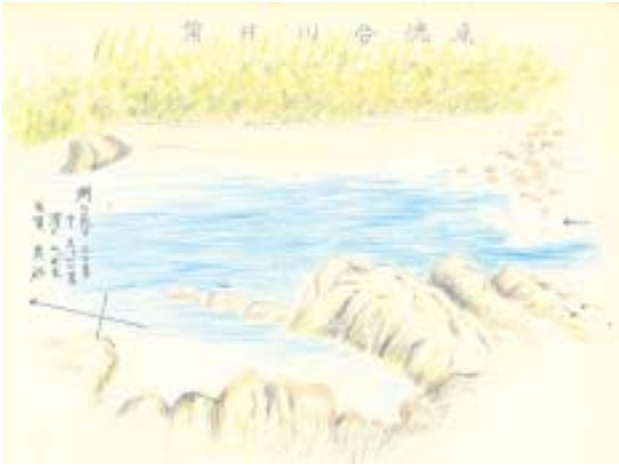
第二編　支　部　史

第一章　飯　南　支　部

第一節　飯南支部地域概要

神戸川の源泉、女亀山のある地域である。出雲風土記によると神門川の源は飯石郡琴引山より出で、北に流れ、来嶋・波多・須佐の三つの郷を経て、神門郡餘戸里の門立村に出で、即ち神戸・朝山・古志等の郷を経て、西に流れて水海に入る。即ち、年魚・鮭・麻須・伊具比（ウグイ）ありと記してあるが、いつの時代からは定かでないが現在では更に奥深き女亀山から本流は生まれている。さらに、琴引山が神門川水系と斐伊川水系の結節点とされている。当時、この地区の本流の呼称は須佐川と称し、神門郡門立村に入ると神門川と呼称が変わっている。地域内の支流は頓原川、牛谷川、宇山川、内谷川、位出谷川、小田川、花栗川等があり、豊かなミネラルを含んだ清流が中国山脈の山々から出で、神戸川の水質を形成している。

域内には魚族にとって河川の連続性に大きな障害となる来島ダムがあり、下流部より遡上する事は困難である。その為に、放流に頼った人工的な魚族の保全を必要とする。但し、ダム湖と河川の往来を生息域とする魚族にとっては、他支部の流域に下がらない為に漁場価値の向上するメリットもある。しかしながら、答えの少ない大きな課題であることには変わりない。また、平成22年度に完成予定の志津見ダムも同支部内にあり、流域を二分する事が避けられない。その上に飯南全域から二つのダム湖に一時的に流入する事は、神戸川本流にとって絶えず上質の水質を提供してきた地域を失う事になり、中流域及び下流域の生物にとっては致命的な打撃となる。飯南地域の豊かな水量に加えて、豊かな水質を享受できない神戸川は飢餓的な世界に向かう事になる。



▲ 昭和30年頃の角井川合流点

▲ 飯南町大立神橋上流の豊かな環境

景山　厚 理事

60年と申しますと私が今年還暦を迎えますので丁度その時期に漁協が誕生したことになります。これはひとえに、先人の方々の多大なご努力によるものと感謝申しあげます。

近年は大雪、大雨等による自然災害が頻繁に発生しており漁業を取り巻く環境が厳しくなっております。しかし今年は神戸川五珍の企画、アユ産卵場の整備などいろいろと計画し、成果が期待されるところです。

今後は漁協のさらなる発展に、微力ながら全力で励みたいと思います。

上田進一 監事

神戸川漁業協同組合60年、歴史を感じます。

昭和30年代生まれの私は、小さいころ祖父に連れられ前の川（神戸川）に釣りに行ったのが最初でした。

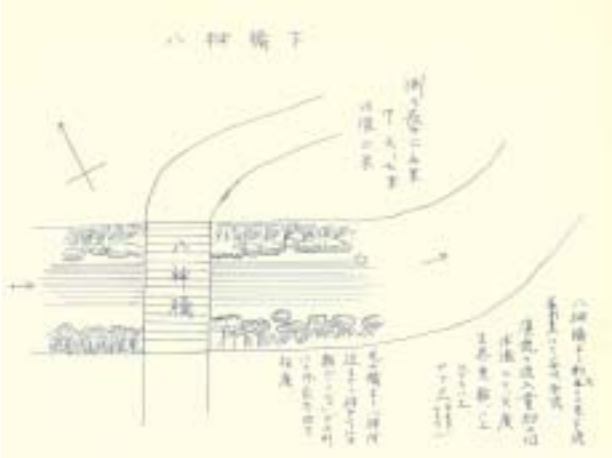
その当時は、小さい私でも短い竹の竿でもいくらでも魚が釣れたように思います。小学生、中学生の時代、友達と夏休み等毎日川に入り水泳や魚とりを楽しみました。この当時に川が危険であるとか、汚い等の理由からプールが出来、子供たちと川との関わりが次第に薄くなり、現在に至っていると思います。神戸川が、昔のように地域の人々が生活の中で欠かせないすがたであってほしいと感じます。ダム建設も工事がほぼ終了した今、たくさんの魚が泳ぎ、たくさんの子供たちが水辺で遊んでいる川の姿を取り戻すべく努力を皆さんとともに頑張りたいと神戸川漁業協同組合60年の節目に感じたところです。

藤原國利 支部長

飯南支部の組合員数は他支部と同様に年々漸減して来ています。要因には高齢化が大きいが、魚が少なくなって川の魅力が低下し、川に関心がなくなった事も大きな要因と考えます。この流域に二つの大きなダム湖を抱える支部域内で、活性化の為に何が可能かを考えると眠りを貪れない。飯南支部流域の豊かさを活用して、昔の賑わいを河川の中に取り戻せば自ずと組合員は増加して来ると考えます。

管理区域が広範囲に及ぶ為に河川監視や集金業務が大変苦労する所でありますが、組合員の協力の下にス

▲ 志津見ダムで消える流域



▲ 藤原支部長が遊んだ八神橋付近

ムーズな支部運営が出来ています。また、地域住民との交流を目的としたイベントも積極的に行い、みんなの漁協として川と親しみたいと思います。魚に関しても、今の自然環境に適応した魚族を育て、飯南町の顔としたいと思います。

神戸川の思い出は沢山あります。子供の頃は今の様な家庭内で遊ぶ玩具がなく、みんな外の山や川で遊んでいました。特に家に前を流れる神戸川でウナギ、モクズガニ、鮎、フナをつけ針や竹籠を使って面白いように捕獲しました。漁の仕方は父親から習いました。相撲を趣味にするような屈強な体型をしていた父親は、急な流れの中でも大きな竹網を支え、山彦するほどの歓喜を上げ楽しそうに捕獲していた姿が鮮明に残っています。小学３年生ごろからは、一人で川に出かけて楽しみました。この様な経験が今の狩人のような自分の素地を作ったかもしれません。そう思うと、神戸川はもう一人の父親であったかもしれません。

【魚種】

フナ、鯉、アユ、ウグイ、ナマズ、ドジョウ、等

第二節　組　合　名　簿

［歴代飯南支部役員］

昭和24年～26年	志々村支部理事　永田　喜久
昭和27年～28年	志々村支部理事　金子　捨吉　　志々村支部長　永井　　章
昭和31年～33年	理事　平田亀次郎
昭和34年～同９月	理事　永田　善久　金子　捨吉　　支部長　永田　善久
昭和34年10月	理事　永田　善久　金子　捨吉　　支部長　永田　善久
昭和35年～37年	理事　永田　善久　金子　捨吉　　支部長　永田　善久
昭和38年～43年	理事　金子　捨吉　　支部長　那須　洋二
昭和44年～46年	理事　金子　捨吉　　監　事　塚原伊太郎　　支部長　那須　洋二
昭和47年～52年	理事　塚原伊太郎　　支部長　那須　洋二
昭和53年～55年	理事　山本　徹夫　　支部長　那須　洋二
昭和56年～58年	理事　総務委員長　山本　徹夫　　監　事　梶原清太郎　　支部長　那須洋二
昭和59年～61年	理事　総務委員長　山本　徹夫　　支部長　那須　洋二
昭和62年～平成元年	理事　副組合長　山本　徹夫　　支部長　那須　洋二
平成２年～４年	理事　副組合長　山本　徹夫　　監　事　梶原清太郎　　支部長　那須　洋二
平成５年～10年	理事　副組合長　山本　徹夫　　支部長　那須　洋二
平成11年～13年	理事　那須　洋二　　代表幹事　永井　　章　　支部長　渡邉　民雄
平成14年～16年	理事　河川委員長　那須　洋二　　支部長　渡邉　民雄
平成17年～19年	理事　渡邉　民雄　　支部長　勝部　忠徳
平成20年～22年	理事　景山　　厚　　監　事　上田　進一　　支部長　藤原　國利

［組合員数］

昭和25年　57名	昭和31年　132名	昭和32年　107名	昭和33年　128名	昭和34年　123名	昭和35年　109名
昭和38年　100名	昭和42年　80名	昭和43年　85名	昭和46年　67名	昭和47年　66名	昭和48年　66名
昭和49年　69名	昭和50年　78名	昭和51年　86名	昭和52年　86名	昭和53年　91名	昭和54年　88名
昭和55年　91名	昭和56年　93名	昭和57年　95名	昭和58年　95名	平成11年　111名	平成12年　107名
平成13年　114名	平成14年　107名	平成15年　109名	平成16年　110名	平成17年　110名	平成18年　103名
平成19年　96名	平成20年　93名	平成21年　88名			

［組合員名簿］（平成21年９月８日現在）（順不同）

理　　事　景山　厚

監　　事　上田進一

飯南支部長　藤原國利

副支部長　内藤真一

専任監視員　渡邊伸幸　山内孝志　勝部忠徳　景山宏俊

組 合 員　上田進一　藤原國利　景山　厚　正木喜代雄　安部栄範　安藤宏嗣　石見嘉広　奥野久督　大河原勝美
景山良久　加瀬部高重　梶原　耕　勝部忠徳　清原英男　後長清治　後長不二夫　笹田　宗　瀬戸　進
田中正人　塚原　勉　戸谷雅之　景山宏俊　一ノ渡明宏　三嶋静夫　原田　勝　藤原澄雄　藤原　学
藤原　悟　丸山一夫　升本　紀　三嶋康司　三浦佳夫　三島　昇　盛政敏彦　山根秀一　和田　康
渡邉民雄　柚木　旻　鹿田富祐　沢田静夫　塚原隆昭　山平勝正　後谷秀樹　後藤　求　和田勝祥
高橋謙二　別木守正　空岡善隆　渡渡信幸　藤原　博　小田真佐生　永井　章　小原佳夫　戸谷和正
名原政雄　太田美徳　田原久雄　正木喜代隆　藤原　勉　加藤延敏　藤原昌一　松田　亘　藤原稔生
森島功武　景山幹雄　石原久司　後藤幹司　渡部國雄　石川　隆　加藤一美　伊藤坂己　山内孝志
中島正博　吉岡　優　宇山智明　宇山道雄　内藤真一　難波康一　深居修二　杉野　伸　田部政弘
三上満義　高橋正博　永妻和博　岩谷尊男　藤原　治　柴田幸男　柴田治紀　小原　彰　森　秀則

第二章　橋　波　支　部

第一節　橋波支部地域概要

来島ダムより流れる神戸川は、飯南町八神を通り抜けると切り立った山肌に威嚇されながら逃げるように上橋波に向かう。この八神から上橋波の間にはブナや楓の広葉樹が広がり、落ち葉で覆われた土壌が神戸川に豊かな水質を与えている。しかし、この大切で貴重な水源を志津見ダムの建設により失うことなる。ダム建設により連続を失った河川は、アユ、ウナギ、ヤマメ、モクズガニを困惑させる事になる。

橋波支部地域はこのダムの直下に当る為に、従来恩恵を受けていた山や沢からの流入する水量が消え、ダムから放水する水に限定される為に、慢性的な水不足に至る。この地域の河川は、東に西大きく蛇行しながら北に向かうが、谷がなく集落が川沿いにある為に、ほとんどの家々が川と深く係わり、また組合員でもある。１本の川で全戸が結ばれている為に、地域は協力しないと生活できないほどである。域内は民家が80戸ほどあるが、本流には波のように11本の橋が架かり、家々を繋いでいる。

神田和夫 理事

父親が昭和47年から昭和55年まで理事として務め、私が平成14年から現在まで理事になり、親子で合わせると18年間の理事を務めたことになります。平成17年からは事業委員長を仰せつかり、放流事業を事業委員の方々と相談しながら運営をしています。特にアユに関しては、産地で性格の違うアユの適性を見抜き、放流地点、放流時期、放流量の計画と実践を行っているが、水量、水質、水温等の変化が遡上や釣果に影響する為に、その時期は気の休まる時がありません。今後は放流から産卵場や魚道の整備を行い、放流から天然遡上の方向にも力を入れた方が良いと思います。

▲ 橋波流域のアユ釣り
（平成21年６月15日撮影）

個人的には大好きなアユの友釣りを他河川の遠征を含めて行っています。全国の釣り大会にも出場し、沢山の釣り仲間ができ、まさしく友釣り状態であります。良い時は優勝したりもしたが、不本意な成績な時が多く、アユ釣りの難しさと魅力を味わっています。

深井徹郎 支部長

神戸川が橋波地域を通る時には大きく蛇行する為に、大水が出た場合は魚が曲がり角の淵に避難します。それを狙って、ツボサデと言う大きなタモ網で掬い上げていました。大水が出ると学校に通学ができない理由になり、ツボサデで魚を獲る喜びが大きかったのを覚えています。川遊びをしないと友達ができないので、少々の苦言は承知で川に興じました。

昔からこのような生活を過ごしているので、支部の組合員とは自然のままでも団結が強いです。３年に１回は親睦会を行っており、皆で広島県三次市まで行き、鵜飼の遊覧船で観光した思い出が強く残っています。また、平成３年にはアユの釣り大会も賑やかで愉快に行いました。今後も組合員との親睦を図り、楽しい支部運営を行いたいと思います。

良い事だけでなく、辛い水害も沢山経験しました。特に昭和39年と平成18年の大水は家の下で川が氾濫して非常に怖かった思い出があります。

今後は、今のように川の事に止まらないで、何事もお互いに助け合う支部として繋ぎたいです。また、河川に関しては水量の問題が一番悩む所ですが、昔のような豊かな川にするには欠かせない要素なので、声を絶やさないで請願し続けたいと思います。

【魚　種】

アユ、フナ、ウナギ、鯉、ウグイ、ハイ、ナマズ、ヤマメ、ドジョウ等

第二節　組　合　名　簿

［歴代橋波支部役員］

昭和27年～28年	窪田村橋波支部　理事・支部長兼任　石橋　久三
昭和34年～同９月	理事　石橋勇二郎　　支部長　杉本　恒雄
昭和34年10月～	理事　和田　軍吉　　支部長　大谷　定義
昭和35年～37年	理事　杉本　恒雄　　支部長　大谷　定義
昭和38年～40年	理事　大野　定義　　支部長　石橋文次郎
昭和41年～43年	理事　杉本　恒雄　　支部長　三島　達一
昭和44年～46年	理事　神田　伊造　　支部長　大野　定義
昭和47年～49年	理事　神田　伊造　　監　事　藤原　　繁　　支部長　石橋勇二郎
昭和50年～52年	理事　神田　伊造　藤原　繁　　支部長　永見　邦夫
昭和53年～55年	理事　神田　伊造　　支部長　永見　邦夫
昭和56年～58年	理事　深井　一夫　　支部長　永見　邦夫
昭和59年～61年	理事　藤原　　繁　　監　事　永見　邦夫　　支部長　石崎　　勉
昭和62年～平成4年	理事　永見　邦夫　　支部長　杉本邦夫
平成５年～７年	理事　永見　邦夫　　総務委員長　代表監事　藤原　　繁　　支部長　杉本　恒雄
平成８年～13年	理事　杉本　恒雄　　支部長　神田　和夫
平成14年～16年	理事　神田　和夫　　代表監事　三島　正人　　支部長　石橋　達男
平成17年～22年	理事・事業委員長　神田　和夫　　支部長　深井　徹郎

［組合員数］

昭和25年　0名	昭和27年　40名	昭和29年　75名	昭和31年　82名	昭和32年　94名	昭和33年　86名
昭和34年　86名	昭和35年　86名	昭和38年　81名	昭和42年　69名	昭和43年　70名	昭和46年　69名
昭和47年　69名	昭和48年　70名	昭和49年　69名	昭和50年　71名	昭和51年　74名	昭和52年　74名
昭和53年　76名	昭和54年　79名	昭和55年　79名	昭和56年　79名	昭和57年　79名	昭和58年　79名
平成11年　74名	平成12年　73名	平成13年　73名	平成14年　70名	平成15年　69名	平成16年　68名
平成17年　70名	平成18年　69名	平成19年　65名	平成20年　65名		

［組合員名簿］（平成21年９月８日現在）（順不同）

理事・事業委員長　神田　和夫

支 部 長　深井徹郎

専任監視員　深井　務

組 合 員　新井龍水　有馬勇也　石橋達男　大野隆義　大谷正樹　大谷健二　神田定成　神田勝徳　神田　仁
春日　宏　勝部栄二　岸美佐夫　栗原昭夫　杉本恒雄　曽田奠三　橘　信則　橘　重成　永見雅樹
神田　勇　藤原悦夫　西村久夫　野津重富　能見宏秋　浜村　栄　浜村　登　浜村真一　藤原　繁
藤原明人　深井溥文　深井　務　藤原　彰　深井健一　深井武彦　三島　等　三島悦夫　三島秀次
三島和男　三島勝美　三島義夫　山本博稔　吉川　茂　和田安夫　渡部　昇　渡部幸雄　吉川喜征
新井藤水　新井清水　深井　明　杉本充己　田部一夫　有馬享二　吉川誠二　景山俊弘　曽田寿人
杉本辰夫　佐貫　守　田辺福夫

第三章　窪　田　支　部

第一節　窪田支部地域概要

窪田支部は神戸川の中流部に位置し、八幡原、一窪田、東村、佐津目、大田市山口町を主に区域としている。本流の神戸川には川北大橋、八幡原橋、井倉橋、栗原橋、滝尻橋、仁江橋、豊田橋が架かり、両岸に広がる集落を結んでいる。又、域内には伊佐川、藤木川、高津屋川が流れ、ミネラルの豊富な水質の源となっている。当初出雲市内今市と大社間の電車運行と沿線への電力供給を行う構想で設立された窪田発電所が大正４年10月に簸川郡窪田村（現出雲市佐田町）に最大出力300Kw（大正６年10月に最大使用水量毎秒2.92トン、有効落差28.79m、出力600Kwに増設）の稼働を始めている。

神戸川は地域の生活に切り離せないほど密着していた為に、古くから河川を大切に守って来た。町では、生活雑排水による河川の水質汚濁防止と、生活様式の向上に伴うトイレの水洗化志向に応えようと、県下でもいち早く、昭和58年から農業集落排水事業を進め、水と共生していくことがいかに大切なものかを地域一丸となって取組んできた。

また、地域のイベントも川を活用したものが多く、手作りイカダでの川下り、第九回島根県内水面漁協鮎友釣競技大会、香川県津田町との子供交流会での鮎のつかみ捕り等が活発に行われた。その伝統は窪田支部を中心に受け継がれ、窪田小学校児童による鮎の放流や地域の人々と鮎やヤマメつかみ捕りが行われている。

窪田地区の漁業

窪田での漁業は本流での鮎漁が中心であり、ウナギ、モクズガニ、フナ、鯉等が盛んである。また支流の伊佐川・藤木川ではヤマメ漁に人気がある。他の雑漁としてウゴイ、ギギの生息もみられる。漁法は竿釣り、投網、四つ手網、ツボサデ、瀬待漁等が盛んである。投網、竿では主に鮎釣りを行った。投網は手作りで、蚕のタママユを煮て糸を引き編んでから柿渋で染め、錘にはスズを入れてつくっていた。その投網漁で面白いのが、蚕のさなぎを潰して、粘土でくるんで団子をつくり淵におき、夜中の11時ごろ投網で鯉、鰻、ハエ、ギギを獲る頃には粘土が解けて次第にさなぎが出る。それに群がる魚を狙った。

▲ 昭和初期に窪田地内で使用した漁具

大水がでるとツボサデを持ち、川岸から魚を掬い捕っていた。

高見　亮 理事

中流域の今昔

今から約50余年前、山から切って焚火で曲りを修正した竹竿で親父のまねをして友釣りを始めた頃は、川の水量も多く、葦・芦等も少なく、川原も広くて春から夏にかけては、自然の遊び場として学校が終わってから日が暮れるまで楽しめたものでした。

そして６月ぐらいからは、うなぎ籠・夜釣り・延縄・ツケバリと、また雨で川が濁れば即竿を持って魚釣りと、遊ぼうと思えばやる事が川だけでも十分満たされていたものです。

また、秋の落ち鮎シーズンには、川が濁れば大人たちが先を争って瀬に立ち込んで瀬待をとれれば夜通しまでやっていたものです。獲るのは、鮎・モクズガニ・うなぎです。

今の子供は、学校にプールがあり、川は汚れて、危険だということもあって、川で泳がなくなり（泳がせないようにした）、川に親しむ機会が非常に少なくなってしまいました。

振り返ってみると、今の40歳代位からこの傾向になってきた感があります。そして川に遊びに行くこと自体が子供の遊びの中からなくなってしまいました。今後

は子供達が川に親しみ・遊ぶ機会をつくり広げていかなければ、近い将来川が見向きもされず、どんどん汚れた川になっていくのではと危惧しています。

窪田支部では、安井支部長の精力的な働きと熱心な総代の皆さんの協力により、小学校の稚鮎の放流活動・魚釣り等、夏の鮎・ヤマメのつかみ取り大会・ニゴイ駆除・河川除草等、本当に熱心に活動をしておられ、感謝をしています。

終わりに当り、組合員の皆様の何かお役に立てればとの思いと子供達の親水活動の一助が出来ればとの思いで、最後の任期を勤めたいと思っております。

岸　修一 理事

神戸川漁業協同組合創立60周年を迎え、組合員の皆様と共に、心よりお祝い申し上げます。

又、発足以来60年と言う長きに亘り、自然豊かな神戸川を守り、維持管理をして戴きました先人の皆様に感謝致します。

ここ数年来の異常気象、温暖化、災害、ダム工事等、神戸川も大変厳しい状態でしたが、河川改修、ダム工事と大方の目途がつき、これからは昔のような「清流神戸川」が蘇るのではないかと期待しています。

私も微力ではありますが、皆様と一緒に地域のかけがえのない宝、神戸川を守って行きたいと思います。神戸川漁協が益々発展する事を祈願申しあげます。

安井敬祐 支部長

窪田支部の支部方針としては、漁協の組合員に限らず地域の全ての皆様との親睦を第一に考えて運営しています。幸いにも、全ての支部組合員の協力を得られ、窪田小学校の生徒やその父兄、お爺さんやお婆さんにも組合主催のイベントに参加して戴き、活気ある支部運営ができていると思います。

川との係わりは結婚してからこの窪田の地に来て以来、今日まで休む事なく続いていますが、当時に比べると魚が著しく減少しました。当時は人々の往来も少ない為に、漁をする人の数も少く、窪田の人が、窪田の地区で、その日食する量だけ捕獲し食卓に出していました。当時は冷蔵庫のような保存するものはなく、余った魚は天日で干し、函に入れてダシとして使用し

▲ 平成21年12月の仁江橋付近

ました。今で言う地産地消です。また、親戚や来客のお土産としても重宝し、皆に喜ばれたものでした。

魚釣りの思い出は沢山ありますが、特に深いものに高津屋地区での鮎釣りがあります。当地は中電発電所の為の中電堰もなく、神戸川も落差の大きい激流になっていた所です。そこで釣れる鮎は大きく激流の為に鼻が曲がり、通称鼻曲がり鮎とも呼ばれていました。いまとなっては激流も鼻の曲がった鮎もアルバムの中でしか出会う事ができません。激流の中を足ナカ（草履）を履いて歩いた足も年とともに衰えてしまいました。

【魚　種】

アユ、鯉、ウナギ、フナ、ウグイ、ハイ、ヤマメ、ナマズ、ドジョウ、ギキ、スッポン等

第二節　組　合　名　簿

［歴代窪田支部役員］

昭和24年～25年	理事　三島雄太郎副組合長　妹尾國次郎　和田　軍吉
昭和26年	理事　三島雄太郎副組合長　妹尾國次郎　今岡　鶴雄
昭和27年～28年	理事　三島雄太郎副組合長　妹尾國次郎　土井豆政則　　支部長　石橋政義
昭和31年～33年	理事　三島雄太郎副組合長　妹尾國次郎　土井豆政則　石橋久三　　監事　土岩　勲
昭和34年～同９月	理事　三島雄太郎副組合長　土井豆政則　吉川保　監事　土岩勲　　支部長　鎌田正俊
昭和34年10月	理事　三島雄太郎組合長　鎌田政俊　田原正雄　代表監事　土岩　勲　支部長　吉川保
昭和35年～37年	理事　三島雄太郎組合長　鎌田政俊　田原正雄　代表監事　土岩勲　　支部長　吉川保
昭和38年～40年	理事　三島雄太郎組合長　鎌田政俊　代表監事　土岩　勲　支部長　山本沢之
昭和41年～43年	理事　山本沢之　栗原　敬　　代表監事　土岩　勲　　支部長　山本沢之
昭和44年～46年	理事　山本沢之　栗原　敬
昭和47年～52年	理事　岩崎恒次郎副組合長　山本沢之　　支部長　栗原　敬
昭和53年～55年	理事　岩崎恒次郎組合長　田原正雄　　監事　栗原俊雄　　支部長　山本沢之
昭和56年～58年	理事　田原正雄事業委員長　山本沢之　　支部長　栗原　敬
昭和59年～61年	理事　田原正雄河川委員長　山本沢之事業委員長　　支部長　栗原　敬
昭和62年～平成元年	理事　栗原　敬　井上晴二郎　　監事　吉川　登　　支部長　三島敬人
平成２年～４年	理事　栗原　敬　井上晴二郎　　支部長　三島敬人
平成５年～７年	理事　土岩　勲　栗原　敬　　支部長　三島敬人
平成８年～10年	理事　土岩勲総務委員長　田原正雄　　監事　中尾富夫　　支部長　吉川　章
平成11年～16年	理事　土岩勲組合長　佐々木伸文　　支部長　吉川章
平成17年～19年	理事　佐々木伸文組合長　高見亮　　監事　鎌田　弘　　支部長　安井敬祐
平成20年～22年	理事　高見　亮　岸　修一　　支部長　安井敬祐

［年代別組合員数］

昭和25年　221名	昭和29年　133名	昭和31年　197名	昭和32年　223名	昭和33年　230名	昭和34年　211名
昭和35年　205名	昭和38年　196名	昭和42年　172名	昭和43年　176名	昭和46年　178名	昭和47年　177名
昭和48年　190名	昭和49年　190名	昭和50年　201名	昭和51年　208名	昭和52年　208名	昭和53名　208名
昭和54年　206名	昭和55年　206名	昭和56年　208名	昭和57年　204名	昭和58年　208名	平成11年　205名
平成12年　206名	平成13年　207名	平成14年　199名	平成15年　190名	平成16年　188名	平成17年　188名
平成18年　184名	平成19年　177名	平成20年　168名			

［組合員名簿］（平成21年９月８日現在）（順不同）

理　　事　高見　亮　　**支 部 長**　安井敬祐　　**副支部長**　岩崎定和　　**会　　計**　山本孝治

専任監視員　岩崎定和

組 合 員　青木　健　青木　望　安食　博　石崎隆三　岩崎克己　伊藤　繁　吉川和孝　和泉　等　石崎　均
板垣　昭　今村久人　今若信義　岩崎侑夫　岩崎友幸　岩崎　茂　石崎正信　岩崎　弘　岩崎定和
岩崎晴信　岩崎　修　石崎純文　岩崎正一　石崎朋良　板垣　栄　岩崎　勝　井上明嘉　一ノ渡幹雄
打田富夫　打田敏博　大内　斉　大谷保男　大矢治男　大谷義夫　大矢義明　神田　基　井上春夫
神田政信　神田直之　片岡幹雄　鎌田　優　鎌田昭人　鎌田一哉　鎌田政治　鎌田幸政　鎌田俊男
鎌田郁夫　鎌田耕司　鎌田悟志　川合和義　神田　久　神田繁男　影山秀治　岸　義行　栗原　猛
小林正樹　小脇富夫　板垣康史　酒井治美　佐々木伸文　佐々木実　首藤定美　杉森筭夫　妹尾アキエ
妹尾良輝　園山寛美　園山　茂　園山文男　園山　彰　田部時夫　竹下義一　高橋修一　田中　操
田中重男　竹下憲一　高見良和　高見善人　竹下晴夫　田中　栄　辻川勝利　土井豆政廣　土井豆勝磨
月森岩夫　中尾富夫　鳥屋尾康則　鳥屋尾泰偉　内藤利昭　内藤圭司　野津博道　土岩　勲　秦野邦夫
藤原治夫　松浦一本　三島廣之　三島幸延　三島　薫　森山　稔　山本和男　山本陽一　山本隆行
山本俊雄　山本普康　山本和美　山本和美　山本　操　安井壽一　山根隆一　山本京太郎　山本　清
山本浩光　安井栄一　吉川　潔　吉川静樹　横山敏明　吉川澄男　吉川　登　吉川　忍　吉川昭栄
吉川正美　吉川克幸　吉川　悟　吉川　勲　竹下　照　神田龍一　栗原　豊　秦野達人　川合守二
板垣正和　栗原たかし　糸賀元次　秦　昭敏　内藤昭二　大谷昌武　月森　清　山本敏明　鎌田　弘
三島敬治　安食富夫　米山啓太　田中実男　黒目孝之　岸　修一　勝田英夫　田原光春　土次誠透
佐々木豊　大熊　等　青木博征　竹内秀文　渡部　博　土井豆修　森山　美　吾郷昭二　伊藤　勇
神田雅志　園山啓治　鎌田幸夫　桐原　勇　山本洋和　三谷敏明　三谷哲雄　銭本三千雄　渡部憲好
矢田俊也　山本憲一　大谷一裕　山本孝治　伊藤國昭　板木雅之　山下喜良　岸　悠介　岩崎純也

第四章　須　佐　支　部

第一節　須佐支部地域概要

大字宮内に鎮座の須佐神社は、須佐之男命を主祭神とし稲田比売命と、その父母神である足名椎命、手名椎命を配祀してる事は余にも有名な話である。須佐之男命が「此の地は狭い地であるが住み良い処である。だから自分の名は木や石につけず此の土地につけよう」の考えを基に須佐の名を土地に留めた。又、現在の佐田町の由来は須佐の佐と窪田の田をとって佐田と命名したとある。

須佐支部の域内には須佐神社の横を流れる須佐川と波多地区から北流する波多川があり、本流を臨む所で合流している。河川が三瓶山の噴火後に堆積した土砂、堆積物を押し流しながらつくられた為に、急峻な地形に発達し、起伏の富んだ川となっている。波多川の上流部には広葉樹林が広がり、豊かな水源と水質を形成してる。大正13年６月に乙立発電所の取水ダムが八幡原に設置されると、乙立町までの神戸川本流は須佐川・波多川からの水量に頼る事になる。

安食一成 理事

昭和24年に生まれた私は、神戸川漁業協同組合の歴史とほぼ同年となり、無事還暦を迎える事になり、一層感慨深くその歩みを回顧しています。

少年時代の神戸川は水量も多く、魚の量も魚の種類も豊富で、楽しく遊べたものです。我が家は神戸川から歩いて１分の所にあった為に、庭のような感覚で竿を持ちながら行ったり来たりしたものです。

近年は地球環境の変化による温暖化のもたらす気象の変化、有害鳥獣等による食害、広葉樹の減少による山林の保水力の低下等々により、川の環境は大きく変貌しています。また、平成18年の大水害の復旧工事により護岸整備が一層拍車をかけて、魚の棲みかや遊び場を奪い去っています。

この様な背景を考慮すると、放流から産卵場整備による天然遡上の促進や産卵期の禁漁区設定に移行する必要があると思います。

今後は一理事として、魚にとって魅力ある河川造りに励み、活気のある漁業組合を目指したいと思います。

▲ 平成21年12月の魚切淵付近

杉山寿美 理事

昭和20年代の子供の遊びと言えば、春秋は川釣り、夏休み中は午後ともなれば昼食もそこそこに川に走ったものです。手にはメガネと箝を持って目的の場所に急いだものです。何時も同じ淵で、１時間程度泳いだ後は持ってきた漁具で淵の上下流の川を這いずり回って魚を獲っていた。魚種は大体がウグイ、アユ、ウナギ、ハエ等で20匹程度は常に獲れ、川端にある柳の枝を折って魚を通し、得意満面で家路についたものです。他の遊びにはビー玉、ペッタン、コマ等の遊びがあったが、やはり一番は川遊びであった。比較してはいけないかもしれないが、今の子供達が通う珠算、ピアノ、英語塾やスポ少のクラブ活動に時間が束縛されて自由に遊ぶ時がない現代っ子と昔のように束縛されない時を過ごした今の大人達ではどちらが人間らしい豊かな人格が出来るだろうかと案じている此の頃です。

河川の状態を見ると、昭和38年災害以降の度重なる災害により、河川改修や災害復旧工事が数多く施工された為に形状が昔と全く変わってきました。現在では護岸はコンクリートブロックや擁壁で固められ、河床は通水を良くするために、大きい岩は取り除き、平面的に整備され魚類の生息域が無くなってしまっています。

今後の改修に於いては、洪水災害の防止はもちろん第一目的ではありますが、淵は残し、河床も魚類が生活しやすように、行政と施工業者、そして漁協が連帯して護岸整備を行う事が望ましいと考えています。

長島智年 代表監事

戦後間もない苦境の中から発足した組合は60年の歴史を終え、今日の発展を迎えた事は歴代の役職員をはじめ、組合員の団結と協力、そして行政並びに各種諸団体のご指導ご支援の賜であると共に、幾多の災害やダム等諸課題の克服があったお陰であり、関係者の皆様に深く敬意と感謝を表す次第です。

私は支流の須佐川近くで生まれ、以来69年間一度も神戸川付近から離れた生活はありませんでした。一生をこの川に見守られることに改めて感謝の思いを深めています。大自然の中で川や水が果たす多面的役割や機能によって人や動植物が延々とその恵みを受けて生きて行けます。このような仕組みを60周年にあたり感謝の心を新たにして、少しでも良い環境を未来永劫に申し送る役割を背負っていると痛感しています。

監事の立場としては、現状の組合運営は昨今の景気低迷で公共事業の減少等での影響も心配な一面はあるものの、結果として良好な推移を歩む事になると考えます。財務内容も健全な状況にあり、今後は更なる創意工夫を重ね、すべての生態系や環境に配慮しつつ一歩一歩組合が前進発展されるよう願っています。

板垣　勝 支部長

本来ならば支部一体となってイベント活動や地域と交流活動をもっと積極的に行わねばならないが、組合員が繁忙で出来ていません。昔の神戸川の魚はそれ自体大きく、ウグイも大きかったです。鮎かけボッカ、砂ドジョウ、八目ウナギは沢山見かけましたが、今は姿を消してしまいました。漁具はつけ針にチョロケン

▲ 波多川、須佐川が合流付近

▲ 波多川（平成21年12月撮影）

（よしのぼり）を付けて竿で釣りました。良い思い出には鮎80匹を窪田小学校前で釣った記憶があります。また、竿で鮎を釣っていると他の釣人と会話ができて楽しかったです。

学校から帰ると従兄弟達と毎日神戸川で魚を釣っていました。オイカワを川虫で釣ったり、遊鮎クラブを作って釣り大会を開いたり、遊びの全てが川遊びでありました。釣り友達と九州熊本の球磨川に遠征したこともありました。映画の釣りバカ日誌に登場するモデルの様な生活を送っていました。今の子供達にもこの様な生活を経験させてやりたいが、それには昔のような魚の住めるような川が必要と思います。水量をもっと多くしないと魚が住めないし、落葉樹を多く植えて保水力とミネラル水を神戸川に流すようにしなくてはなりません。保安林の影響もあるのではないかと思います。

今後は出来る限りイベント活動や交流活動を活発に展開して、子供達に川の魅力や川の大切さを伝えたいと思います。

【魚　種】

アユ、鯉、フナ、ウナギ、ウグイ、ハイ、ゴズ、ヤマメ、ギギ、ナマズ、ドジョウ、サケ、マス、スッポン、エビ、モクズガニ等

【漁　法】

ウナギは籠、釣り、瀬待ち漁。アユは友釣り、投網、チャグリ、瀬待ち漁。その他の魚種は釣り漁。

第二節　組　合　名　簿

［歷代須佐支部役員］

昭和24年～25年	東西須佐支部理事　重富　広吉　今岡　鶴雄
昭和26年	東西須佐支部理事　重富　広吉　鐘築　繁雄
昭和27年～28年	東須佐支部理事　重富　広吉　西須佐支部理事　今岡　鶴雄
昭和31年～33年	理事　鐘築　繁雄　三原　源吉
昭和34年～34年9月	理事　鐘築　繁雄　三原　源吉　支部長　小林　修一
昭和34年10月	理事　鐘築　繁雄　三原　源吉　小林　修一　支部長　荒木寿三郎
昭和35年～37年	理事　鐘築　繁雄　三原　源吉　支部長　滝尻　義之
昭和38年～40年	理事　鐘築　繁雄　三原　源吉　監　事　小林　修一　支部長　荒木寿三郎
昭和41年～43年	理事　鐘築　繁雄　三原　源吉　支部長　滝尻　義之
昭和44年～46年	理事　滝尻　義之　小林　修一　支部長　山本　弘
昭和47年～49年	理事　滝尻　義之　小林　修一　監　事　今岡　秋吉　支部長　山本　弘
昭和50年～55年	理事　山本　弘　三原　富夫　支部長　田部　繁敏
昭和56年～58年	理事　山本弘副組合長　三原　富夫　監　事　安食　春信　支部長　田部　繁敏
昭和59年～61年	理事　山本弘副組合長　三原　富夫　支部長　田部　繁敏
昭和62年～平成元年	理事　小林　修一　三原　富夫事業委員長　支部長　田部　繁敏
平成２年～４年	理事　山本秀登志　三原　博　監　事　藤原　治夫　支部長　田部　繁敏
平成５年～10年	理事　山本秀登志　田部　繁敏　支部長　石川　幸義
平成11年～13年	理事　山本秀登志　石川　幸義　監　事　岩崎　芳広　支部長　安食　一成
平成14年～16年	理事　山本秀登志事業委員長　石川　幸義　支部長　安食　一成
平成17年～19年	理事　山本秀登志　安食　一成　支部長　杉山　寿美
平成20年～22年	理事　安食一成河川委員長　杉山寿美　代表監事　長島　智年　支部長　板垣　勝

［組合員数］

昭和25年　139名	昭和29年　208名	昭和31年　119名	昭和32年　160名	昭和33年　181名	昭和34年　173名
昭和35年　159名	昭和38年　165名	昭和42年　145名	昭和43年　151名	昭和46年　163名	昭和47年　167名
昭和48年　172名	昭和49年　190名	昭和50年　200名	昭和51年　206名	昭和52年　203名	昭和53年　204名
昭和54年　210名	昭和55年　209名	昭和56年　207名	昭和57年　206名	昭和58年　210名	平成11年　213名
平成12年　215名	平成13年　215名	平成14年　208名	平成15年　208名	平成16年　204名	平成17年　202名
平成18年　197名	平成19年　196名	平成20年　186名			

［組合員名簿］（平成21年９月８日現在）（順不同）

理事・河川委員長　安食一成　**理　事**　杉山寿美　**代表幹事**　長島智年

支 部 長　板垣　勝

専任監視員　今岡幹夫

組 合 員　安食　勇　安食啓義　安食春男　安食守男　藤原　豊　安食寿久　安食正道　安食羊一　荒木　孝
安食泰弘　石橋　孝　板垣貞治　板垣利夫　板垣　孝　板垣成二　板垣　武　今岡幹夫　今岡昭三
石飛節夫　岩崎和人　石橋重夫　石橋美法　板垣信夫　今岡仁左恵　岩島利順　板垣年美　今岡末次
大熊隆司　大田則貴　鐘築　威　神田明和　神田洋助　桐原大輔　桐原隆一　桐原房和　切東一夫
黒目寛治　小林英治　佐貫　豊　佐貫　忠　佐貫明良　佐貫保博　佐貫　彰　佐貫和広　佐藤文雄
重富正夫　新宮勝美　杉山喜良　杉山利夫　杉山和志　杉山邦市　須佐建紀　曽田太一　曽田康万
伊達幸雄　伊達　實　田部敏雄　高橋　衛　田中由幸　竹下宣行　石橋尚彦　石川幸義　戸舎一郎
和田幸一郎　三代一之　田中宏幸　和田毅晃　土出治諸　出口　茂　願永信夫　野井　実　今岡春樹

組合員

馬庭澄夫	願永直也	板垣　洋	和田智宏	藤原　薫	佐貫一充	古屋　敦	石飛幸市	上野義夫
須藤総男	安食芳夫	岸　孝明	八幡純雄	角森禧六	常松　弘	角森実伸	長島広典	長瀬勝俊
内藤幸吉	永井吉郎	長島良直	西村広志	西村　登	藤原　進	藤原俊一	藤原善伸	藤原洋之
藤原昭範	深井寿美	馬庭利夫	馬瀬一伸	馬庭　務	三原達吉	三原龍一	三原憲三	三原英司
森山　衛	山本洋司	湯山　洋	横山享市	森山友三郎	吉川春美	和田　弘	渡部啓市	和田　章
和田　勉	和田俊郎	和田　実	若槻真市	日野　勝	藤原照司	伊藤孝志	長島端雄	石飛憲次
石橋正慶	重富悦雄	若築弘義	伊藤篤男	角森和雄	大崎源一	藤原功雄	和田　稔	岸　郁夫
長島　斉	山本秀登志	長島岩衛	野尻孝二	桐原春夫	長島　歩	安食洋一	常松富夫	藤原和則
周藤俊雄	田部秀夫	桐原　裕	深石政朋	宇原　規	田部重夫	岸　昭男	杉山達範	長島　督
勝部峯夫	板垣仁志	和田　薫	荒木　誠	板垣芳雄	長瀬　孝	藤原末次	角森英美	多々納勝
間水昭一	竹下忠幸	大島一雄	常松　悟	川端義久	桐原豊治	神田茂己	古家万範	木村守登
今岡克義	岩島幹悟	門村裕久	和田毅晃	土出治諸	山口　茂			

▲ 須佐支部　大熊由市氏保有の鑑札
（左上の鑑札は、昭和24年 飯石郡西須佐村 大熊由市 交付番号 第697号 交付年月日 昭和24年12月17日とある）
以後、政夫氏、隆司氏と受け継ぐ

第五章　乙　立　支　部

第一節　乙立支部地域概要

乙立支部の流域は、神戸川が女亀山から北流し、暫くは落差の少ない穏やかな流域を通るが、乙立支部流域に入ると突如として両岸に神々しい天然の大屏風岩が迫り、川幅も狭くなり流速も上がる難所に迎えられる。その後は再び平穏さをとり戻し大社湾に向かうが、一時の激しい男川の表情をこの流域では見せる。その為に、簸南三村（乙立、窪田、山口）及び東西須佐村の薪炭、木材は陸路ここまで運搬して、数軒の問屋に集積し、水量の加減を見計り高瀬舟に積載又は筏に組んで川を下り、馬木灘、古志灘（昔は貨物を陸揚げする川岸を俗に灘と呼ぶ）に陸揚げしていた。盛んに行われていた明治時代までは乙立船頭とまで呼ばれ、運搬業は活発に行われていたが、幹線道路の改修や出雲鉄道の開通で次第に薄らいでいった。

一方で、人々を寄せ付けないロケーションで大屏風岩を抱く立久恵峡は、春には若葉に出会い、夏には斜影に伏し、秋には紅に迎えられ、冬には白雪に濡れる四季の移ろいを不味公として知られる松江７代藩主松平治郷達も馬木から川舟でさかのぼって遊覧したように、古くから地域住民の憩いの場とし親しまれていた。

▲ 現在の立久恵峡

耶馬渓とも称されている１㎞ほどの川沿いには遊歩道が整備され、二つの吊橋を渡ると一周を散策できる。

水産業は本支流に棲む鮎、鯉、鰻、鮒等が主に採捕が盛んに行われていた。特に鮎は群れをなして浅瀬に銀鱗をひらめかし、漁夫の胸を躍らせていた。しかし、

▲ 現在の立久恵峡吊橋下流

古志橋下流に神門堰が設けられてからは、稚鮎の遡上を妨げ漁獲の量が著しく減少している。

また、立久恵峡から２㎞上流には大正13年６月に乙立発電所が建設され、取水ダムのある八幡原地区から放水口までの水量は須佐川や波多川の支流に頼っている。その減水の影響を受けて沢山の淵が消滅している。

神門堰や取水ダムが出来る以前は、激しい男川の流れで立久恵駅前、亀が淵、乙立橋上下流、発電所前、向名鉄橋上下流、谷合部落吊橋上流に深さ６ｍ～2.５ｍの淵が点在していた。この淵で生息していた魚族が生活圏を失い、漁場価値を低下させて行き、現在に至っている。

片寄　巌 理事

私が子供の頃の神戸川は流量に恵まれた多くの魅了がある清流でした。夏場は子供達の水遊びの場所となり、泳ぎや魚獲りに夢中となり、身近な川で上級生と一緒に遊び行動することを通し、教え合ったり触れ合ったりする楽しみを味わったものです。私達にとって身近な河川の生態系は、水質汚染や治水利水等を目的とした工事によって傷つけられ、その姿を変えました。ダム建設時に想定された影響評価を大きく超えた状況を作り出し、又、近年の温暖化と集中型降雨の傾向はダムの直接的な影響と複合的に作用し、環境悪化や不安定化をますます複雑にしています。神戸川に於いても来島ダムが建設され、水系の異なる江川に送水することになり、水量は激減し河川は荒廃しました。そこに斐伊川、神戸川の治水事業が具体化し「神戸川水系工事実施基本計画」が策定され、上流に志津見ダム、

下流に放水路による斐伊川から分流が計画され、現在の治水工事が始まり、今に至っています。途中、昭和18年の豪雨による甚大な被害を受けて、佐田、乙立地域は「河川災害関連事業」、朝山地域は「広域基幹河川改修事業」による復旧及び改修工事も加わり、起伏に富んだ河床が失われ、魚の生息場や餌場までなくなりました。

各工事も最終工程となり、志津見ダムは昨年末から「試験湛水」が始まり、今春完成となり、漁協も漁業権、ダム運用面も含めて何らかの対応対策が必要になってきました。ダム下流の河川環境保全を目的としてダム洪水調整容量に一時的に流水を貯留し、アユ遡上期に一時的な流量の増加等、運用の適切な調整を行政機関に要望することが必要です。神戸堰も今春に完成運用となり、整備された両岸の魚道の機能等にも不安な面もあるが、春にアユが元気で遡上する姿を待ち望んでいます。

漁協として自然繁殖のできる河川環境の再生に向かって組合員はもとより、地域住民、専門家、関係機関及び行政関係者など多様な主体と連携して取組むことが必要となります。又、組合員の理解を得ながら、禁漁期、禁漁区等を大胆に見直すことも大切です。「しまね鮎づくりプラン」の理念である天然遡上アユの増大に向けての取組みである産卵親魚の保護及び産卵場の整備も早急な課題です。組合運営に於いては、来島ダムの年次補償金及び漁業振興基金からの支援は大きく役立っています。組合の健全化には欠すことが出来ない資金となっています。又、工事漁業協力金は工事も終盤に近づき大きく減少し、これからの事業運営に少なからずの影響が考えられます。組合員の高齢化も着実に進み、基盤の縮小化も進む可能性もあり、創立60周年迎えたのを契機に新たな出発点ととらえ、長期的な視点から漁協の目標、目的を的確に把握して組合組織の確立を目指すことが必要です。新しく出来上がった神戸川が楽しく、癒しの場所となるように漁協も取組みます。組合員の皆さんのご理解とご協力をお願いします。

乙立支部の方針

飯塚　傑 支部長

支部の方針としては、子供達が川で遊べる機会を提供することで地域住民とのふれあいを重視しています。しかし、子供達が自主的で積極的に加わって欲しいですが外で遊ぶ子供を見かけなくなりました。私らの子供時代には遊び場が川と山しかなかったので、皆外で集団になって遊んでいました。支部長を受けてからは昔を思い出しながら積極的に地域の子供達をイベントに誘ってきました。その成果か少しずつ地域の子供達にも川や魚の見方に変化が表れたように感じます。小さいころはつけ籠で鰻をとり、ハエ、ゴギ、ボッカを沢山獲りました。使用した漁具は、うなぎには穴釣りをする為に最初は竹に直接針をつけていましたが、後には糸に針を（ジジくり）濁り水が出ると、ミミズを糸に巻いて数珠状にして鰻を釣り上げることもしました。いい思い出は沢山あるが鰻のつけ籠で最多で20本ぐらいとれた記憶があります。昭和35年当時、学校の行き帰りに種箱にとった鮎を入れておき、帰りに立久恵で売っていました。

当時、１匹が40円か50円で少なくない小遣いになっていました。伝統の四ッ手網も手がけました。四ッ手に関しては、竹の選定から教え、木枠の組み方、網の張り方、漁期のタイミング、設置場所と細かく残しておきたいと思います。また、盛んに行われていた瀬待ち漁も残しておきたいです。

▲ 子供達との放流イベント

第二節　組　合　名　簿

［歴代乙立支部役員］

昭和25年～26年	理事　今岡　栄、大江儀右エ門
昭和27年～28年	理事　小村良友　　監事　大江儀右エ門
昭和31年～33年	理事　田部関二郎
昭和34年～34年9月	理事　持田恒定　別所秀雄　　支部長　田部関二郎
昭和34年	理事　亀滝峯定　後藤敏徳　　支部長　大江義右衛門
昭和35年～37年	理事　亀滝峯定　後藤敏徳　　支部長　大江義右衛門
昭和38年～40年	理事　別所秀雄　　支部長　田部関二郎
昭和41年～43年	理事　伊藤武義　　監事　田部関二郎　　支部長　後藤敏徳
昭和44年～49年	理事　伊藤武義　　支部長　後藤敏徳
昭和50年～52年	理事　伊藤武義　　監事　田部関二郎　　支部長　後藤敏徳
昭和53年～55年	理事　伊藤武義　　支部長　宇森秀吉
昭和56年～58年	理事　亀滝峯定　　支部長　宇森秀吉
昭和59年～61年	理事　亀滝峯定　　監事　伊藤武義　　支部長　宇森秀吉
昭和62年～平成元年	理事　亀滝峯定　　総務委員長　支部長　宇森秀吉
平成２年～４年	理事　亀滝峯定　　支部長　宇森秀吉
平成５年～７年	理事　亀滝峯定　　監事　持田国夫　　支部長　宇森秀吉
平成８年～10年	理事　亀滝峯定　　組合長　支部長　大江　博
平成11年～13年	理事　大江　博　　支部長　飯塚　傑
平成14年～16年	理事　大江　博　　監事　片寄　巌　　支部長　飯塚　傑
平成17年～19年	理事　片寄　巌　　支部長　飯塚　傑
平成20年～22年	理事　片寄　巌　　総務委員長　支部長　飯塚　傑

［組合員数］

昭和25年　186名	昭和29年　193名	昭和31年　90名	昭和33年　119名	昭和34年　113名	昭和35年　109名
昭和38年　115名	昭和42年　102名	昭和43年　108名	昭和46年　114名	昭和47年　116名	昭和48年　112名
昭和49年　116名	昭和50年　117名	昭和51年　123名	昭和52年　123名	昭和53年　126名	昭和54年　126名
昭和55年　126名	昭和56年　125名	昭和57年　124名	昭和58年　124名	平成11年　119名	平成12年　117名
平成13年　113名	平成14年　112名	平成15年　112名	平成16年　117名	平成17年　116名	平成18年　112名
平成19年　104名	平成20年　100名				

［組合員名簿］（平成21年９月８日現在）（順不同）

理事・総務委員長　片寄　巌　　**支部長**　飯塚　傑　　**副支部長**　伊藤清志　　**会　計**　片寄　巌

専任監視員　伊藤清志　　**支部役員**　今岡龍夫　今岡芳美　伊藤康人　園山　勲　曽田重敏　別所　彰　別所　豊

組　合　員　吾郷秀紀　吾郷岩雄　吾郷章次　安食紀宣　吾郷康夫　吾郷光徳　吾郷和久　糸賀靖彦　伊藤彰祥
伊藤晴富　今岡憲司　伊藤敏行　伊藤勝己　伊藤康人　今岡英吉　今岡盛義　糸賀正和　伊藤清志
伊藤隴一　伊藤滋矩　飯塚　傑　大江　博　大江勝夫　小村憲昭　大江照夫　大江茂樹　門脇義夫
亀滝　稔　亀滝純児　片寄　巌　吾郷　責　片寄隆一　別所利幸　門脇必勝　黒目正司　後藤充完
近藤祐司　後藤政司　坂根真治　坂根　滋　坂根麻雄　坂本勝美　曽田重敏　曽田　稔　園山雅樹
園山　勲　園山孝旨　曽田　洋　曽田幸男　曽田修志　田辺良治　高尾久啓　中島浩統　日野英忠
別所　彰　別所祐司　別所朝夫　別所慶三　別所民雄　松本庄一　持田伸之　持田茂雄　持田一男
持田岩男　今岡春雄　泉　春光　今岡芳美　今岡龍夫　坂根良和　曽田徳幸　飯塚照道　園山明男
亀滝和利　竹田俊夫　松本忠三　野々村武　門脇重富　大江嘉都　別所　豊　今岡　茂　竹下和良
小村恭一　田辺宣弘　片寄　勉　今岡茂紀　持田光雄　辻村　賢　渡部博文　今岡敏美　近藤淳一
今岡　崇　飯塚哲朗　持田浩一　坂根孝司　安食昭吾　今岡光政

第六章　朝　山　支　部

第一節　朝山支部地域概要

朝山支部の域内は主に所原町から馬木町周辺と支流周辺を管轄する支部である。本流は頓原川、波多川を合流し、乙立町に入り、立久恵の渓谷を通り、朝山地内で小野川、稗原川を併せて古志町に流路をとり、園町、長浜町を抜けて日本海に注ぐ。支流には小野川、山後尾川、大月川、須原川、安谷川、段原川、迫谷川、大谷川、稗原川がある。正徳三年（1713年）には、堅牢無比と言われた大井堰を築造し、十間川に取水する。

▲ 昭和30年頃の大井堰

域内の川は二つの表情を持つ。いつもは、澄んだ水が豊富な流れの中で、夏には多くの鮎が泳ぎ、うなぎや鯉もフナ、ナマズと魚種も豊富であり、川の近くに住む人々は、毎朝洗濯をし、大根や白菜、ジャガイモやサツマイモを洗い、子供達も川遊び楽しみ、川を運行する筏、高瀬舟で割木、貫目木、竹材を朗々と安来節や博多節を謡いながら流下したとある。しかし一度牙をむくと、一変して暴れ川となり、道も田畑も家や人々の命さえも奪い、全てを飲み込んで流れる。この恩恵と惨禍の歴史が古代より幾たびか川筋を変化させている。神戸川の名称もこの地域から生まれている。古代以来、明治29年までこの地域を神門郡と称し、その最上流にあたる所原地区を神戸里と呼んでいた為に、神戸里からいずる川として神戸川と呼ぶように至ったらしい。又、立久恵峡にも多くの吊橋があるが、馬木吊橋が神戸川の最初のもので、近隣の評判になった。

成相友弥 理事

来島ダム建設、志津見ダム建設、斐伊川放水路建設等の大工事、昭和38年、平成18年の大水害等の幾多の苦難を乗り越えて、神戸川漁業協同組合が還暦の60歳を迎えられた事には感慨も一入です。

朝山支部の流域は殿森堰から馬木高見堰までを管轄しているが、上記した平成18年７月の集中豪雨による家屋、田畑、河川等損壊には我が目を疑うほどに甚大であった。その為に、それ以降の支部活動は工事事務所のように、工事概要の確認、汚染の監視、放流や魚の活動に影響がないような工事工程の確認に終われ、魚の話題よりは工事の協議に明け暮れる毎日であったように思います。組合員から汚水が出ていると報告を受けると工事事務所に飛んで行き注意をするが、暫くすると又汚水が発生するので再び事務所に行くようなありさまでした。

支部の域内には３ヶ所の堰がありましたが、現時点で２ヶ所の堰が撤去され、やがて最後の堰にも別れを告げる日がやって来ます。その状況になった時にアユを筆頭とする魚族がどのような動きをするのか、どんな影響が出るのか不安が尽きない。川幅も拡大した為に平瀬が多くなり、工事の為に搬出した為に小石も減少し、誰が魚族を守ってやれるのかと思うと、安気として日々を送れなでいます。

また、川鵜の被害も年々大きくなっている。大井堰の上下に、旧道の山腹を塒としている鵜が飛来する。地元の猟友会に依頼して駆除はしているが、憎らしいほど捕獲できない。監視の仕事がまた一つ増えた感であるが、これと言った打開策は見当たらない。

平成21年10月10日に大井堰の下流部で産卵場整備を行いました。たかはし河川生物調査事務所の農学博士高橋勇夫先生のコンサルを受け、島根県水産事務所、内水面浅海部、国土交通省、施工業者、当組役員の方々と一緒になって浮石となる小石を集め、流域と流速に変化を与え、親アユが産卵する環境を造った。結果、産卵はしているが、神門堰まで流下するのに３日間も用し、汽水域までのタイムリミットの４日間で到達するのが厳しい事が分かりました。因果関係は定かではないが、工事、流速、堰のダム湖化等が推測できます。また、その他にも禁漁区域、禁漁期間等の規制の課題

も改善を要する。まだ産卵場整備は始まったばかりで、これから地元組合員と協議を重ね、朝山支部の各論と漁協としての総論の中で進めて行かねばならないと考えます。はっきりと言える事は、時代は放流主体から産卵場を整備して天然遡上を増殖する方向である事には間違いありません。

母なる朝山支部として、微力ながら組合運営の全力を尽くしたいと決意を新たにしています。

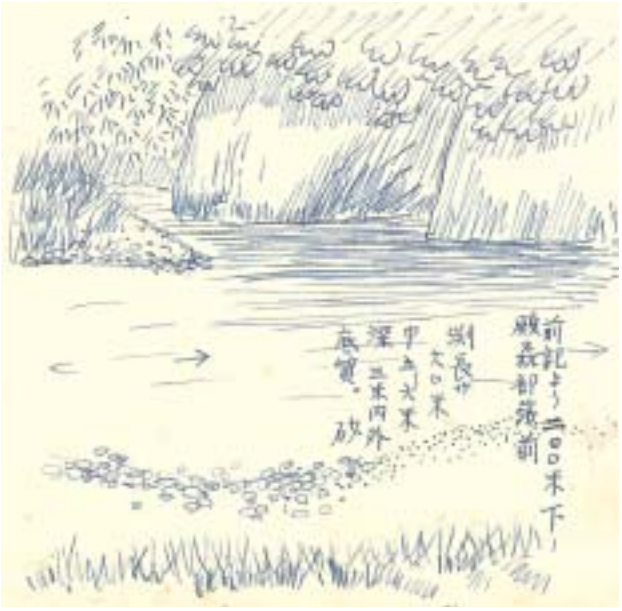
▲ 平成21年12月撮影大井堰

増原克己 支部長

支部の方針は組合員の親睦と地域住民、特に子供達とイベントに力を注いでいる。以前からあるイベントを受け継いでいるが、子供達に毎年期待され地域に定着した感があります。今後も継続して行いたいが、費用との兼ね合いもあるので経済状況にも配慮する必要がある。鮎の釣り大会も有志で行っているが、参加者を増やして活発な活動にしたい。支部の総会は３年に１度行っているが、総会と言う形でなくても良いが、組合員間の情報交換の場を広げたいと思います。

昔の神戸川には瀬や淵が沢山あり、投網を打つ事もできないほど深かった。しかし、河川の治水工事の為に瀬や淵が消滅したり浅くなってしまって、魚の棲家が少なくなってしまった。子供の頃には河川内にイカダがあり、その付近でチョンカケで鮎を釣った。鮎、ウナギ、鯉釣り（10月ごろ）、すっぽん、フナ、ウグイ、カニ、ギギ（朝山地域）、落ち鮎（朝山地域瀬鮎と言う）と川っ子だった。いや、自分では分からないが今でも川っ子だそうだ。

友人も川の関係が多く、生活も人間関係も川を外しては考えらない。知谷橋、木村橋、谷間橋、桜堰（撤



▲ 昭和30年代の殿森付近の淵

去予定）、木村堰、殿森堰と懐かしい遊び場です。漁具には網、竿、四つ手網、まれ待ち漁（投網　朝山地域）、うなぎ箱があり、チャグリ漁が盛んだった。

今後の神戸川には以前豊かさを取り戻す為に、河川に石を入れて河床の整備が必要だと思います。深みをつくって溜まる所を造り、河床を下げ淵を造り、維持して欲しいと思います。

▲ 平成21年殿森桜並木より大山淵を撮影（撮影日12月）

【魚種】

アユ、鯉、フナ、ウナギ、ウグイ、ハイ、ゴズ、ヤマメ、ギギ、ナマズ、ドジョウ、サケ、マス、スッポン、エビ、モクズガニ等

第二節　組　合　名　簿

［歴代朝山支部役員］

昭和24年	朝山村支部理事　伊藤伊一　落合静
昭和25年	朝山村支部理事　落合　静　高橋礒助　伊藤伊一
昭和26年	朝山村支部理事　落合　静　高橋富由　高橋礒助
昭和27年～28年	朝山村支部理事　落合　静　　支部長兼任　高橋富由　　監事　高橋礒助
昭和31年～33年	理事　小村良友　伊藤清吉
昭和34年～同9月	理事　落合　静　伊藤伊一　　監事　成相繁夫　　支部長　伊藤伊一
昭和34年10月	理事　落合　静　伊藤伊一　　監事　成相繁夫　　支部長　伊藤伊一
昭和35年～37年	理事　伊藤伊一　落合　静　　監事　成相繁夫　　支部長　伊藤伊一
昭和38年～40年	理事　支部長兼任　武田嘉太郎
昭和41年～43年	理事　武田嘉太郎　　支部長　落合　静
昭和44年～46年	理事　武田嘉太郎　　監事　高橋　保　　支部長　成相繁夫
昭和47年～49年	理事　武田嘉太郎　　支部長　成相繁夫
昭和50年～52年	理事　太田幸吉　　支部長　渡部順一
昭和53年～55年	理事　成相繁夫専務　　監事　飯塚義一郎　　支部長　渡部順一
昭和56年～61年	理事　成相繁夫専務　　支部長　増原　清
昭和62年～平成元年	理事　成相繁夫専務　　監事　高橋　保　　支部長　増原　清
平成２年～７年	理事　成相繁夫専務　　支部長　奥井繁夫
平成８年～10年	理事　奥井繁夫　　監事　福代晃夫　　支部長　伊藤修
平成11年～16年	理事　福代晃夫　　支部長　伊藤　修
平成17年～19年	理事　河川委員長兼任　福代晃夫　　代表監事　伊藤　修　支　部長　成相友弥
平成20年～22年	理事　成相友弥　　支部長　増原克己

［組合員数］

昭和25年　121名	昭和27年　89名	昭和29年　136名	昭和31年　105名	昭和32年　128名	昭和33年　126名
昭和34年　118名	昭和35年　124名	昭和38年　107名	昭和42年　88名	昭和43年　92名	昭和46年　93名
昭和47年　96名	昭和48年　106名	昭和49年　114名	昭和50年　115名	昭和51年　124名	昭和52年　127名
昭和53年　131名	昭和54年　131名	昭和55年　132名	昭和56年　136名	昭和57年　140名	昭和58年　141名
平成11年　166名	平成12年　167名	平成13年　164名	平成14年　158名	平成15年　156名	平成16年　156名
平成17年　153名	平成18年　149名	平成19年　148名	平成20年　143名		

［組合員名簿］（平成21年９月８日現在）（順不同）

理　　事　成相友弥　**支 部 長**　増原克己　**専任監視員**　成相　豊　**副支部長**　今岡恭一

会　　計　三崎重美

組 合 員　青木輝行　吾郷　博　今岡　宏　伊藤順一　伊藤義己　伊藤恵一　飯塚新司　伊藤　修　石橋猛博
飯塚弘光　飯塚元貴　飯塚敏之　石橋節郎　石野周二　宇畑重康　奥井芳夫　伊藤　健　今岡　清
奥井英夫　奥井　隆　太田要吉　奥井　博　大谷智行　大国一成　奥井郁夫　小村　孝　勝部繁夫
高野嘉鹿　児玉芳夫　佐藤仁志　須谷生男　武田　豊　高橋真二　谷口裕敏　高橋直好　高橋義一
高橋秀明　高橋　実　高橋孝幸　高橋　徹　高橋功一　成相正美　成相芳孝　成相　悟　成相光雄
広戸嘉三　藤原由一　鳥屋尾克己　藤原　茂　藤原　勉　福代晃夫　増原　茂　三崎俊夫　森山利雄
矢田清治　鳥屋尾健史　吉田良美　吉田厚一　奥井義明　吾郷鹿三　大谷哲夫　飯塚　栄　高橋正巳
鳥屋尾幸雄　成相卓雄　永田律郎　高橋真司　高橋芳幸　矢田和正　増原文男　石飛　実　福島三千成
吉田義徳　高野義徳　勝部孝徳　吉田富治　今岡恭一　吉田寿男　高野春夫　鳥屋尾秀夫　矢田和男
青木慶二　奥井美治　石飛勝士　成相　清　青木　勇　須谷　守　高野廣志　鳥屋尾　勇　渡辺房雄
森山健吉　青木　栄　富室英昭　宇畑正三　伊藤　進　大島幸夫　白原伸治　田部悦三郎　落合　実
成相修二　竹田保明　渡部一夫　吉田泰則　成相　豊　鐘推泰史　岩崎関太郎　三崎重美　加藤明美
高野節夫　吉岡直樹　木次　茂　成相　保　加藤邦夫　三成銀一郎　西村　敏　高野節夫　飯塚賢二
成相正人　奥井祥之　岸　智富　勝部勝義　鳥屋尾正樹　高橋俊幸　伊藤哲雄　小玉裕紀　三代清次
飯塚忠司　飯塚幹夫　塩野利男　富室孝仁　栗原長生　増原健司　吉田宏徳

第七章　出　雲　東　支　部

第一節　出雲東支部地域概要

出雲支部が出雲東支部と出雲西支部に昭和50年に分かれ、現在の支部が誕生する。組合員の多い町は今市町、渡橋町、大津町だが、元来、釣り同好会が母体となっていた為に、市内各所に分散している。当初は同好会として釣を楽しんでいたが、日券や年券の遊漁証を買うより組合に加入した方が得になる事から、釣具店に参集する愛好者が組合員となって増加して行った。その為に出雲支部は組合員数が多くなり、管理が行き届かなくなった為に、やむなく昭和50年に東西に分かれた。

神戸川に直接面している支部区域はないが、塩冶町地内では出雲西支部と交錯している。また、出雲市の中心部に当る為に、市外に転宅している組合員も多く確かめられ、支部管理を一層大変にしている。

また、斐伊川とも隣接している為に、斐伊川漁協の組合員となっている人も多い。

矢田圭吾 理事

私は昭和48年に神戸川漁協の組合員になりました。そのころは、斐伊川や旧平田市の船川で寒鮒を獲るなどして楽しんでいましたが、ある時に勤務先の友人に投網でのアユ漁を誘われてやってみると楽しく、釣果も大漁で虜になってしまいました。それ以降は毎年投網でのアユ漁を続けていたが、アユの竿釣りを伝授してもらうと、竿釣りに心躍らされて抜けられなくなりました。今では九州の球磨川や四国の四万十川にまで遠征するようになり、私生活の全ても釣りを中心にしています。これも神戸川の組合員になったお陰と感謝しています。

組合理事になってからは、先輩諸役員、各支部長と一緒になってアユの放流、鮭の育成放流等々の事業について、非力ながら懸命に努めています。また、今年はアユの産卵場の整備を行い、放流から天然遡上への切替えの大切さを実感しました。

斐伊川水系治水事業及び18災復旧工事も終盤に入り、神戸川の流れも風景も一変していますが、昔のように魚の多く棲めるきれいな川になるよう、一理事とし、一組合員として願っている日々です。

小村昌三 監事

神戸川整備も完成に近づき、また以前の静けさが戻って来る事と思います。沢山の方々のご支援で慣れ親しんだ神戸川で漁業ができ、喜んでおります。

三瓶山の谷川を下ると神戸川上流にあたります。この綺麗な上流に鮎を放流し、解禁になると腕が鳴ったものです。友がけで鮎を仕込み、おとり鮎を白波が立つ岩陰に投げ入れて泳がせると20～30匹も釣り上げる事が出来ました。また、投網の解禁になると、キラリと姿が見えた瞬間に網を広げて打つと、１日に50匹余りの大漁の時もありました。５月頃からは手製の籠に餌になるミミズを入れた仕掛けを20～30個川中に入れると、１個に２～３匹獲れたものです。

蟹漁は早朝より出かけ、一緒に獲れたザリ蟹や亀を持ち帰り、子供達と楽しんだものです。

このような釣り人生を過ごせたのも神戸川のお陰と感謝しています。鳥や獣、植物等の多種多様な生物が生存していますが、特段人間だけが栄える為にある自然ではなく、全ての生き物に与えられた恵みなのです。自然の調和を大切にする心を持てば、自ずと豊かさを享受でき人生も楽しくなると思います。

その為にはシジミ等の保護区を作ったり、鮎の産卵場を造ったりし、魚族が自ら循環する環境を整える必要があると思います。そうすれば、魅力ある神戸川となり、子供達も集まり、親しみやすい神戸川になると夢みています。

三木卓吉 支部長

支部の組合員は分散していて、充分な支部活動ができていません。年齢も70代の組合員が多く、世代交代をしようとしますが厳しいのが現状です。年１回、支部の総代会を開いていますが、総代には昭和30年代の方を置き、少しでも若返りをしようとしています。

昭和40年の初めごろ、来島ダムにヘラブナを釣りに行きました。ダムでは護岸からヘラブナを狙って、接ぎ竿に毛ばりを付けて投入しました。また、ボートを浮かべて船釣もやりました。ジャミ（餌とり）が寄っ

てきたら、ウグイ等も集まって来て面白いように釣れました。平成10年ごろからはブラックバスが増えてジャミやヘラブナの稚魚を食われて次第にヘラブナが減ってしまいました。ニジマスやハスも湖水に棲んでいました。また、馬木不動尊の下に石垣があり、マンサクの頭を餌に毛ガニを獲りました。古志橋の下でミミズを餌に手長エビ釣り、昭和40年ごろには、解禁日以降10日間で300匹の若鮎が釣れ、親戚や近所に配って歩き喜ばれました。昭和40年ごろは釣り人口が多く、竿が捌けなくて喧嘩になった事もありました。

昔はタイツが布の為に、冷たい水が染み込んで寒かった思い出があります。竿もカーボンが出て９mの長さが使用できるようになりましたが、昔はグラスファイバー製で７m竿の為に、半日で持ち疲れをしました。

後生に残しておきたいものは、昔の来島ダム周辺のように山が手入れさていて、山藤や山シャクヤク、山ゆりが咲き、木々にはウグイス鳴くような所で釣りができる自然です。志津見ダムが完成し、放水量が増えれば昔の環境が少し取り戻せると思います。又、落ち鮎を狙った四ッ手網漁は貴重で独特な漁法は受け継いで残してもらいたいです。

【魚種】

アユ、鯉、フナ、ウナギ、ナマズ、ドジョウ、サケ、マス、スッポン、エビ、モクズガニ等

第二節　組　合　名　簿

［歴代出雲支部支部役員］

昭和24年	理事　代表理事組合長　井原　協一　渡辺　新一　桐山夏太郎　山根　林一 参事　前島　一治
昭和25年～26年	理事　代表理事組合長　井原　協一　渡部　新一　桐山夏太郎　山根　林一 原　善春　監事　布野　廣吉　参事　前島　一治
昭和27年～28年	理事　代表理事組合長　井原　協一　釜田　春治　山根　林一　森　克行 監事　安田善太郎　支部長　釜田　春治　専務理事　前島　一治
昭和31年～33年	理事　井原協一組合長　釜田　春治　山根　林一　前島一治専務
昭和34年～34年9月	理事　井原協一組合長　前島　一治　専務　山根　林一　支部長　別所豊太郎
昭和34年10月	理事　前島一治専務　山根　林一　支部長　飛田　正治
昭和35年～37年	理事　前島一治専務　山根　林一　支部長　別所豊太郎
昭和38年～40年	理事　山根　林一　監事　清水　留吉　支部長　飛田　正治
昭和41年～46年	理事　飛田　正治　支部長　井上徳三郎
昭和47年～49年	理事　飛田　正治　渡部　弘　監事　山田　孝徳　支部長　笹倉　修

［歴代出雲東支部支部役員］

昭和50年～52年	理事　渡部　弘　支部長　笹倉　修
昭和53年～55年	理事　前島　一治　支部長　笹倉　修
昭和56年～58年	理事　河川委員長　前島　一治　支部長　渡部　弘
昭和59年～61年	理事　山田　孝徳　監事　笹倉　修　支部長　渡部　弘
昭和62年～平成元年	理事　山田　孝徳　支部長　渡部　弘
平成２年～４年	理事　渡部　弘　支部長　笹倉　修
平成５年～７年	理事　笹倉　修　支部長　堀江　宏
平成８年～10年	理事　岩成　陽治　監事　山田　孝徳　支部長　堀江　宏
平成11年～13年	理事　岩成　陽治　支部長　堀江　宏
平成14年～19年	理事　堀江　宏　支部長　前島　伸
平成20年～22年	理事　矢田　圭吾　監事　小村　昌三　支部長　三木　卓吉

［出雲支部組合員数］

昭和25年　97名	昭和27名　90名	昭和29年　58名	昭和31年　124名	昭和32年　121名	昭和33年　135名
昭和34年　115名	昭和35年　112名	昭和38年　116名	昭和42年　114名	昭和43年　122名	昭和46年　142名
昭和47年　167名	昭和48年　202名	昭和49年　221名			

［出雲東支部組合員数］

昭和50年　130名	昭和51年　131名	昭和52年　142名	昭和53年　147名	昭和54年　142名	昭和55年　144名
昭和56年　139名	昭和57年　139名	昭和58年　138名	平成11年　137名	平成12年　128名	平成13年　131名
平成14年　126名	平成15年　126名	平成16年　123名	平成17年　120名	平成18年　114名	平成19年　104名
平成20年　98名					

［組合員名簿］（平成21年９月８日現在）（順不同）

理　事　矢田圭吾　**監　事**　小村昌三　**支部長**　三木卓吉
副支部長　窪田巳之　**会　計**　園山　節
組 合 員　吾郷治三　浅尾武二　伊藤禮嗣　岩成陽治　漆谷啓三　遠藤定雄　岡田道明　小田龍蔵　来間喜惣次
勝部明美　烏田照雄　金本興義　久谷　猛　堀江　宏　東儀公哲　小松原　博　鈴木益彦　荒木千代吉
土江昭治　土江　稔　中尾猷郎　柳楽浩史　柳楽精一　成相吉隆　藤原　徳　藤原秀敏　三吉康善
宮本俊夫　三島丹次　山崎紘二　山田孝徳　矢野　勉　山崎則夫　珍部芳夫　森山　勝　和田美智保
園山　節　鎌田　澄　柳楽良吉　岸　亮次　周藤英一　北村　稔　渡部克己　後藤良治　吉田昭十六
阿川勝己　江戸　宏　伊藤　薫　川上清美　窪田己之　昌子　甲　御船善弘　勝部　清　神門　恵
常松房則　森山陽治　舟木春雄　山崎三郎　妹尾定男　黒目　款　山田　勝　片寄　貢　力石三郎
山本善弘　岩野　勝　大野敏夫　武田　昭　鎌田明久　田中幸男　大上尚徳　漆谷　勉　板橋信之
和田　勝　幸村義彦　長谷川　誠　山本寛治　田原隆志　日野弘一　土江志朗　三上栄次　村穂好之
渡部英之　本田隆志　板倉郁夫　青木泰夫　長澤秀俊　三島由美　神田光則　佐々木　晃　中山浩一

▲（前列左から）
坂本　拓、荒木千代吉、遠藤定雄、前島　伸、矢田圭吾。
（後列左から）
窪田己之、園山　節、小村昌三、三木卓吉、堀江　宏、山田孝徳、
岩成陽治。

第八章　出　雲　西　支　部

第一節　出雲西支部地域概要

現在の団塊世代が成人になった昭和45年ごろから釣りブームが起き、数少ない釣具店を中心に企業の同好会や小集団化した釣仲間による交流が活発化すると、情報交換の中で漁業組合に入り組合員になった方が割安だと分かり、団体での組合加入が始まった。その煽りを受けた出雲支部は急激に組合員が増加した為に、支部を東西に二分することになり、昭和50年に西支部が誕生するに至った。

支部の地域は古志町、高松町、塩冶町周辺を管轄しているが、組合員は東支部と同様に市内各所に分散しているのが実情。神戸川流域も古志橋の上下域となるが、神門支部や出雲東支部とも交錯している。

支部内には、新宮川、天徳川、十間川、西川等の支流があるが、どれも用水路としての機能を持っており、魚族は迷入して棲む程度である。

布野宏定 支部長

今から66年も前の昭和18年の頃、当時の私が小学校の２年か３年生であったが、神戸川は河川整備もされない自然な川でありました。学校から帰ると今の神門堰の周辺で友達と水泳をしたり、堰の周囲にある大小の石の間に棲んでいるウナギ、エビ、ナマズ、フナ、コイ、カニ、アカンバエ、アユ、サケ等を獲って遊んでいました。大きな物は持ち帰り、家族の夕食に食べていました。川には小石の浜があり、対岸の子供達と喧嘩になると、その小石を投げ合って戦ったものです。小石はアユが産卵場として使い、大石は魚の隠れ家として使っていましたが、今ではそれもなくなり、見た目には綺麗ですが魚族にとっては厳しい環境になっています。一日も早く以前の環境になり、清水が流れる川に戻ってきて欲しいと願っています。家畜の糞尿や工事の汚濁の流れる川をみていると悲しくなります。

一方、河口付近では温暖化による水位の上昇、雨量の減少による水量不足等により、汽水域が広がる傾向にある。また、斐伊川水系治水事業で川幅も大きくなり、ヤマトシジミの生息域が拡大され、漁場としての魅力が高まり活発な漁業が行われています。

神戸川の河川整備を治水に特定しないで、子供達の遊べる水辺を造ったり、水鳥を観察できる展望台を作ったりすることの環境整備にも目を向けて欲しいものです。

▲ 布野宏定 支部長

【魚種】

アユ、鯉、フナ、ウナギ、ウグイ、ハイ、ゴズ、ヤマメ、ギギ、ナマズ、ドジョウ、サケ、マス、スッポン、エビ、モクズガニ等

【漁法】

支部内の特徴的な漁法は、素手で魚を掴む手サグリ漁、カチョウを用いて行う瀬待ち漁、ウナギを狙った穴づり漁。

勿論、投網、アユの友釣り、落ちアユを狙った四ッ手網漁も行う。

▲ 旧古志橋と砂利とり船（昭和41年）

第二節　組　合　名　簿

［歴代出雲支部支部役員］

昭和24年	出雲支部理事　代表理事組合長　井原協一　渡辺新一　桐山夏太郎　山根林一 参事　前島一治
昭和25年～26年	出雲支部理事　代表理事組合長　井原協一　渡部新一　桐山夏太郎　山根林一　原善春 監事　布野廣吉　　参事　前島一治
昭和27年～28年	出雲支部理事　　代表理事組合長　井原協一　釜田春治　山根林一　森　克行 監事　安田善太郎　　支部長　釜田春治　　専務理事　前島一治
昭和31年～33年	出雲支部理事　井原協一組合長　釜田春治　山根林一　前島一治専務
昭和34年～34年9月	出雲支部理事　井原協一組合長　前島一治専務　山根林一　　支部長　別所豊太郎
昭和34年10月	出雲支部理事　前島一治専務　山根林一　　支部長　飛田正治
昭和35年～37年	出雲支部理事　井原協一　前島一治　山根林一　　支部長　別所豊太郎
昭和38年～40年	出雲支部理事　山根林一　　監事　清水留吉　　支部長　飛田正治
昭和41年～46年	出雲支部理事　飛田正治　　支部長　井上徳三郎
昭和47年～49年	出雲支部理事　飛田正治　渡部　弘　　監事　山田孝徳　　支部長　笹倉　修

［歴代出雲西支部支部役員］

昭和50年～52年	出雲西支部理事　飛田正治　　支部長　原千太郎
昭和53年～55年	出雲西支部理事　原　千太郎　　監事　黒田鹿信　　支部長　嘉田稔
昭和56年～58年	出雲西支部理事　原　千太郎　　監事　勝部昭義　　支部長　嘉田稔
昭和59年～61年	出雲西支部理事　原　千太郎　　支部長　妹尾真澄
昭和62年～平成元年	出雲西支部理事　妹尾真澄　　支部長　勝部昭義
平成2年～平成4年	出雲西支部理事　事業委員長　妹尾真澄　　代表監事　鳥屋尾栄　　支部長　山根貞夫
平成5年～7年	出雲西支部理事　事業委員長　妹尾真澄　　監事　山根　功　　支部長　山根貞夫
平成8年～10年	出雲西支部理事　事業委員長　妹尾真澄　　支部長　山根貞夫
平成11年～13年	出雲西支部理事　事業委員長　妹尾真澄　　支部長　山根貞夫
平成14年～16年	出雲西支部理事　山根　功　　監事　川本亮三　　支部長　布野宏定
平成17年～19年	出雲西支部理事　山根　功　　監事　矢田寿夫　　支部長　布野宏定
平成20年～22年	出雲西支部理事　代表理事組合長　山根　功　　支部長　布野宏定

［出雲支部組合員数］

昭和25年　97名	昭和27名　90名	昭和29年　58名	昭和31年　124名	昭和32年　121名	昭和33年　135名
昭和34年　115名	昭和35年　112名	昭和38年　116名	昭和42年　114名	昭和43年　122名	昭和46年　142名
昭和47年　167名	昭和48年　202名	昭和49年　221名			

［出雲西支部組合員数］

昭和50年　113名	昭和51年　117名	昭和52年　118名	昭和53年　118名	昭和54年　120名	昭和55年　120名
昭和56年　118名	昭和57年　121名	昭和58年　122名	平成11年　113名	平成12年　108名	平成13年　111名
平成14年　107名	平成15年　108名	平成16年　106名	平成17年　101名	平成18年　102名	平成19年　97名
平成20年　97名					

［組合員名簿］（平成21年９月８日現在）（順不同）

代表理事組合長　山根　功　　**支部長**　布野宏定　　**専任監視員**　吉川明義

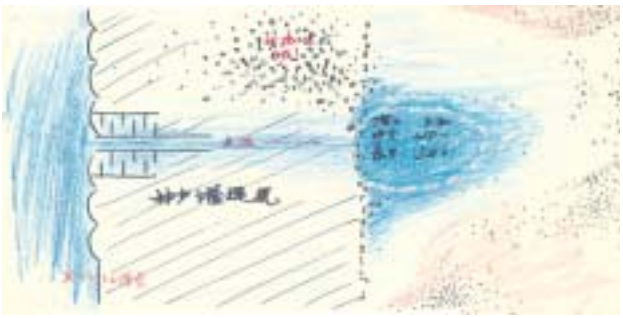
組 合 員　石川恭悦　伊藤真敏　井上祐市　糸原忠義　石飛　衛　板倉　豊　伊藤俊治　岡田敏彦　神田敏夫
勝部鎮夫　嘉田俊幸　来間政夫　公田敏夫　須谷節根　澄田　博　須谷康道　須谷良保　須谷昭次
妹尾隆行　妹尾栄治　園山尚久　竹田英司　珍部保夫　高見　登　飛田　進　中尾修一　原　仁志
原　節雄　布野信三　福田喜義　石原和義　栗原登美男　尾添元彦　松浦保芳　槙原　進　三島輝夫
山根　貢　矢田一義　矢田栄蔵　吉田照明　山根　忍　池田　勉　矢田利夫　加藤正雄　須山八男
今若健一　勝部輝吉　早瀬政志　矢田寿夫　矢田重樹　奥田房夫　山本和人　吉川明義　山根里司
石橋幸夫　福間茂雄　景山馬那夫　板倉正美　栗原定雄　田中　勲　山根　馨　田中　誠　矢田　彰
御崎雅量　山本　昇　須山正吉　板倉　清　山根鋭市　塚本　勉　石川佳和　秦　浩二　布野和雄
椿　　敏　黒目　修　持田良徳　高橋逸郎　山根政文　山本富雄　錦織伴男　大滝一幸　漆谷悦男
藤山　保　勝部正明　坂根陽介　永峰義孝　松浦悦郎　松浦章人　森山佳市　竹田朝男

第九章　神　門　支　部

第一節　神門支部地域概要

神門支部の流域は出雲市馬木町から神西沖町にかけての左岸側を主な流域として抱えている。神門の名は神話に登場する神門臣伊加曾然がこの地を支配した為に地名として残ったと伝えられ、現在の神西湖も同様に神門水海と呼ばれていたらしい。

神戸川の流れは穏やかで、神戸橋と境橋の間には足渡橋と元坪橋が対岸の高松地区を結び、鮎、鮭、鱒、鯉、ウナギ、モクズガニ等の魚種も豊富で天然遡上の恩恵を享受していた。昭和３年に神門堰が築造され河川の連続性が少なからず失われるが、それでも淡水魚の宝庫には違いなかった。



▲ 昭和30年代の神戸堰

明治時代から昭和中期には繊維需要の時勢を受けて、河川敷に多くの桑畑の姿があった。元禄２年頃から馬木町以西の灌漑を行う為に、神戸川から敷幅10間の十間川の開削工事が始まり、域内に支流ができあがる。昭和中期までは、若アユやフナの群れを追う釣人や網打ちも賑やかで、また水泳を楽しむ子供達も多かったが、古志町から知井宮町への用水路ができたり、新宮川が神戸川へ放水されたりした為に、魚の住みにくい用水路、排水路の役割に転換して行った。本流に開発の波が押し寄せたのが、平成６年から行われた斐伊川神戸川の治水工事である。神門地区には中流部にできる斐伊川放水路の開削に伴う改修工事が発生し、神門堰の改修、護岸の整備、拡幅工事が行われる。しかし、治水・利水の目線で設計された改修の為に宝箱が少しずつ壊れて行った。

足立美友 理事

我が母校河南中学校の小原幹雄氏作詞による校歌の中の２番に、「神戸の川の流れは清く　尽きぬ姿に力

▲ 旧神戸堰で遊ぶ子供達

湧く　心正して知性をみがき　われらの責務果たし行く」とあります。この歌詞の通りに当時の神戸川の水は澄んでいて、流量も豊富にあり、両岸の河川敷に植わっていた桑畑に見送られ、悠々と流れていました。

私にとって神戸川は母なる川であります。写真にあるように学生時代の神門堰は水泳教室の場でもあり、先輩や友達との交流の場でもあり、魚を通して生命の大切さを教わった場でもありました。

魚獲りは投網やチャグリ漁でアユを狙い、大水が出て水が濁るとウナギ獲りをしました。獲った魚を肴に呑むお酒は一味も二味も美味しく戴けました。また、親戚や近所の親しい人にも分けてあげると大変喜ばれたし、近頃は孫たちに食べさせるのが何よりの楽しみになっています。

理事の立場として神戸川を視ると、やはり来島ダムによる変貌が悲しいです。建設以前の暴れ川と言われた神戸川に治水と発電を兼ねたダムを造る事は、地域住民のとっては望ましい事ではあるが、分水して江川に流す事になったのは、もの言わぬ魚の立場で判断する当組役員にとっては断腸の思いです。今後は護岸の施工方法や平瀬や早瀬に対して監督を強化し、魚族にとって良い瀬や淵を造って、昔のように魅力のある神戸川を目指したいと思います。

現在進行している神門堰の撤去作業をみていると、魚たちの悲しい叫び声が聞こえ、心に染みます。

そして、いつかは神戸川に恩返しをしたいと心に刻んでいる日々です。

布野　修 神門支部長

神戸川漁業協同組合の組合員になったのは昭和20年代の後半と思います。随分と昔の事で記憶も薄いが、昭和34年頃からは数人で釣クラブをつくって楽しんでいました。釣への思いは小学生の頃からあり、タヌシやドジョウを餌に鯉、フナ、ウナギを箱づけで獲っていました。元坪橋があった頃は、橋の上から投網を打って鮎を面白いように獲りました。古志橋付近に貸しボート屋があり、ボートに乗って神門堰を流していたがボートと伴に堰を越えた苦い思い出があります。

また、徳蓮に組合の釣り掘りがあった時には、フナ釣りを夢中でやりました。また、一番の釣果は、一度海に流下した鮎が再び川に遡上するカエリ鮎を20kg獲った事が思い浮かびます。

支部の方針は魚に感謝しながら、皆で仲良く魚を獲って川を楽しむ事を心がけて運営しているが、３年前から神西支部と合併して範囲も広く組合員数も70名と多くなり、何かと苦労をしています。今後は、河口付近で好調なシジミ貝が境橋付近まで獲れるようになれば、新たな組合員も増加すると思うので期待しています。

▲ 平成21年３月の神戸堰

最後に、今の歳まで60年間釣ができて本当に幸せだったと川に魚に組合に感謝をしているし、今後の体力の続く限り川に出たいと思います。

▲ 古志幼稚園児（神戸堰で21年3月23日鮭放流）

【主な魚種】

アユ、鯉、フナ、ウナギ、ハイ、ゴズ、ギギ、ナマズ、ドジョウ、サケ、マス、スッポン、エビ、モクズガニ等

▲ 旧神戸堰

第二節　組　合　名　簿

［歴代神門支部及び神西支部役員］

昭和24年～28年	神西村支部理事　　矢田政吉　　神門村支部　川本安二郎、今岡萬市
昭和31年～33年	神門支部理事　勝部　巌　　神西支部監事　矢田政吉
昭和34年～同９月	神門支部理事　勝部　巌　　支部長　杉原忠明 神西支部監事　小村恒一郎　　支部長　矢田政吉
昭和34年10月	神門支部理事　杉原忠明　　支部長　黒田鹿信 神西支部監事　小村恒一郎　　支部長　江角勝悦
昭和35年～37年	神門支部理事　杉原忠明　　支部長　黒田鹿信 神西支部監事　小村恒一郎　　支部長　元田幸治
昭和38年～40年	神門支部理事　足立秀男　　支部長　黒田鹿信　　神西支部長　元田幸治
昭和41年～43年	神門支部理事　足立秀男　　支部長　黒田鹿信　　神西支部長　永田　博
昭和44年～46年	神門支部理事　足立秀雄副組合長　　支部長兼任理事　黒田鹿信 神西支部長　　小村重信
昭和47年～49年	神門支部理事　足立秀男　　支部長　勝部忠義　　神西支部長　高見武雄
昭和50年～52年	神門支部理事　足立秀男　　支部長　黒田鹿信　　神西支部長　矢田政吉
昭和53年～55年	神門支部理事　足立秀雄副組合長　　支部長　黒田鹿信　　神西支部長　矢田政吉
昭和56年～61年	神門支部理事　足立秀男組合長　　支部長　黒田鹿信　　神西支部長　矢田政吉
昭和62年～平成元年	神門支部理事　足立秀男組合長　　支部長　黒田鹿信　　神西支部長　小村照雄
平成２年～４年	神門支部理事　足立秀男組合長　　支部長　岩成　一　　神西支部長　小村照雄
平成５年～７年	神門支部理事　足立秀男組合長　　支部長　岩成　一　　神西支部長　小村正明
平成８年～10年	神門支部理事　岩成　一　　支部長　川本亮三　神西支部長　元田秀男
平成11年～13年	神門支部理事　岩成　一総務委員長　支部長　川本亮三　　神西支部長　小村照雄
平成14年～16年	神門支部理事　井上　馨　　支部長　足立美友　　神西支部長　小村伸治
平成17年～22年	神門支部理事　足立美友　　支部長　布野　修

［神門支部組合員数］

昭和25年　54名	昭和27年　16名	昭和31年　61名	昭和32年　72名	昭和33年　75名	昭和34年　70名
昭和35年　73名	昭和38年　71名	昭和42年　70名	昭和43年　70名	昭和46年　84名	昭和47年　98名
昭和48年　102名	昭和49年　107名	昭和50年　110名	昭和51名　112名	昭和52年　113名	昭和53年　112名
昭和54年　114名	昭和55年　113名	昭和56年　117名	昭和57名　120名	昭和58年　121名	平成11年　85名
平成12年　80名	平成13年　76名	平成14年　74名	平成15年　71名	平成16年　69名	平成17年　79名
平成18年　76名	平成19年　74名	平成20年　72名			

［神西支部組合員数］

昭和25年　18名	昭和27年　3名	昭和31年　22名	昭和32年　24名	昭和33年　24名	昭和34年　23名
昭和35年　22名	昭和38年　19名	昭和42年　13名	昭和43年　13名	昭和46年　17名	昭和47年　19名
昭和48年　19名	昭和49年　19名	昭和50年　19名	昭和51年　19名	昭和52年　19名	昭和53年　20名
昭和54年　20名	昭和55年　20名	昭和56年　19名	昭和57年　19名	昭和58年　19名	平成11年　16名
平成12年　15名	平成13年　13名	平成14年　13名	平成15年　12名	平成16年　12名	

［組合員名簿］（平成21年９月８日現在）（順不同）

神門支部　理事　足立美友　**支部長**　布野　修　**会　計**　岩成有展　**支部監事**　坂根房充

本部総代　坂根房充　布野　修　原　寿夫　日野栄三　岩成有展　小村照雄

地区役員・代議員

上北中央、東部地区	**役員**	坂根房充	**代議員**	岡田　清　岡田　修
上北地区	**役員**	内田　敦	**代議員**	内田幸晴　内田和夫
上・下組、上北西地区	**役員**	原　寿夫	**代議員**	槙原　清　片寄　勉
神門・沖分、東谷地区	**役員**	岩成有展	**代議員**	岩成正晃　大国謙治
中・北組、芦渡地区	**役員**	足立寿宏	**代議員**	足立浩之　須山恒美
嘉儀、町一・二、両下地区	**役員**	布野　修	**代議員**	浅津　登　浅津善春
栄町・真幸ヶ丘、間谷、保知石地区	**役員**	日野栄三	**代議員**	小村喜八郎　今岡健一郎
神西地区	**役員**	小村照雄	**代議員**	元田秀男　小村伸治

組 合 員　浅津善春　浅津　清　浅津　登　岩成有展　内田和夫　内田　宏　内田幸晴　江戸　猛　江戸教一郎
岡田　清　大谷直幸　大国謙治　梶谷篤夫　笠原史夫　足立浩之　片寄　勉　坂根房充　須山恒美
高見孝志　高見哲夫　成相　栄　野津召三　原田嘉昭　原田　孟　原　寿夫　槙原　清　野津喜佐夫
森山亀雄　山根健一　矢野秀雄　米原邦登　勝部邦明　藤江一郎　岩成正晃　岡田　修　小村喜八郎
江戸貞男　山本和正　足立寿宏　野尻治男　小玉茂人　日野栄三　藤江達哉　大国　淳　梶谷喜三男
杉原秀昌　足立元幸　内田　敦　青戸博可　品川幸也　妹尾　勇　増原恒夫　小村伸治　今岡健一郎
小村洋司　小村照雄　須谷　孝　元田秀男　浜村弘美　和田尚彦　須山啓吉　吾郷陽臣　板垣　晋
矢野　薫　妹尾博幸　杉山勝利　原　曙美

▲ 神戸堰でのサケの放流風景（平成22年3月15日）

▲ 神戸堰魚道下での遡上アユ調査（平成22年4月）

▲ 園児達のサケ養魚場見学

第十章　長　浜　支　部

第一節　長浜支部地域概要

支部の域内は東園町、西園町、荒茅町、松寄下町、大社町等広範囲な地域を管轄している。旧出雲市と旧大社町に亘っており、市・町・村時代以前から互いが交流をもちながら、漁を楽しんでいた。

支部内流域も境橋、妙見橋付近から河口まであり、日本海まで船で出漁する海面、内水面の漁をする組合員も多く確かめられる。また、近年、地球の温暖化による海面上昇や雨量の減少による流出不足等により、海水が神戸川に流入して広い範囲が汽水域となっている。その為に、ヤマトシジミの良い漁場となり、許可を受けた組合員がシジミの漁を行っている。船での操業とシジミの漁が他支部と異質な支部を形成している。昭和30年11月30日付毎日新聞によれば、北荒木の栗原嘉次夫さんがブドウの苗床をつくる為に畑を掘り下げたら、ヤマトシジミが多く見られる貝塚を発見したとある。シジミの歴史は想いの及ばない古墳時代より始まっているらしい。

現在の河川の状態は昔に比して大きな変貌を遂げている。斐伊川放水路事業の一環として馬木町付近で放水路と合流した神戸川は、治水の為に拡幅され、護岸をコンクリートで築堤され等、魚族にとっては棲み難い河川状態となっている。

林　政夫 理事

昭和30年代ごろの長浜地区は養蚕が盛んに行われ、その為か特に河川敷は一面桑畑で覆われていました。また、川幅も狭くて浅く、川岸には柳や葦が茂り、ヒバリやキジの鳴き声が響き渡り、蝶やトンボが踊るように舞っていました。なんとも穏やかで、呑気な時代でした。その当時、私は小学生で日々の遊び場は河川敷であった。夏は川で泳ぎ、魚を獲り、飽きると砂浜で野球や運動会の練習を日が暮れるまで行いました。

また、父親が組合員であった為に、夏季慰労で行われる川べりでの飲食会にはついて行き、大人達と一緒になって川魚に舌鼓を打ちました。大人になってからは、河口から川舟にて投網をし、コイ、フナ、ボラ等

▲ 長浜支部総会

を獲り、刺身や汁にして仲間と砂浜で食べた思い出があります。夏の夜はガス灯で手長エビ、冬は焚き火をして寒ブナ釣りも楽しみました。

現在は地球温暖化の影響を神戸川も受けて、河口の水位が上昇して妙見橋まで潮が満ち、汽水域が拡大しています。30年前から漁協が続けているシジミ貝の移植放流の効果が温暖化と比例するように上がるとは複雑な思いがあります。

河川工事の影響もあると思うが、河川の水は確実に汚れてきています。河口付近に流れ着いた枝葉や生活ゴミで白鳥が巣作りをしています。河川の清掃を組合員が率先して積極的に行い、小学生の児童達の範となるべき、と反省しています。組合員だけの神戸川ではなく、周辺地域の人々の神戸川であるべき立場で河川を見つめ、いつの日か以前の綺麗な神戸川を取り戻したいと思います。

▲ 河口付近で行われた慰労会（昭和30年代）

中山幸義 支部長

昔の支部は公会堂で支部の集会をしていたらしいが、今は１年に１回練成会を島根ワイナリーで開き、組合員の親睦を図っています。昔の神戸川には浅瀬が沢山あり、家族連れでシジミ貝を採っていたが、河川が拡幅され、水深も深くなり気軽に行ける場所や子供達の遊ぶ浅瀬がなくなりました。

私自身は、昭和の終わりに組合員になった。小学生の頃は、護岸の石籠にいるテナガ海老を獲ったり、小川にいるモクズガニを獲ったり、日が暮れるまで川で遊んでいました。少し大きくなると、今度は泳いでウナギを突いて自慢していました。その後、船でウナギや鮎を獲っていたが、思うよう獲れなくなり次第に家業のブドウ農家に専念するようになりました。

これから川に望むのは、人工的でもいいから昔のように遊べる河川を造ることです。組合員も非組合員も一緒になって遊べる限定された区域を造り、楽しい笑い声を聞きたいものです。

金築重夫 シジミ部会長

神戸川のシジミは私が少年時代から結構な量が生息していました。昭和50年代まではシジミ漁に対する規制もあまり言われなくて、組合員の家族等も自由に川に入って獲っていたものです。昭和58年船に船外機を付けて、操舵しながらジョレンを引っ張りるシジミ漁を神戸川河口付近で行った。この漁法を取り入れたのは、神戸川漁協では私が初めてだったが、川底には玉砂利を敷き詰めたようにシジミ貝が生息していたので、面白いように水揚げができました。

▲ 河口付近で操業する金築氏

河口付近で新内藤川と神戸川の境界の中土手がありますが、その中土手の河口から200m位の所に平成10年頃から白鳥の番と鶴が１羽棲みついています。この白鳥が毎年４月の下旬頃に巣を作り毎年卵を６から７個産みつけます。卵から孵化するのは２から３個ですが、順調に生育して巣立つのは毎年２羽です。この白鳥の巣は葦とペットボトル、ビニール袋、発泡スチロール等上流から、外海から流れ着いたゴミを材料にしています。土手の全体がゴミで埋め尽くされ、一部が川の中に漂っています。シジミの部会長を仰せつかっている私としては、残念でなりません。

部会長としての責任はシジミの資源管理と考えて、稚貝の調査、漁場の開拓、会員の安全と親睦等に取組んでいます。休む事なく流れる河川のシジミ漁場の問題点は、汽水域の漁場が不安定である事があげられます。その為に監視と情報交換を欠かせません。できる限り、会員との連絡を綿密に行い、漁場の安定、資源の安定を守りたいと思います。

島根県水産技術センター

内水面浅海部によるシジミ調査

１．経緯

神戸川漁協より神戸川の河口部で、ヤマトシジミの斃死が見られると情報が入り、現地調査したので報告する。

２．調査概要

①日時

平成21年９月３日（木）16：00～

②調査地点

図に示した地点で水質測定とシジミの採集をおこなった。

③水質

多項目水質計（クオンタ）により船着け場において水温、塩分、ＰＨ、溶存酸素を測定した。

④現状調査

漁業者の方に５分間程度ジョレンで掻いていただき状況確認した。

⑤肥満度調査

この時期はシジミの産卵時期にあたることから、産卵の影響を確認するため肥満度を測した。

⑥聞き取り調査

漁協の職員よりシジミの状況や斃死の状況および雨による出水、海水の流入状況について聞き取りした。

3．結果

①水質結果

水質は水質測定結果のとおりであるが、水深が１ｍと浅い場所であったが底層の塩分濃度が29.2psuと86％の海水であり非常に高い値であった。（海水の塩分濃度は34psu）

底層の塩分濃度以外の水質は特にシジミに悪い影響を与える数値ではなかった。水質の測定をおこなったのは船着け場。

②シジミ漁場の状況

シジミは、選別しない状態で船着け場まで持ち帰り観察した。

状況を確認するとゴミはやや多目であるが、砂は硫化物も少なく臭いも少し磯の臭いがする程度で底質は問題ない状況であった。

神戸川のヤマトシジミは20㎜以上の大型個体が多く、殻の色は黒、黄色、緑と３色のヤマトシジミが存在した。

③シジミの状況

シジミは瀕死の状態ではなく、活力はそこそこあるように感じられた。

二枚殻が多く、少し前（１～２ヶ月程度）に大量斃死が発生した可能性が高い。

採取したヤマトシジミは水産技術センターに持ち帰り、肥満度の測定をおこなった。

肥満度＝乾燥重量×1,000/（殻長×殻高×殻幅）で表し、0.021以下を産卵・放精を開始した、あるいは終了した個体とみなしている。

結果は20個体中６個体が0.021以上であり、ほとんどの個体が産卵・放精を開始した、あるいは終了シジミの鰓の観察した個体という結果であった。

④病気の確認

病気の観点から鰓や軟体部の顕微鏡観察をおこなった。特に異常は確認されなかったが、軟体部には産卵期のため生殖腺が発達し多数の精子や卵が確認された。

▲ 調査地点

4．考察

今年度は日本海の潮位が高く浜田市では異常潮位により、漁船の被害も報告されている。その影響を受け神戸川にも大量の海水が流入し、現在でもその状況が続いていると水質観測結果から窺える。

河川水の高塩分化に加え肥満度で示したとおり、ヤマトシジミの産卵がおこなわれている時期であり肥満度が低い時期でもある。産卵活動により活力が低下しているところに海水の流入があり、耐えきれなくなった個体が斃死したと考えられた。

【地域の魚種】

アユ、鯉、フナ、ウナギ、ギギ、ナマズ、ドジョウ、サケ、マス、スッポン、エビ、モクズガニ、シジミ等

第二節　組　合　名　簿

［歴代長浜支部役員］

昭和24年	安達一郎
昭和25年～26年	荒茅荒木支部理事　安達一郎　大国安輝
昭和27年～28年	理事　石飛秀太郎　　監事　大国安輝
昭和31年～33年	理事　福間友繁
昭和34年～同９月	理事　石富玉蔵　　支部長　大国安輝
昭和34年10月	理事　石富玉蔵　　支部長　岸熊五郎
昭和35年～37年	理事　石富玉蔵　　支部長　大国安輝
昭和38年～40年	理事　川上貞之助　　支部長　川上忠義
昭和41年～43年	理事　川上貞之助組合長　　監事　小林武信　　支部長　春日清一郎
昭和44年～46年	理事　川上貞之助組合長　　支部長　大国国市
昭和47年～49年	理事　川上貞之助組合長　　支部長　曽田勝造
昭和50年～52年	理事　川上貞之助組合長　　監事　吾郷光雄　　支部長　曽田勝造
昭和53年～58年	理事　曽田勝造　　支部長　石富直正
昭和59年～61年	理事　石富直正　　支部長　浅津勝芳
昭和62年～平成元年	理事　石富直正河川委員長　代表監事　曽田勝造　　支部長　浅津勝芳
平成２年～４年	理事　石富直正河川委員長　曽田勝造総務委員長　　支部長　浅津勝造
平成５年～10年	理事　石富直正河川委員長　浅津勝芳　　支部長　伊藤恒雄
平成11年～13年	理事　石富直正河川委員長　浅津勝芳　　監事　金築重夫　　支部長　伊藤恒雄
平成14年～16年	理事　浅津勝芳総務委員長　金築重夫　　支部長　伊藤恒雄
平成17年～19年	理事　金築重夫総務委員長　伊藤恒雄　　支部長　林　政夫
平成20年～22年	理事　林政夫　支部長　中山幸義

［組合員数］

昭和25年　54名	昭和27年　33名	昭和29年　15名	昭和31年　67名	昭和32年　90名	昭和33年　70名
昭和34年　65名	昭和35年　66名	昭和38年　72名	昭和42年　65名	昭和43年　75名	昭和46年　81名
昭和47年　94名	昭和48年　102名	昭和49年　110名	昭和50年　126名	昭和51年　148名	昭和52年　153名
昭和54年　157名	昭和55年　164名	昭和56年　177名	昭和57年　182名	昭和58年　187名	平成11年　163名
平成12年　154名	平成13年　155名	平成14年　149名	平成15年　144名	平成16年　144名	平成17年　143名
平成18年　141名	平成19年　146名	平成20年　137名			

［組合員名簿］（平成21年９月８日現在）（順不同）

理　　事　林　政夫　　**支部長**　中山幸義　　**副支部長**　川上徹男

専任監視員　川井　勇　大国己晴

組 合 員　浅津勝芳　石飛　力　石飛孝司　石富雄二　今岡正義　飯塚浩章　石飛国延　今岡紀良　伊藤恒雄
大国一夫　尾添　進　小村明道　大谷澄夫　小川孝治　大国重信　大梶芳治　大国　淳　大国登志雄
大国　博　大国　誠　大梶泰男　大国勝巳　柿木　章　春日賢二　川上　篤　春日　實　川上　進
金本満義　川上　進　川井　勇　石飛　勝　大国親雄　春日　裕　林　晴夫　福間　博　福間　明
金築重夫　郷原　克　澄田　亘　杉本秀人　杉原博光　須谷信太郎　曽田　保　園山　勇　曽田勝治
柳楽正一　林　春三　長谷川　清　秦　賢市　福間功一　曽田三喜男　福間秀雄　福間重雄　藤江　登
三成猪一　渡部恭久　飯塚治夫　児玉一好　大国　悦　大野　勉　田中敬悦　佐藤洋一　原　勇喜夫
古山　勉　中山一馬　石田安央　大野英二　藤江　等　小川力雄　柳楽矩男　栗原萬吉　持田孝吉
泉　信雄　日野貞良　和田　司　周藤健寿　今岡　肇　多久和良雄　曽田幹雄　春日密弘　小川寛恵
小川　誠　大梶勝弘　河井茂夫　石飛　博　曽田　清　植村清治郎　吉井和幸　金本幸文　内田博之
藤江正治　曽田修一　石飛晴夫　渡部敏己　大国己晴　藤江武志　川上徹男　落合一夫　石飛健治
塩野裕樹　大国　登　大国一郎　矢田博文　名原悟志　加藤逸平　石飛義治　糸賀　実　石飛武男
川上好正　大島陽治　安達勝男　藤江将人　石飛　勝　今岡久仁夫　梶谷　俊　藤井辰廣　春日　聡
澄田　薫　川井　崇　渡辺一史　今岡　正　山崎義信　竹並一人　渡邊朝夫　鎌田　博　森山　忍
林　淳一　藤江　圭　原田敏充　三代直也　安食　斉　長谷川隆文　秦　勇夫

組 合 員 数 推 移 表

（単位：人）

年 代	合 計	飯南支部	橋波支部	窪田支部	須佐支部	乙立支部	朝山支部	出雲支部	出雲東支部	出雲西支部	神門支部	神西支部	長浜支部
昭和25年	947	57	0	221	139	186	121	97	0	0	54	18	54
昭和27年	284	0	40	0	10	3	89	90	0	0	16	3	33
昭和29年	836	0	75	133	208	193	136	58	0	0	0	18	15
昭和31年	999	132	82	197	119	90	105	124	0	0	61	22	67
昭和32年	1,019	107	94	223	160	0	128	121	0	0	72	24	90
昭和33年	1,174	128	86	230	181	119	126	135	0	0	75	24	70
昭和34年	1,097	123	86	211	173	113	118	115	0	0	70	23	65
昭和35年	1,065	109	86	205	159	109	124	112	0	0	73	22	66
昭和38年	1,042	100	81	196	165	115	107	116	0	0	71	19	72
昭和42年	918	80	69	172	145	102	88	114	0	0	70	13	65
昭和43年	927	85	70	176	151	108	92	122	0	0	0	13	0
昭和46年	1,008	67	69	178	163	114	93	142	0	0	84	17	81
昭和47年	1,069	66	69	177	167	116	96	167	0	0	98	19	94
昭和48年	1,141	66	70	190	172	112	106	202	0	0	102	19	102
昭和49年	1,205	69	69	190	190	116	114	221	0	0	107	19	110
昭和50年	1,280	78	71	201	200	117	115	0	130	113	110	19	126
昭和51年	1,348	86	74	208	206	123	124	0	131	117	112	19	148
昭和52年	1,366	86	74	208	203	123	127	0	142	118	113	19	153
昭和53年	1,344	91	76	208	204	126	131	0	147	118	112	20	31
昭和54年	1,468	88	79	206	210	126	131	0	142	120	114	20	157
昭和55年	1,480	91	79	206	209	126	132	0	144	120	113	20	164
昭和56年	1,498	93	79	208	207	125	136	0	139	118	117	19	177
昭和57年	1,506	95	79	204	206	124	140	0	139	121	120	19	182
昭和58年	1,521	95	79	208	210	124	141	0	138	122	121	19	187
平成11年	1,291	111	74	205	213	119	166		137	113	85	16	163
平成12年	1,263	107	73	206	215	117	167		128	108	80	15	154
平成13年	1,158	114	73	207	215	113	164		131	111	76	13	155
平成14年	1,323	107	70	199	208	112	158		126	107	74	13	149
平成15年	1,305	109	69	190	208	112	156		126	108	71	12	144
平成16年	1,297	110	68	188	204	117	156		123	106	69	12	144
平成17年	1,282	110	70	188	202	116	153		120	101	79		143
平成18年	1,247	103	69	184	197	112	149		114	102	76		141
平成19年	1,207	96	65	177	196	104	148		104	97	74		146
平成20年	1,159	93	65	168	186	100	143		98	97	72		137

神戸川魚種別漁獲高推移表

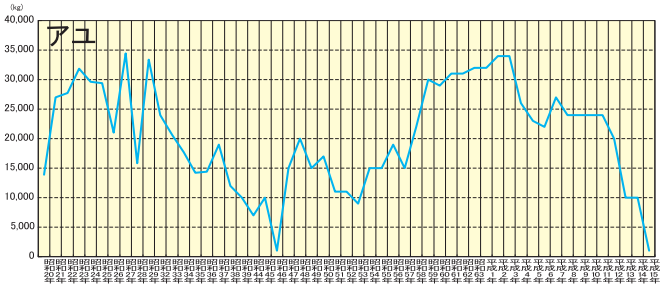
（単位：kg）

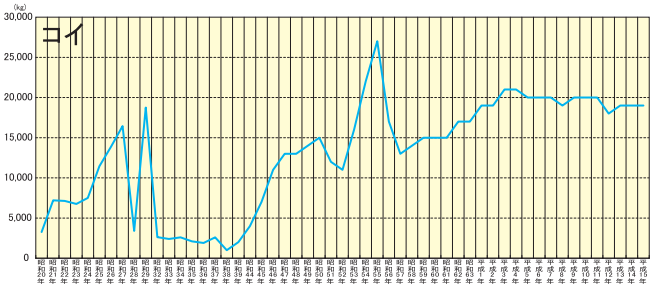
年 号	ア ユ	コ イ	フ ナ	ウナギ	ウグイ	ボ ラ	サ ケ	シジミ	その他	計
昭和20年	13,875	3,263	15,375	4,875	2,550	6,000	6,450		5,063	57,451
昭和21年	27,000	7,200	19,500	4,575	2,588	5,625	6,375		5,250	78,113
昭和22年	27,750	7,125	18,000	4,687	2,550	5,700	6,825		5,587	78,224
昭和23年	31,875	6,750	18,375	4,500	2,625	5,625	7,125		5,250	82,125
昭和24年	29,625	7,500	19,875	3,750	2,250	6,375	7,500		5,625	82,500
昭和25年	29,378	11,453	15,131	4,706	2,074		5,109		12,304	80,155
昭和26年	21,041	13,873	15,180	6,386	1,676		4,726		13,511	76,393
昭和27年	34,463	16,444	16,350	10,875	2,775				15,788	96,695
昭和28年	15,825	3,394	14,160	4,875	2,588		8,085		10,163	59,090
昭和29年	33,375	18,750	11,625	13,500	3,375		0		10,500	91,125
昭和30年										114,375
昭和31年										113,625
昭和32年	24,000	2,625	2,625	3,375	375				3,600	36,600
昭和33年	20,600	2,400	3,700	4,000	100				5,200	36,000
昭和34年	17,700	2,600	7,300	3,100	100				3,200	34,000
昭和35年	14,200	2,100	6,700	2,900	200				3,200	29,300
昭和36年	14,400	1,900	5,600	2,800	100				5,400	30,200
昭和37年	19,000	2,600	5,600	2,500	100				4,500	34,300
昭和38年	12,000	1,000	3,000	2,000					5,000	23,000
昭和39年	10,000	2,000	3,000	1,000					4,000	20,000
昭和40年										0
昭和41年										0
昭和42年										0
昭和43年										29,000
昭和44年	7,000	4,000	13,000	2,000	1,000				13,000	40,000
昭和45年	10,000	7,000	13,000	3,000	1,000				14,000	48,000
昭和46年	1,000	11,000	15,000	3,000	1,000				12,000	43,000
昭和47年	15,000	13,000	23,000	4,000	1,000				14,000	70,000
昭和48年	20,000	13,000	22,000	5,000	2,000				16,000	78,000
昭和49年	15,000	14,000	24,000	6,000	5,000				17,000	81,000
昭和50年	17,000	15,000	21,000	5,000	7,000				19,000	84,000
昭和51年	11,000	12,000	22,000	5,000	5,000				24,000	79,000
昭和52年	11,000	11,000	23,000	6,000	7,000				26,000	84,000
昭和53年	9,000	16,000	26,000	8,000	7,000				28,000	94,000
昭和54年	15,000	22,000	29,000	11,000	8,000				34,000	119,000
昭和55年	15,000	27,000	25,000	10,000	7,000			1,000	36,000	121,000
昭和56年	19,000	17,000	28,000	7,000	6,000			8,000	39,000	124,000
昭和57年	15,000	13,000	24,000	6,000	4,000			11,000	46,000	119,000
昭和58年	22,000	14,000	26,000	7,000	4,000			11,000	18,000	102,000
昭和59年	30,000	15,000	25,000	6,000	4,000			11,000	19,000	110,000
昭和60年	29,000	15,000	25,000	6,000		27,000		11,000	25,000	138,000
昭和61年	31,000	15,000	25,000	6,000		27,000		11,000	24,000	139,000
昭和62年	31,000	17,000	24,000	6,000		27,000		11,000	23,000	139,000
昭和63年	32,000	17,000	23,000	5,000		27,000		11,000	25,000	140,000
平成元年	32,000	19,000	21,000	5,000		27,000		11,000	25,000	140,000
平成２年	34,000	19,000	21,000	5,000		26,000		11,000	25,000	141,000
平成３年	34,000	21,000	21,000	5,000		26,000		20,000	24,000	151,000
平成４年	26,000	21,000	20,000	5,000		24,000		17,000	24,000	137,000

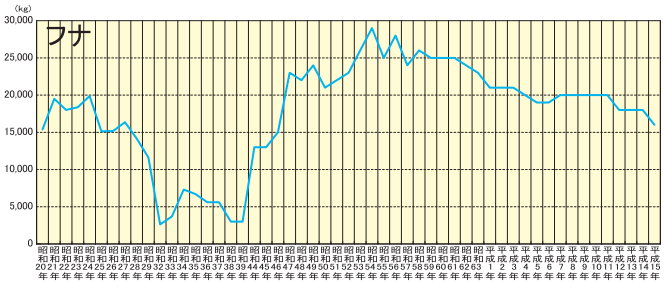
神戸川魚種別漁獲高推移表

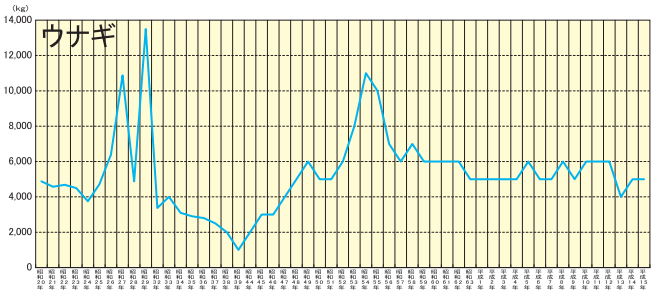
（単位：kg）

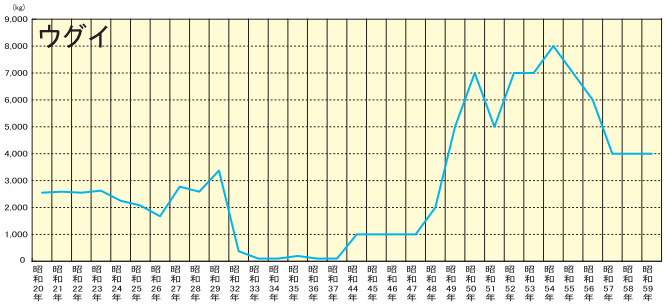
年　号	ア　ユ	コ　イ	フ　ナ	ウナギ	ウグイ	ボ　ラ	サ　ケ	シジミ	その他	計
平成５年	23,000	20,000	19,000	6,000		22,000		17,000	21,000	128,000
平成６年	22,000	20,000	19,000	5,000		21,000		15,000	20,000	122,000
平成７年	27,000	20,000	20,000	5,000		20,000		15,000	22,000	129,000
平成８年	24,000	19,000	20,000	6,000		19,000		15,000	22,000	125,000
平成９年	24,000	20,000	20,000	5,000		19,000		16,000	21,000	125,000
平成10年	24,000	20,000	20,000	6,000		18,000		17,000	22,000	127,000
平成11年	24,000	20,000	20,000	6,000		19,000		17,000	21,000	127,000
平成12年	20,000	18,000	18,000	6,000		17,000		17,000	20,000	116,000
平成13年	10,000	19,000	18,000	4,000		15,000		17,000	15,000	98,000
平成14年	10,000	19,000	18,000	5,000		15,000		18,000	15,000	100,000
平成15年	1,000	19,000	16,000	5,000		13,000		18,000	13,000	85,000
平成16年										0
平成17年										0
平成18年										
平成19年										
平成20年										

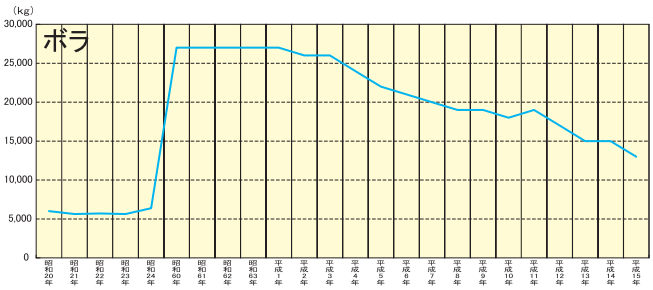


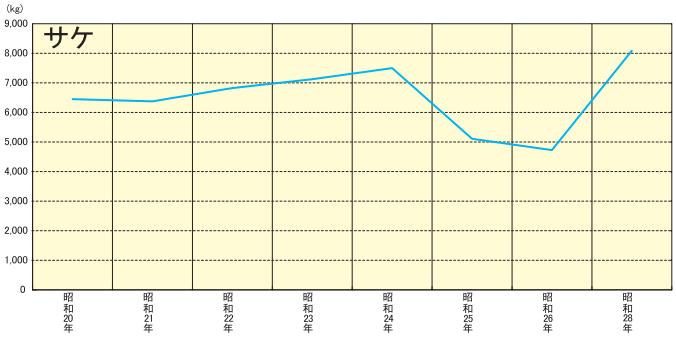


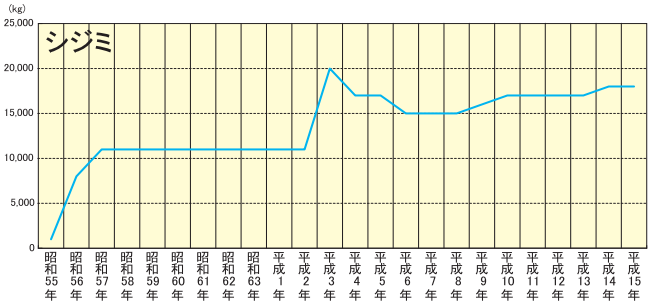












歴代役職員名簿（順不同）

年　号	理　事　・　監　事	支　　部　　長
昭和24年	組 合 長　井原協一　　副組合長　三島雄太郎 専　　務　尼　忠三　　参　　事　前島一治 土井豆政則　渡部新一　妹尾國次郎　伊藤伊一 桐山夏太郎　安達一郎　矢田政吉　和田軍吉 今岡　栄　重富広吉　山根林一　落合　静 永田善久　今岡万一　渡部豊義　川上貞之助 川本安三郎　加藤大四郎	
昭和25年	組 合 長　井原協一　　副組合長　三島雄太郎 専　　務　尼　忠三　　参　　事　前島一治 渡部新一　桐山夏太郎　山根林一　原　義春 布野廣吉　矢田政吉　川本安三郎　今岡萬市 落合　静　伊藤伊一　高橋礒助　妹尾國次郎 和田軍吉　大江儀左ェ門　今岡鶴吉　永田善久 安達一郎　大国安輝	
昭和26年	組 合 長　井原協一　副組合長　三島雄太郎 専　　務　尼忠三　　参　　事　前島一治 渡部新一　桐山夏太郎　山根林一　原義春 布野廣吉　矢田政吉　川本安三郎　今岡萬市 落合静　伊藤伊一　高橋礒助　妹尾國次郎 今岡鶴雄　大江儀左ェ門　重富広若　鐘築繁雄 永田善久　石飛秀太郎　大国安輝	
昭和27年	組 合 長　井原協一　　副組合長　三島雄太郎 専　　務　三島雄太郎　県 委 員　桐山夏太郎 釜田春治　山根林一　森　克行　石飛秀太郎 矢田政吉　今岡萬市　川本安三郎　高橋富由 落合　静　小村良友　今岡鶴雄　重富広若 土井豆政則　妹尾國次郎　石橋久三　金子捨吉 監　　事 鐘築繁雄　安田善太郎　大国安輝 高橋礒助　大江儀左ェ門	（理事・支部長兼任者含む） 釜田春治　山根林一　石飛秀太郎 矢田政吉　高橋富由　伊藤武義 三原源吉　重富広若　石橋政義 石橋久三　永井　章

年　号	理　事　・　監　事	支　　部　　長
昭和28年	組 合 長　井原協一　　副組合長　三島雄太郎 専　　務　前島一治　　県 委 員　桐山夏太郎 釜田春治　山根林一　森　克行　石飛秀太郎 矢田政吉　今岡萬市　川本安三郎　高橋富由 落合　静　小村良友　今岡鶴雄　重富広若 土井豆政則　妹尾國次郎　石橋久三　金子捨吉 監　　事 鐘築繁雄　安田善太郎　大国安輝 高橋礒助　大江儀左ェ門	（理事・支部長兼任者含む） 釜田春治　山根林一　石飛秀太郎 矢田政吉　高橋富由　伊藤武義 三原源吉　重富広若　石橋政義 石橋久三　永井　章

昭和31年 ～昭和33年	組 合 長　井原協一　　副組合長　三島雄太郎 専　　務　前島一治　平田亀次郎　土井豆政則 妹尾國次郎　石橋久三　鐘築繁雄　三原源吉 田辺関二郎　小村良友　伊藤清吉　釜田春治 山根林市　勝部　巌　福間友繁 監　　事 土岩　勲　矢田政吉	［職員名（入所年）］ 鐘築繁雄　澁谷光時　三谷栄一　森脇絹子 高橋功夫

昭和34年 1～9月	組 合 長　井原協一　　副組合長　三島雄太郎 専　　務　前島一治　永田善久　金子捨吉 石橋勇二郎　土井豆政則　吉川　保　鐘築繁雄 三原源吉　持田恒定　別所秀雄　伊藤伊一 落合　静　山根林一　勝部　巌　石富玉蔵 監　　事 土岩　巌　矢田政吉　中島梅太郎　永田善久	（理事・支部長兼任者含む） 永田善久　杉本恒雄　鎌田正俊　小村修一 田部関二郎　伊藤伊一　別所豊太郎 杉原忠明　矢田政吉　大国安輝

昭和34年 10月	組 合 長　三島雄太郎　　副組合長　前島一治 専　　務　鐘築繁雄　土井豆政則　妹尾國次郎 三原源吉　石橋久三　小村良友　田辺関二郎 渡辺順一　伊藤清吉　釜田春治　山根林一 平田亀次郎　勝部　巌 監　　事 代表監事　土岩　勲　小村恒一郎　中島梅一郎	

昭和35年 ～昭和37年	組 合 長　三島雄太郎　　副組合長　前島一治 専　　務　鐘築繁雄　永田善久　杉本恒雄 鎌田正俊　田原正雄　三原源吉　小林修一 亀滝峯定　後藤敏徳　伊藤伊一　落合　静 山根林一　杉浦忠明　石富玉蔵 監　　事 代表監事　土岩　勲　成相繁夫　小村恒一郎	（理事・支部長兼任者含む） 永田善久　大谷勝義　吉川　保　滝尻義之 大江義右衛門　伊藤伊一　別所豊太郎 黒田鹿信　元田幸治　大国安輝

年　号	理　事　・　監　事	支　　部　　長
昭和38年 ～昭和40年	組 合 長　三島雄太郎　　専　　務　鐘築繁雄 金子捨吉　大野定義　鎌田正俊　三原源吉 別所豊太郎　武田嘉太郎　山根林一　足立秀雄 川上貞之助 監　　事 代表監事　土岩　勲　小林修一　清水留吉	那須洋二　石橋文次郎　山本沢之 荒木寿三郎　田部関二郎　飛田正治 武田嘉太郎　黒田鹿信　元田幸治 川上忠蔵 ［職員名（入所年）］山田イサオ 吉川ヒロコ　神田マサノリ
昭和41年 ～昭和43年	組 合 長　川上貞之助　　専　　務　鐘築繁雄 金子捨吉　杉本恒雄　山本沢之　栗原　敬 三原源吉　伊藤武義　武田嘉太郎　飛田正治 足立秀雄 監　　事 代表監事　土岩　勲　田部関二郎　小林武信	（理事・支部長兼任者含む） 那須洋二　三島達一　山本沢之　滝尻義之 後藤敏徳　落合　静　井上徳三郎 黒田鹿信　永田　博　春日清一郎
昭和44年 ～昭和46年	組 合 長　川上貞之助　　副組合長　足立秀雄 金子捨吉　神田伊造　山本沢之　栗原　敬 滝尻義之　小林修一　伊藤武義　武田嘉太郎 飛田正治 監　　事 塚原伊太郎　高橋　保　黒田鹿信	（理事・支部長兼任者含む） 那須洋二　大野定義　山本沢之　山本　弘 後藤敏徳　成相繁夫　井上徳三郎 黒田鹿信　小村重信　大国国市
昭和47年 ～49年	組 合 長　川上貞之助　　副組合長　岩崎恒次郎 塚原伊太郎　神田伊造　山本沢之　滝尻義之 小林修一　伊藤武義　武田嘉太郎　飛田正治 渡部　弘　足立秀雄 監　　事 藤原　繁　今岡秋吉　山田孝徳	那須洋二　石橋勇次郎　栗原　敬 山本　弘　後藤敏徳　成相繁夫　笹倉　修 勝部忠義　高見武雄　曽田勝造 ［職員名（入所年）］ 石橋トシ
昭和50年 ～52年	組 合 長　川上貞之助　　副組合長　岩崎恒次郎 塚原伊太郎　神田伊造　山本沢之　山本　弘 三原富夫　伊藤武義　太田幸吉　足立秀雄 渡部　弘　飛田正治 監　　事 田部関二郎　吾郷光雄	那須洋二　永見邦夫　栗原　敬　田部繁敏 後藤敏徳　渡部順一　黒田鹿信　矢田政吉 曽田勝造　笹倉　修　原千太郎 ［職員名（入所年）］ 川上テイノスケ　成相シゲオ　原チズコ
昭和53年 ～55年	組 合 長　岩崎恒次郎　　副組合長　足立秀雄 専務　成相繁夫　山本徹雄　神田伊造　田原正雄 山本　弘　三原富夫　伊藤武義　曽田勝造 前島一治　原千太郎 監　　事 栗原俊雄　飯塚義一郎　黒田鹿信	那須洋二　永見邦夫　山本沢之　田部繁敏 宇森秀吉　渡部順一　黒田鹿信　矢田政吉 石富直正　笹倉　修　嘉田　稔

年　号	理　事　・　監　事	支　　部　　長
昭和56年 ～58年	組 合 長　足立秀雄　　副組合長　山本　弘 専　　務　成相繁夫　　総務委員長　山本徹雄 事業委員長　田原正雄　　河川委員長　前島一治 深井一夫　山本沢之　三原富夫　亀滝峯定 曽田勝造　原千太郎 監　　事 塚原清太郎　安食春信　勝部昭義	那須洋二　永見邦夫　栗原　敬　田部繁敏 宇森秀吉　増原　清　黒田鹿信　石富直正 渡部　弘　嘉田　稔　矢田政吉 ［職員名（入所年）］ 板倉ヒロコ

昭和59年 ～61年	組 合 長　足立秀雄　　副組合長　山本　弘 専　　務　成相繁夫　　総務委員長　山本徹雄 事業委員長　山本沢之　　河川委員長　田原正雄 藤原　繁　三原富夫　亀滝峯定　石富直正 山田孝徳　原千太郎 監　　事 代表監事　笹倉　修　永見邦夫　伊藤武義	那須洋二　石崎　勉　栗原　敬　田部繁敏 宇森秀吉　増原　清　黒田鹿信　矢田政吉 浅津勝芳　渡部　弘　妹尾真澄

昭和62年 ～平成元年	組 合 長　足立秀雄　　副組合長　山本徹雄 専　　務　成相繁夫　　総務委員長　亀滝峯定 事業委員長　三原富夫　　河川委員長　石富直正 永見邦夫　栗原　敬　井上晴二郎　小林修一 山田孝徳　妹尾真澄 監　　事 代表監事　曽田勝造　高橋　保　吉川　登	那須洋二　杉本恒雄　三島敬人　田部繁敏 宇森秀吉　増原　清　黒田鹿信　小村照雄 浅津勝芳　渡部　弘　勝部昭義

平成２年 ～４年	組 合 長　足立秀雄　　副組合長　山本徹雄 専　　務　成相繁夫　　総務委員長　曽田勝造 事業委員長　妹尾真澄　　河川委員長　石富直正 永見邦夫　栗原　敬　井上晴二郎　山本秀登志 三原　博　亀滝峯定　渡部　弘 監　　事 代表監事　鳥屋尾栄　梶原清太郎　藤原治夫	那須洋二　杉本恒雄　三島敬人　田部繁敏 宇森秀吉　奥井繁夫　岩成　一　小村照雄 浅津勝芳　笹倉　修　山根貞夫

平成５年 ～７年	組 合 長　足立秀雄　　副組合長　山本徹雄 専　　務　成相繁夫　　総務委員長　永見邦夫 事業委員長　妹尾真澄　　河川委員長　石富直正 土岩　勲　栗原　敬　田部繁敏　山本秀登志 亀滝峯定　浅津勝芳　笹倉　修 監　　事 代表監事　藤原　繁　持田邦夫　山根　功	那須洋二　杉本恒雄　三島敬人　石川幸義 宇森秀吉　奥井繁夫　岩成　一　小村正明 伊藤恒雄　堀江　宏　山根貞夫 ［職員名（入所年）］ 森脇晴子（会計主任）

年　号	理　事　・　監　事	支　　部　　長
平成８年 ～10年	組 合 長　亀滝峯定　　副組合長　山本徹雄 総務委員長　土岩　勲　　事業委員長　妹尾真澄 河川委員長　石富直正　杉本恒雄　田原正雄 田部繁敏　山本秀登志　奥井繁夫　岩成　一 浅津勝芳　岩成陽治 監　　事 代表監事　山田孝徳　中尾富夫　福代晃夫	那須洋二　神田和夫　吉川章 石川幸義　大江博　伊藤修 川本亮三　元田秀男　伊藤恒雄 堀江宏　山根貞夫 ［職員名（入所年）］ 佐野　豊　朝日山功
平成11年 ～13年	組 合 長　土岩　勲　　総務委員長　岩成　一 事業委員長　妹尾真澄　　河川委員長　石富直正 那須洋二　杉本恒雄　佐々木伸文　石川幸義 山本秀登志　大江　博　福代晃夫　浅津勝芳 岩成陽治 監　　事 代表監事　永井　章　岩崎芳広　金築重夫	渡邉民雄　神田和夫　吉川　章　安食一成 飯塚　傑　伊藤　修　川本亮三　小村照雄 伊藤恒雄　堀江　宏　山根貞夫 ［職員名（入所年）］ 勝部勝義（参事）
平成14年 ～16年	組 合 長　土岩　勲　　総務委員長　浅津勝芳 事業委員長　山本秀登志　河川委員長　那須洋二 山根　功　石川幸義　大江　博　福代晃夫 井上　馨　金築重夫　神田和夫　佐々木伸文 堀江　宏 監　　事 代表監事　三島正人　片寄巌　川本亮三	渡邉民雄　石橋達男　吉川　章　安食一成 飯塚　傑　伊藤　修　足立美友　小村伸治 伊藤恒雄　前島　伸　布野宏定
平成17年 ～19年	組 合 長　佐々木伸文　　総務委員長　金築重夫 事業委員長　神田和夫　　河川委員長　福代晃夫 山根　功　渡邉民雄　高見　亮　安食一成 山本秀登志　片寄　巌　足立美友　伊藤恒雄 堀江　宏 監　　事 代表監事　伊藤　修　鎌田　弘　矢田寿夫	勝部忠徳　深井徹郎　安井敬祐　杉山寿美 飯塚　傑　成相友弥　布野　修　林　政夫 前島　伸　布野宏定
平成20年 ～22年	組 合 長　山根　功　　総務委員長　片寄　巌 事業委員長　神田和夫　　河川委員長　安食一成 足立美友　高見　亮　杉山寿美　矢田圭吾 成相友弥　林　政夫　景山　厚　岸　修一 監　　事 代表監事　長島智年　小村昌三　上田進一	布野宏定　安井敬祐　飯塚　傑　布野　修 深井徹郎　三木卓吉　増原克己　藤原國利 板垣　勝　中山幸義 ［職員名（入所年）］ 松尾治幸（参事）

第三編　神戸川漁業協同組合事業概要

第一章　指導事業（繁殖保護事業）

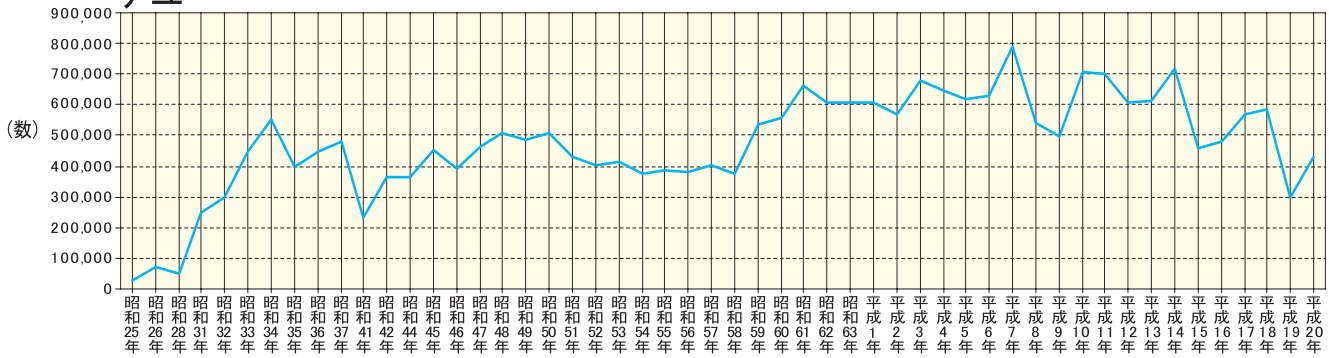
放流事業は組合事業の中で最も重要な事業である。昭和24年12月27日から昭和25年３月までの間４回に亘り、稚アユ、コイ児35,000尾を費用総額７万円で放流する。又、翌25年には山陰合同銀行より30万円を借入し、アユ30,000尾、コイ50,000尾、鮭30,000尾、ウナギ10貫、スズキ12貫等を購入して放流したとある。しかし、昭和26年に放流したアユの半分が死滅した為に、昭和27年の放流は中止をしいる。魚種別に放流の歴史を見ると、来島ダムの補償による放流以降は飛躍的に増加している。来島ダムの漁業補償として稚アユ200,000尾、神西湖産ウナギ種苗200貫、コイ養魚場管理費300,000円の協定を昭和31年に締結した時期より、放流量が大幅に増加している。業種別に見るとアユに関しては、昭和63年に自営の養魚場で70,000尾を育成し、以降平成８年まで自営での中間育成をしている。平成７年の789,500尾をピークとして前後の年代には漸減している。コイに関しては当初より安定した量を放流しているが、平成16年にコイヘルペスが発生した後は放流を中止している。ウナギに関しても昭和25年以来、安定した数量を放流している。ヤマメに関しては、昭和46年より放流を始め、比較的減少幅が小さい状態で推移してる。フナに関しては昭和35年より受精卵を仕入れ、中間育成を行って放流しているが、産地が神西湖漁協であったり、堀川で親フナを採捕したり、玉湯養魚場より仕入れたりで、産地及び放流量も安定していない。モクズガニは昭和59年183kgの試験放流をしてからは価格や仕入先に難題を抱えながら続行している。サケも昭和25年当時に30,000尾の実績があるが、昭和33年より受精卵を山形県や福島県より仕入れて自営で中間育成をして放流していたが、昭和58年からは自川で採捕して孵化させている。シジミ貝は昭和54年に200kgの試験放流後、安定した移植放流を行っている。モロコは昭和57年と58年に自営での育成による放流を行っている。手長エビは昭和58年から昭和60年までの３年間、自営で育成して放流を行っている。ニジマスに関しては、昭和33年から数年に亘り、放流実績がある。ワカサギに関しても、昭和32年に100万粒の卵を来島ダム上流に放流した実績があるが数年で中止し、平成５年から平成８年まで、再び放流を始めている。スズキに関しては、昭和25年に12貫の実績があるが、数年で中止し、平成15年に共同漁業権取得の為に再び放流を始めている。昭和34年にはソウギョ、昭和46年にはアマゴ、昭和48年にはボラ、スズキの放流実績も記録されている。また、昭和56年には立久恵峡に色鯉を5,000尾、観光の為に放流をしている。

▲ 波多川アユ放流（平成21年４月）

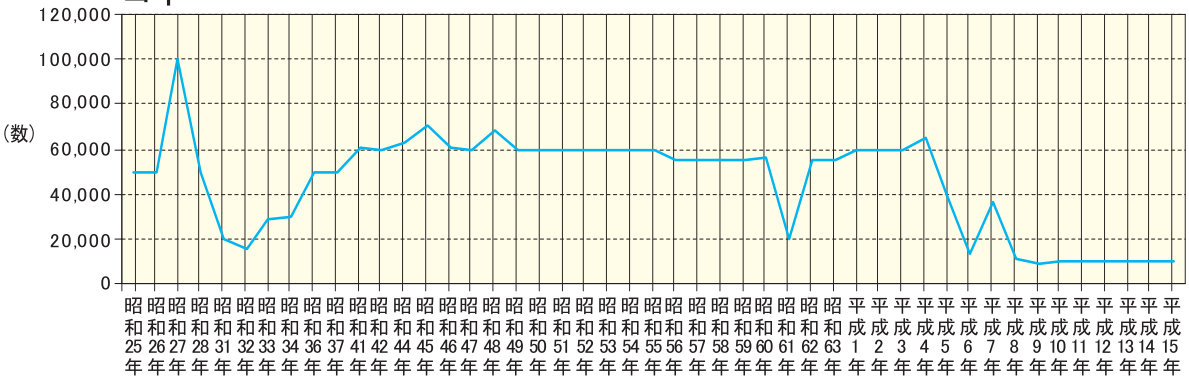
放 流 量

年	ア　ユ	コ　イ	ウナギ	ヤマメ	フ　ナ	カ　ニ	サ　ケ	シジミ	モロコ	エ　ビ	ニジマス	ワカサギ	スズキ
昭和25年	30,000	50,000	10貫				30,000						12貫
昭和26年	70,000	50,000	10貫										5貫
昭和27年		100,000	15貫										10貫
昭和28年	50,000	50,000	10貫										10貫
昭和31年	250,000	20,000	13,000尾		500,000								
昭和32年	300,000	15,000	27,000尾		10,000							100万粒	
昭和33年	445,000	28,600	112.5kg				20,000				10,000	100万粒	
昭和34年	550,000	30,000	187.5kg				30,000				10,000	100万粒	
昭和35年	400,000		241kg		500,000								
昭和36年	450,000	50,000	625kg		100,000		30,000						
昭和37年	480,000	50,000	375kg		35,000		30,000						
昭和41年	229,800	61,000	369.9kg									100万粒	
昭和42年	365,000	60,000	280kg		60,000		10,000				13,000	100万粒	
昭和44年	363,000	63,000	389.2kg		30,000						5,000		
昭和45年	453,000	70,000	375kg		30,000		20,000				5,000		
昭和46年	390,000	60,500	157.7kg	3,500	30,000		30,000						
昭和47年	461,300	60,000	168.5kg	3,000	200,000		50,000						
昭和48年	507,000	68,000	16600尾	3,000	200,000		100,000						
昭和49年	486,750	60,000	109.48kg	3,000			95,000						
昭和50年	510,000	60,000	190.4kg	3,000	200,000		95,000						
昭和51年	430,000	60,000	478.8kg	5,650	200,000								
昭和52年	405,800	60,000	179.4kg	4,500	200,000								
昭和53年	414,000	60,000	214.4kg	3,000	200kg								
昭和54年	373,800	60,000	435.5kg	4,000	200,000			200kg					
昭和55年	386,600	60,000	355.8kg	10,000				300kg					
昭和56年	380,000	55,000	325kg	10,000				3000kg	3,800				
昭和57年	403,300	55,000	400kg	10,000			47,000	3000kg	2,000				
昭和58年	376,900	55,000	411.9kg	5,000				2000kg		1,000			
昭和59年	532,900	55,000	170.9kg	10,000	200,000	183kg	21,050	1500kg		2,000			
昭和60年	560,000	56,000	237kg	10,000	200,000	37.2kg	22,000	1500kg		2,000			
昭和61年	660,000	20,000	322.1kg	10,000	66kg		25,000	1500kg					
昭和62年	610,000	55,000	398kg	10,000	200,000		30,000	1500kg					
昭和63年	607,500	55,000	425kg	10,000	80kg		45,000	1000kg					
平成1年	610,000	60,000	420kg	20,000	72kg	12,000	50,000	300kg					
平成2年	570,800	60,000	375kg	20,000	70kg	103kg	55,000	300kg					
平成3年	680,000	60,000	331.1kg	24,000	85kg	308.9kg	55,000	500kg					
平成4年	645,400	65,000	454.1kg	25,000	90kg	67kg	60,000	500kg					
平成5年	616,000	40,000	306.7kg	22,000	130kg	107.1kg	62,500	500kg				100万粒	
平成6年	631,900	13,000	354.9kg	25,000	209kg	320.8kg	81,000	500kg				100万粒	
平成7年	789,500	36,000	527.6kg	41,000	184kg	44kg	31,000	500kg				100万粒	
平成8年	541,500	10,500	443.8kg	45,000	100kg	331.3kg	30,000	500kg				100万粒	
平成9年	496,700	8,400	309.6kg	40,000	123kg	294.8kg	35,000	310kg					
平成10年	704,000	10,000	286.9kg	40,000	135kg	609.7kg	40,000	300kg					
平成11年	700,000	10,000	286.8kg	21,000	110kg	366.7kg	40,000	350kg					
平成12年	606,000	10,000	693.1kg	40,000	120kg	624.3kg	40,000	300kg					
平成13年	613,000	10,000	521.4kg	40,000	100kg	617.2kg	40,000	300kg					
平成14年	720,000	10,000	408kg	33,000	30kg	644.2kg	40,000	300kg					
平成15年	458,000	10,000	410.4kg	26,000	50kg	100kg	40,000	300kg					40尾
平成16年	483,000	中止	407.6kg	26,000	中止	198.5kg	40,000	300kg					中止
平成17年	568,000	中止	715kg	15,000	中止	304.4kg	30,000	400kg					中止
平成18年	585,000	中止	621.7kg	25,000	28kg	184.1kg	30,000	400kg					2,500
平成19年	296,200	中止	528.2kg	27,500	120kg	272.7kg	中止	800kg					2,500
平成20年	431,000	中止	402.1kg	27,500	300kg	150kg	30,000	800kg					2,000

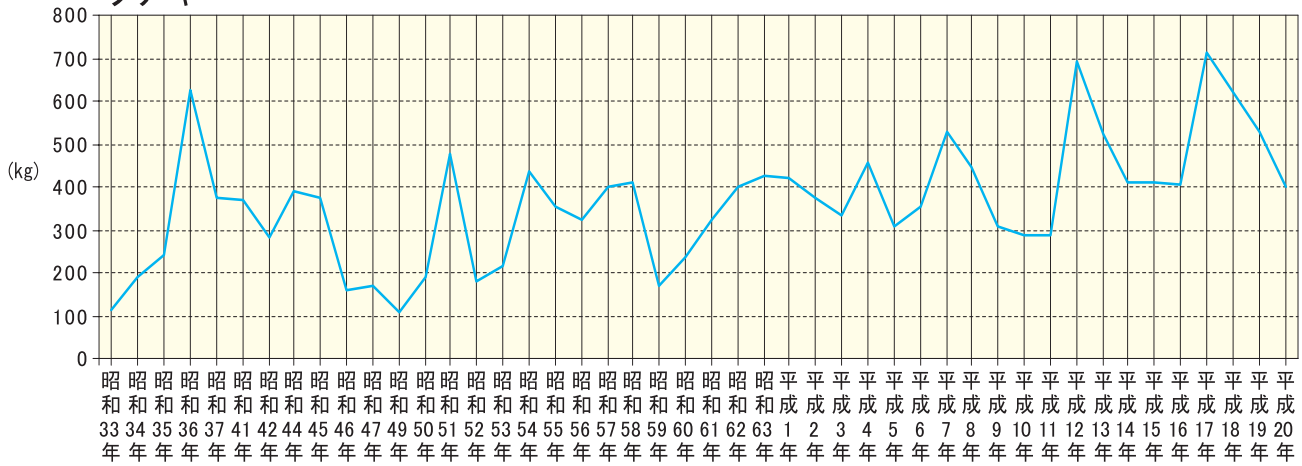
アユ


900,000
800,000
700,000
600,000
500,000
400,000
300,000
200,000
100,000
0
（数）
昭和25年 昭和26年 昭和28年 昭和31年 昭和32年 昭和33年 昭和34年 昭和35年 昭和36年 昭和37年 昭和41年 昭和42年 昭和44年 昭和45年 昭和46年 昭和47年 昭和48年 昭和49年 昭和50年 昭和51年 昭和52年 昭和53年 昭和54年 昭和55年 昭和56年 昭和57年 昭和58年 昭和59年 昭和60年 昭和61年 昭和62年 昭和63年 平成1年 平成2年 平成3年 平成4年 平成5年 平成6年 平成7年 平成8年 平成9年 平成10年 平成11年 平成12年 平成13年 平成14年 平成15年 平成16年 平成17年 平成18年 平成19年 平成20年

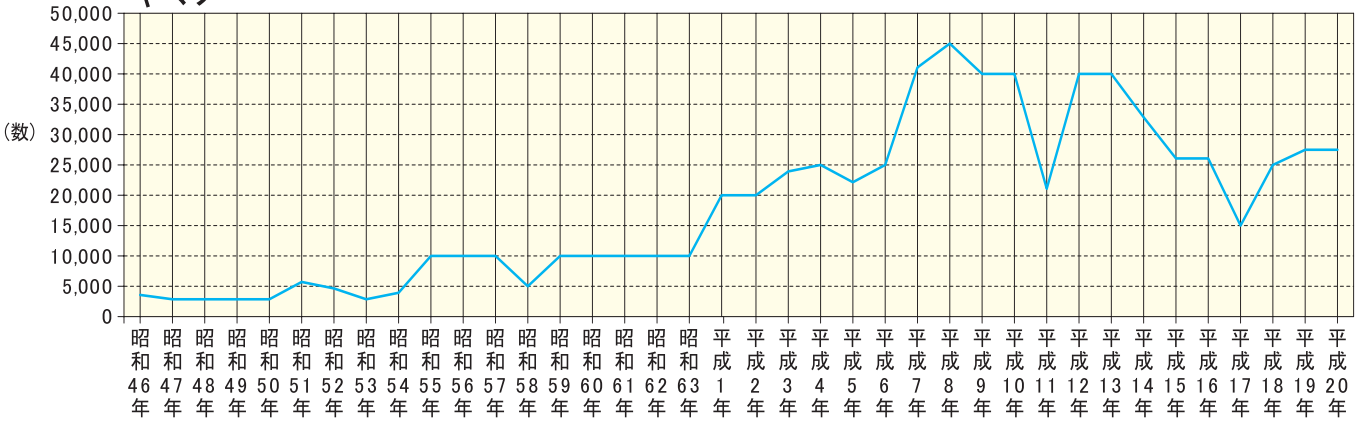
コイ


120,000
100,000
80,000
60,000
40,000
20,000
0
（数）
昭和25年 昭和26年 昭和27年 昭和28年 昭和31年 昭和32年 昭和33年 昭和34年 昭和36年 昭和37年 昭和41年 昭和42年 昭和44年 昭和45年 昭和46年 昭和47年 昭和48年 昭和49年 昭和50年 昭和51年 昭和52年 昭和53年 昭和54年 昭和55年 昭和56年 昭和57年 昭和58年 昭和59年 昭和60年 昭和61年 昭和62年 昭和63年 平成1年 平成2年 平成3年 平成4年 平成5年 平成6年 平成7年 平成8年 平成9年 平成10年 平成11年 平成12年 平成13年 平成14年 平成15年

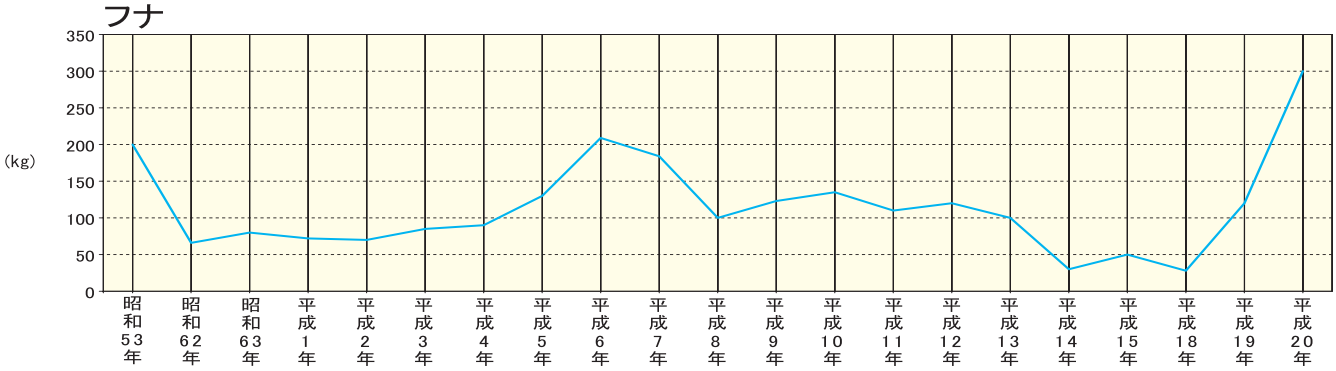
ウナギ


800
700
600
500
400
300
200
100
0
(kg)
昭和33年 昭和34年 昭和35年 昭和36年 昭和37年 昭和41年 昭和42年 昭和44年 昭和45年 昭和46年 昭和47年 昭和49年 昭和50年 昭和51年 昭和52年 昭和53年 昭和54年 昭和55年 昭和56年 昭和57年 昭和58年 昭和59年 昭和60年 昭和61年 昭和62年 昭和63年 平成1年 平成2年 平成3年 平成4年 平成5年 平成6年 平成7年 平成8年 平成9年 平成10年 平成11年 平成12年 平成13年 平成14年 平成15年 平成16年 平成17年 平成18年 平成19年 平成20年

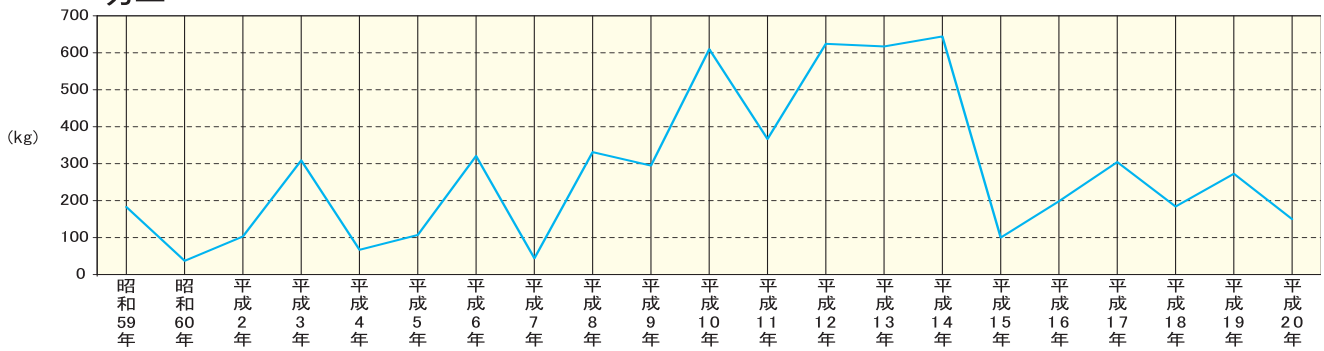
ヤマメ


50,000
45,000
40,000
35,000
30,000
25,000
20,000
15,000
10,000
5,000
0
（数）
昭和46年 昭和47年 昭和48年 昭和49年 昭和50年 昭和51年 昭和52年 昭和53年 昭和54年 昭和55年 昭和56年 昭和57年 昭和58年 昭和59年 昭和60年 昭和61年 昭和62年 昭和63年 平成1年 平成2年 平成3年 平成4年 平成5年 平成6年 平成7年 平成8年 平成9年 平成10年 平成11年 平成12年 平成13年 平成14年 平成15年 平成16年 平成17年 平成18年 平成19年 平成20年

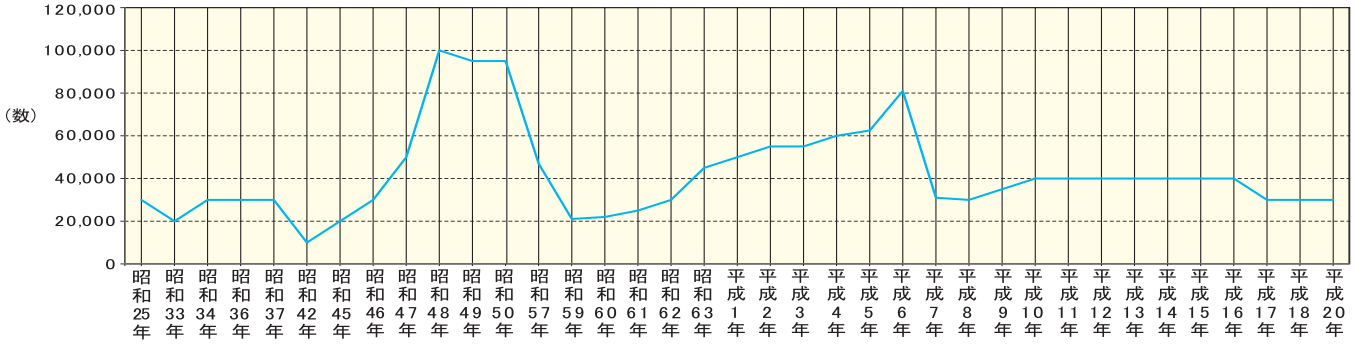
フナ



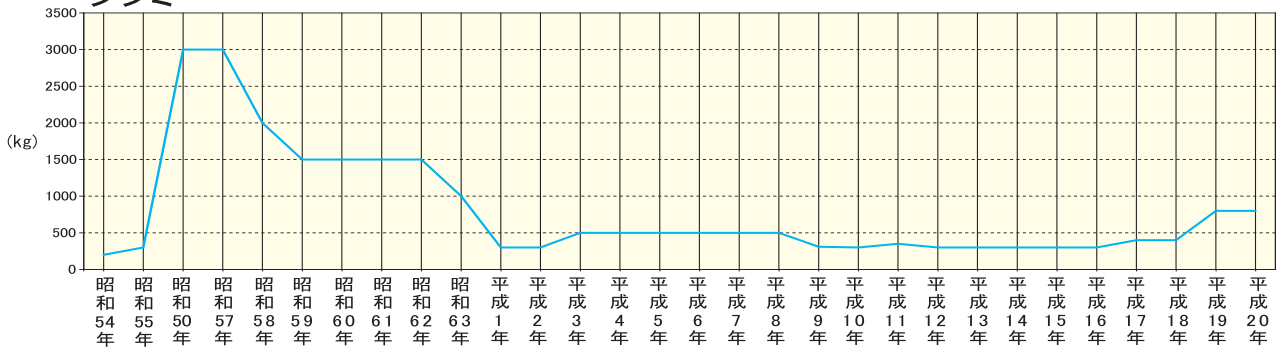
カニ



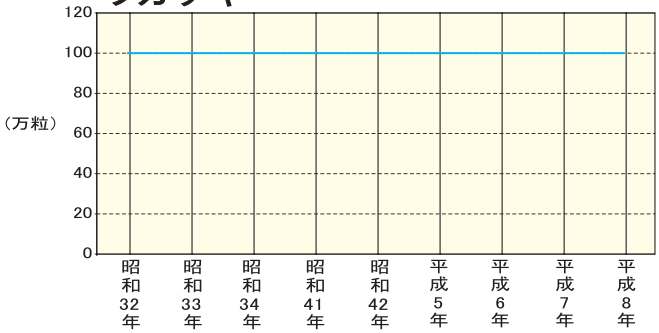
サケ



シジミ



ワカサギ



第二章　自　営　事　業

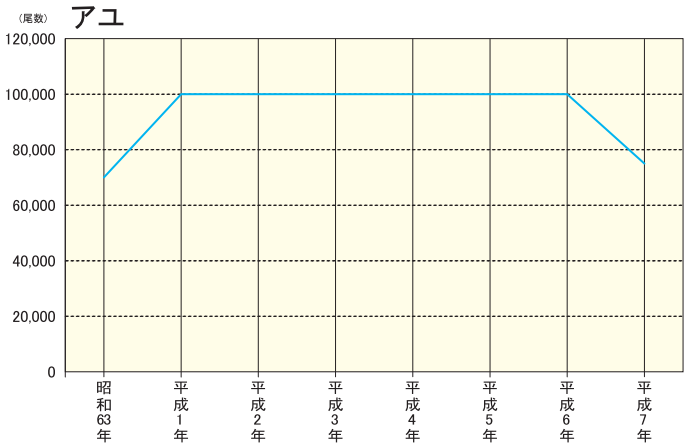
昭和25年に出雲市古志町徳蓮に養魚場が完成以来、放流を目的とした育成を行っている。当初はコイを中心に育成を行っているが詳細な記録はない。

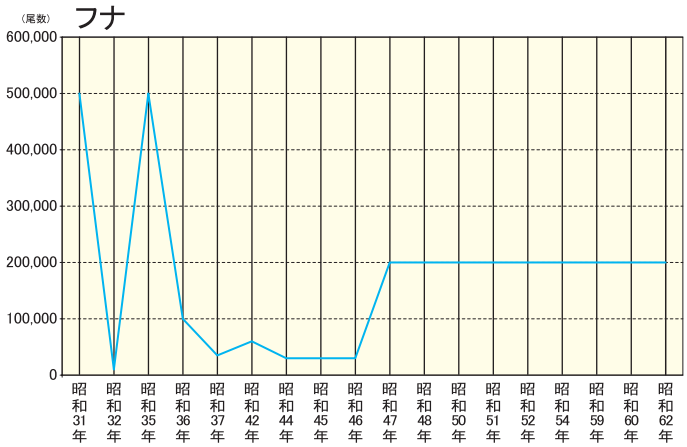
昭和31年に出雲市下古志町に移転してからは、養魚場と十間川の近くの池で育成していた。魚種別に見ると、アユは昭和63年より平成７年まで毎年10万尾を育成、コイは歴史が古く昭和25年より平成15年まで育成しているが、平成16年以降はコイヘルペス発生の為に中止をしている。育成量は平成５年までは６万尾を目標にしていたが、平成６年からは１万尾程度に減少している。ウナギは昭和51年から旧釣堀場で事業を開始、昭和60年にて中止している。フナの育成歴史も古くからある。昭和35年に受精卵を50万粒仕入れて育成を始め、神西湖漁協、玉湯養魚場、堀川での採捕等で確保し、平成７年まで行っている。ヤマメにも自営での実績がある。平成７年と８年に３万尾前後を育成している。サケは昭和33年より福島県、山形県、三刀屋試験場等より受精卵を仕入れて育成をしている。昭和58年からは自川でサケを採捕して孵化させる現在の方法を続けている。モロコは昭和57年、58年に3,800尾、2,000尾を育成、手長エビは昭和58年から60年までの３年間、1,000尾から2,000尾育成している。

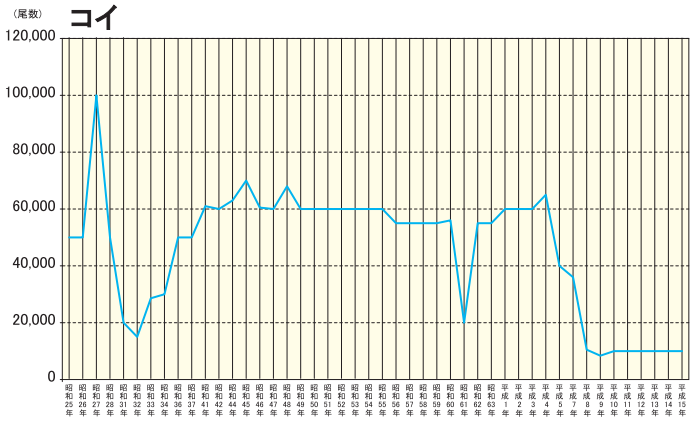
（単位：尾）

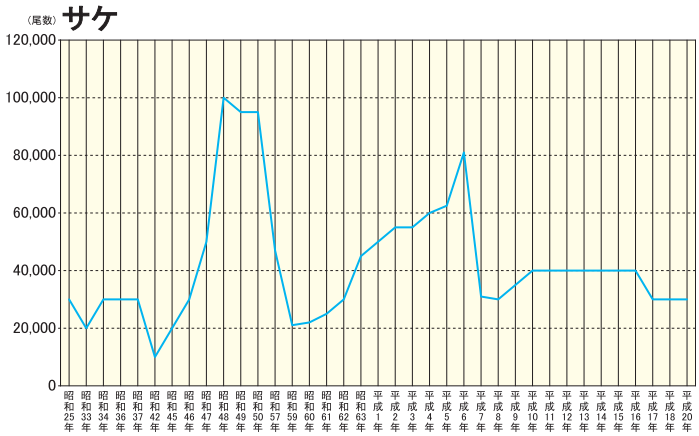
年　代	ア　ユ	コ　イ	ヤマメ	フ　ナ	サ　ケ	モロコ	エ　ビ
昭和25年		50,000			30,000		
昭和26年		50,000					
昭和27年		100,000					
昭和28年		50,000					
昭和31年		20,000		500,000			
昭和32年		15,000		10,000			
昭和33年		28,600			20,000		
昭和34年		30,000			30,000		
昭和35年				500,000			
昭和36年		50,000		100,000	30,000		
昭和37年		50,000		35,000	30,000		
昭和41年		61,000					
昭和42年		60,000		60,000	10,000		
昭和44年		63,000		30,000			
昭和45年		70,000		30,000	20,000		
昭和46年		60,500		30,000	30,000		
昭和47年		60,000		200,000	50,000		
昭和48年		68,000		200,000	100,000		
昭和49年		60,000			95,000		
昭和50年		60,000		200,000	95,000		
昭和51年		60,000		200,000			
昭和52年		60,000		200,000			
昭和53年		60,000		200kg			
昭和54年		60,000		200,000			
昭和55年		60,000					
昭和56年		55,000					
昭和57年		55,000			47,000	3,800	
昭和58年		55,000				2,000	1,000
昭和59年		55,000		200,000	21,050		2,000
昭和60年		56,000		200,000	22,000		2,000
昭和61年		20,000		66kg	25,000		
昭和62年		55,000		200,000	30,000		
昭和63年	70,000	55,000		80kg	45,000		
平成元年	100,000	60,000		72kg	50,000		
平成２年	100,000	60,000		70kg	55,000		
平成３年	100,000	60,000		85kg	55,000		

年　代	ア　ユ	コ　イ	ヤマメ	フ　ナ	サ　ケ	モロコ	エ　ビ
平成４年	100,000	65,000		90kg	60,000		
平成５年	100,000	40,000		130kg	62,500		
平成６年	100,000			209kg	81,000		
平成７年	75,000	36,000	25,000		31,000		
平成８年	中止	10,500	30,000		30,000		
平成９年		8,400			35,000		
平成10年		10,000			40,000		
平成11年		10,000			40,000		
平成12年		10,000			40,000		
平成13年		10,000			40,000		
平成14年		10,000			40,000		
平成15年		10,000			40,000		
平成16年					40,000		
平成17年					30,000		
平成18年					30,000		
平成19年					設備不備		
平成20年					30,000		









第三章　販　売　事　業

組合創立当初は全量組合が集荷して魚を販売している。昭和26年２月26日には東京都渋谷区にある東武百貨店７階催事場にて島根の観光と物産展に出品して、都市部への販路を拡大している。全魚種に確かな記録はないが、昭和25年から昭和47年までアユを販売、その後、もくずガニを昭和48年から平成９年まで一元集荷を行い販売しているが、現在では漁獲量の減少や販売不振等で販売事業は中断している。

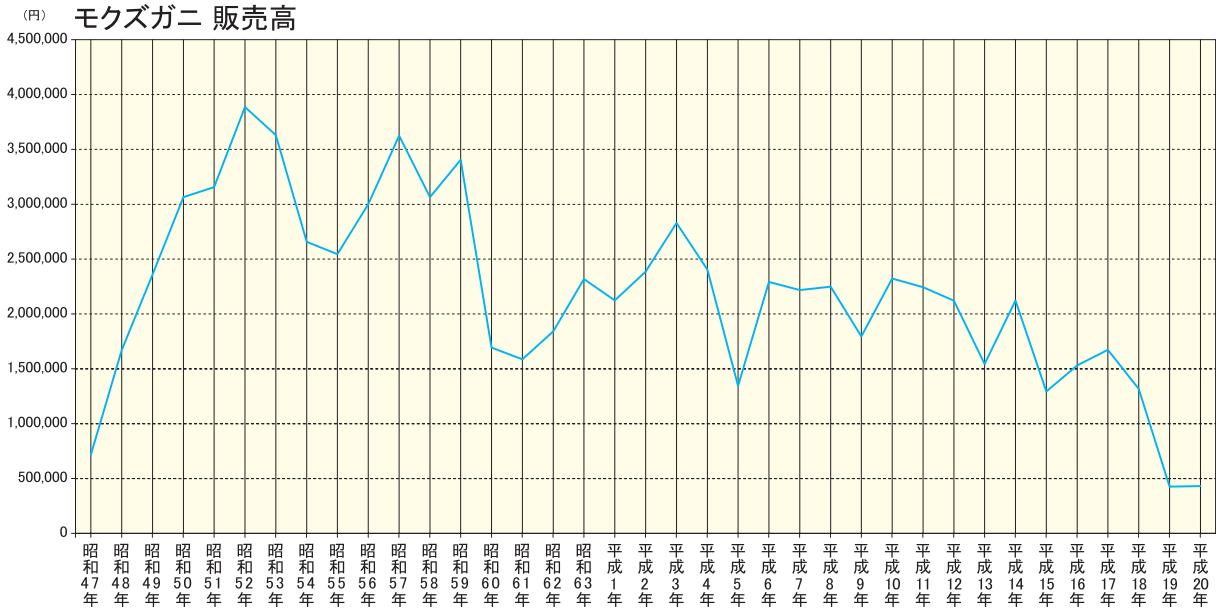
養魚場で育成生産した魚は、昭和46年から平成９年まで当組合で買い上げをしている。また、物販ではないが、昭和47年から昭和50年まで古志町徳蓮で釣り堀を経営している。

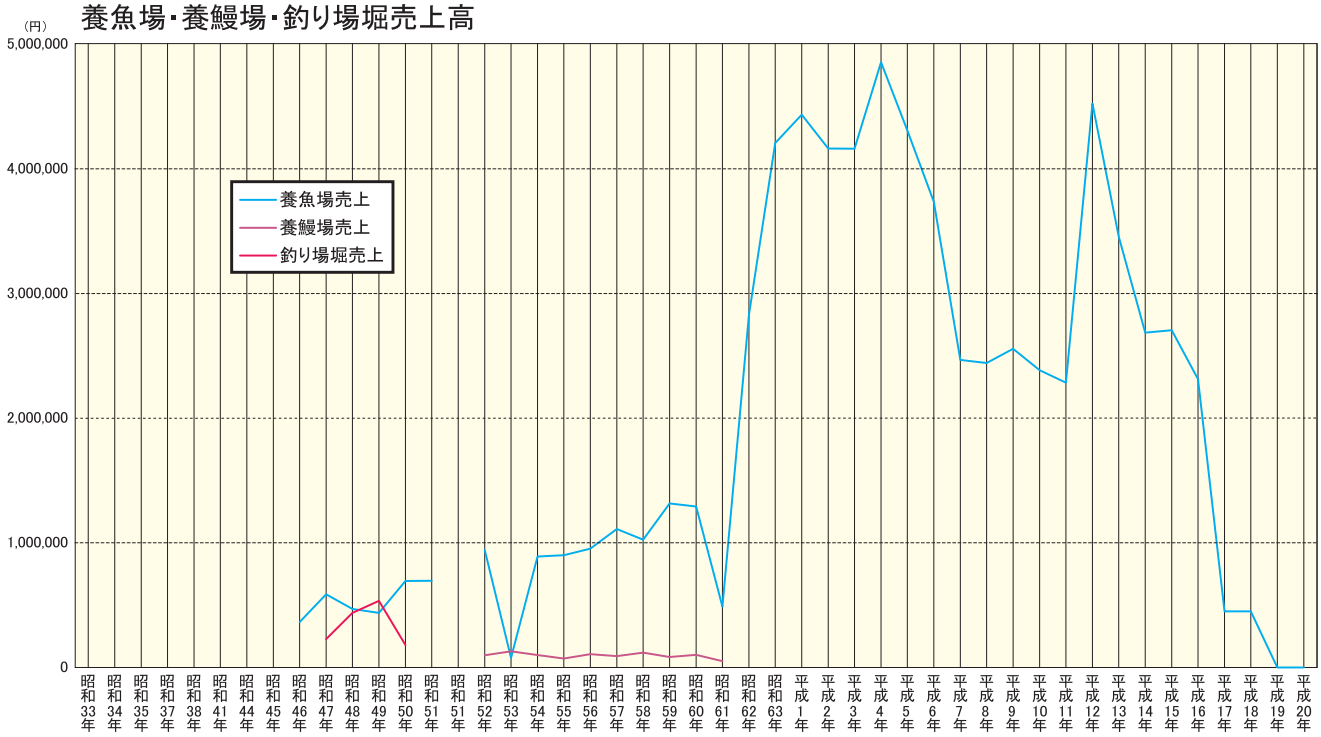
遊漁証の販売については、昭和24年に日券が第１種が100円、第２種が50円、月券が第１種500円、第２種300円でスタートしているが、昭和33年からは年券も販売を開始している。月券は昭和42年に廃止しているが、昭和41年からは投網の日券、年券、四つ手網漁の件を1,200円で販売している。

昭和62年から平成３年までは、竿日券1,000円、年券6,000円、網日券1,500円、年券8,000円、そして平成４年から現在（平成21年）に至っては、竿日券1,500円、年券7,000円、網日券2,000円、年券10,000円で販売をしている。

年　代	アユ販売高		モクズガニ		養魚場売上（円）	養鰻場売上（円）	釣り場堀売上（円）	遊漁証販売（竿）	
	販売高（円）	集荷量（kg）	販売高（円）	集荷量（kg）				日　券	年　券
昭和33年	567,211	326						50	400
昭和34年								50（雑魚）	500
昭和35年									
昭和37年									
昭和38年								300	1,000
昭和41年								300	1,000
昭和44年				2,600				300	1,000
昭和45年		391		1,692				300	1,000
昭和46年		0		1,334	364,750			300	1,000
昭和47年	140,390	10	716,320	1,647	587,346		228,585	300	1,000
昭和48年	0	0	1,670,505	3,081	468,800		437,920	300	1,000
昭和49年	0	0	2,359,135	3,475	437,615		535,000	200	1,500
昭和50年	0	0	3,064,542	3,946	693,070		180,100	200	1,500
昭和51年	0	0	3,156,237	4,120	695,250	59,200		500	3,000
昭和51年								500	3,000
昭和52年			3,886,087	4,881	943,050	97,660		300	2,000
昭和53年			3,629,846	4,399	77,052	129,200		300	2,000
昭和54年			2,657,082	2,667	889,725	100,210		300	2,000
昭和55年			2,544,963	2,374	900,870	72,280		300	2,000
昭和56年			3,000,108	3,065	952,190	106,700		500	3,000
昭和57年			3,624,271	3,602	1,110,800	91,330		500	3,000
昭和58年			3,065,234	2,719	1,023,960	119,100		500	3,000
昭和59年			3,404,938	3,021	1,314,800	83,500		500	3,000
昭和60年			1,692,704	1,511	1,291,200	101,300		500	3,000
昭和61年			1,587,180	1,430	487,980	50,000		500	4,000
昭和62年			1,841,800	1,628	2,827,100			1,000	6,000
昭和63年			2,317,132	1,943	4,206,000			1,000	6,000
平成元年			2,123,016	1,584	4,434,000			1,000	6,000
平成２年			2,385,774	1,842	4,162,500			1,000	6,000
平成３年			2,829,143	2,658	4,160,291			1,000	6,000
平成４年			2,403,780	2,149	4,854,165			1,500	7,000
平成５年			1,344,172	1,273	4,307,198			1,500	7,000
平成６年			2,291,262	2,116	3,734,650			1,500	7,000
平成７年			2,217,621	1,883	2,466,420			1,500	7,000
平成８年			2,247,827	1,493	2,441,710			1,500	7,000

年　代	アユ販売高		モクズガニ		養魚場売上(円)	養鰻場売上(円)	釣り場堀売上(円)	遊漁証販売(竿)	
	販売高(円)	集荷量(kg)	販売高(円)	集荷量(kg)				日　券	年　券
平成９年			1, 795, 367	1, 179	2, 555, 720			1, 500	7, 000
平成10年			2, 322, 397	1, 581	2, 384, 500			1, 500	7, 000
平成11年			2, 243, 826	1, 655	2, 284, 000			1, 500	7, 000
平成12年			2, 119, 957	1, 503	4, 523, 430			1, 500	7, 000
平成13年			1, 542, 658	971	3, 457, 000			1, 500	7, 000
平成14年			2, 121, 301	1, 469	2, 686, 000			1, 500	7, 000
平成15年			1, 292, 686	844	2, 705, 008			1, 500	7, 000
平成16年			1, 530, 480	1, 106	2, 311, 920			1, 500	7, 000
平成17年			1, 672, 347	1, 521	450, 000			1, 500	7, 000
平成18年			1, 315, 839	997	450, 000			1, 500	7, 000
平成19年			425, 919	323	0			1, 500	7, 000
平成20年			431, 000	299	0			1, 500	7, 000





第四編　神戸川水系の生態と漁法変化

第一章　神戸川の漁法と変遷

神戸川では、古来より貴重なタンパク源として川の幸の採取が行われてきており、魚類の捕獲には多くの漁具が使われてきた。神戸川における最も古い漁具として、縄文時代の遺跡から発掘された石錘がある。楕円形の丸くて平べったい石の両サイドを欠き、漁網用のおもりとして紐を巻き付けやすく加工したものだ。志津見ダム周辺の遺跡から数多く出土している。

昭和31年頃の漁具としては、アユ瀬張網、投網、四つ手網、叉手網、放流網、升網、ウナギ箱、ウナギモジ、モンドリ、ビン漬などの漁具が知られており、神戸川における漁業の歴史を知ることができる。これらの漁具の内、四つ手網漁は特に注目すべき漁法であるので、後で詳しく紹介する。

▲ 遺跡から出土した石錘

建設省中国地方建設局・島根県教育委員会が編纂した志津見ダム民俗文化財調査報告書「志津見の民俗」－ 本文編 －（1990）の記述を参考にしながら、神戸川で行われてきた漁法や漁具のうち、注目すべき漁具や漁法を取り上げてみる。

■ ニゴリコミ（ツボサデ）漁

この漁は、夏頃急な増水があり濁った水が岸辺まであがってきたときに行われる漁で、危険を伴うものである。対象はアユで、流れの弱い岸辺に避難しているものを、岸からツボサデ網と呼ばれる大きな網ですくい取るものである。

▲ ニゴリコミ漁

■ 瀬待ち網漁（待ち川）

ニゴリコミ漁と同様、増水時に瀬で待ち受けて、アユやウナギをセマチアミと呼ばれる三角ダモですくいとる漁法である。増水初期に行われるもので、アユが流下してきそうな瀬に立ち、三角ダモを水中に立てておき、魚が入った気配を感じとってすくい上げる原始的な漁法である。

三角ダモは、竹をX字に組み合わせてその一方を柄とし、網を軽くするために網部先端には綱をつけ、手元にヨコシギ（横木）をつける。網糸は昔は麻糸であったが、現在はナイロン製が使われている。網目は、ハサキ（先端部）は五分、手元は三分であったという。

瀬待ち網を行う時期は、盆がすぎて北風が吹き、アユやウナギが下る項で、水が腰の高さまで増えたら漁をやめ引き上げる。この漁も増水期に行われるため、ニゴリコミ漁同様に危険の伴う漁法である。

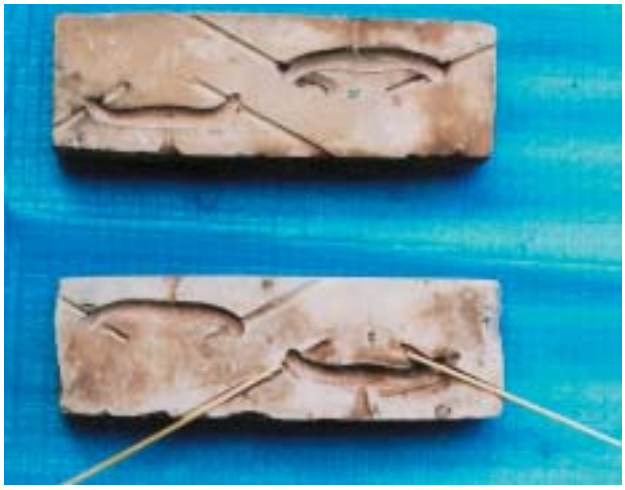
■ 投 網 漁

一般的にアユ漁などに使われた投網は、１間半から２間位の大きさで、以前は自分の家ですいたものを使っていた。2.5cm位の目の小さいアユ網は絹で、コイ網は麻あるいは木綿製で作られ、木綿の場合は柿シブにつけて強化した。オモリも石でイワガタを作り、鉛を流しこんで自ら作った。（写真参照）

日中に瀬のアユを狙う瀬打ちの他に、夜間に投網を使うヨブリ（ヨボリ）も行われた。ヨブリは、８月の闇夜に２人組で行った。１人が明かりを持つが、古くは肥松（こえまつ）を焚いていた。後に、石油の松明、カーバイトランプなどを使うようになった。

網を打つ人は、できるだけ明かりを見せないようにし、魚のいそうな所へ近づき、サッと投網をうつ。す

▲ 昔の投網（写真提供　山根　功氏）



▲ 手づくりオモリのイワガタ（写真提供　山根　功氏）

▲ 投 網 漁

かさず網を明かりで照らしアユを驚かせ、網にかかったアユを手づかみするかヤスで突いた。

■ ウグイのカゴヅケ漁

ウグイやカワムツを捕るには、オオゾウキと呼ばれるかごが使われた。オオゾウキの口を、直径５～６㎝の穴をあけた白い布で多い、穴の入り口には藁で作ったかえりをつける。餌は、ヌカダンゴに酒を混ぜた物が使われた。

■ スルバ（スリバ）漁

ウグイを対象とした漁で、春ウグイが群をなして河川の上流の浅瀬へ産卵のため遡上するときに行われた。河川の浅瀬に、馬蹄形（ばていけい）に下流に入り口を向けて石や柳の木を積み上げ、上縁は水面上に出しておき、中には、きれいな小石を敷きつめる。ウグイが産卵に入ると、入り口を石などでふさぎ、手網や投網で魚を捕った。

■ ヤ ナ 漁

ヤナ漁は、抱卵したアユが産卵のため川を下る８月末から10月にかけて行われた。川上に向けてＶ字形に石を並べ、中央に竹製の簀（す）をもうける。簀は竹を糸でＵ字形に編んだもので、それを川底に対して少し斜めに置く。簀の中を通る水は漏れ、簀の上ではねるアユやウナギを捕まえる漁法である。普段は簀の所に人がついていたが、タモ（網になっている袋）を簀につけておくこともあったという。

■ ドクフミ漁

山で採ってきたサンショの木の皮をむき、大きな釜で灰を混ぜて煮る。それを袋に入れて川へ持って行き、漁場の川上でコモに包んで足で踏むと、サンショの皮の毒で川下の魚が腹をかえして浮きあがるので、それを拾い歩く漁法である。

■ 全国的に注目される神戸川の四つ手網漁

夏を過ぎたころから、神戸川中流部の川べりに四つ手網の足場が目立ちはじめる。地元ではよく知られたアユ取り漁法の一つで、秋に産卵のために川を下ってくるアユを、大型の四つ手網ですくい取るものだ。

長年神戸川の流域で生活し、四つ手網を見慣れてきた筆者にとっては、どこにでもある風景と思いこんでいた。しかし、県内や他県の河川では全く見られなかったことから、機会ある事に魚類学者などから聞き取りを行ってみた。その結果、驚いたことに他の河川では

▲ 四つ手網

見られない神戸川固有の伝統漁法であり、全国に誇れる貴重な文化財であることが分かってきた。

四つ手網漁そのものは一般的な漁法で、シロウオや稚アユなどを捕獲する漁法として全国各地でみられる。しかし、アユの生態を巧みに利用した、生魚のアユを捕獲する豪快な漁法としては、おそらく全国唯一のものと思われる。

神戸川の四つ手網漁は、幅は縦５ｍ、横４ｍ四方の網を４本の竹の先に張り、川底に沈めておき、頃合いを見計らって引き上げるといった原始的なものである。網は、あんばと呼ばれる台座の上から、一人で引き上げる。かなりの加重があるため、引くときには縄ばしご状の引き綱が用いられる。運よくアユが網にかかれば、網の下部に集まるよう網の張り具合が調整されており、中に入ったアユは長い柄のついたたも網ですくい取る。一見簡単なような漁法に見えるが、実はアユの生態や川の状況を熟知していなければできない特殊な漁法なのである。

漁は、川の水が濁るほどの雨が降り、増水した流れに乗じて一斉にアユが下るときに行われる。網は、急な瀬や取水堰の上流部など、下ってきたアユがいったん立ち止まったり引き返したりする、少し流れの緩やかな一時滞留する場所にセットされる。漁獲高の差は、網をセットする場所の選定や、どんな川の状態の時に漁を行うかなど、戦略の差によって決まる。従って、昔からよい場所を確保し、経験も豊かな老練の漁師さんの漁獲が高くなるのは当然のことである。

実際の漁は、雨模様の、それも夜中や早朝に行われることが多いため、網を引き上げているシーンを見ることはあまりないが、川べりに並んだ四つ手網から、その豪快な漁の様子が想像できる。

ここで疑問となるのは、なぜ神戸川だけにこの漁法が見られるのかということだ。今のところ、その理由はよく分かっていない。神戸川では近年、斐伊川や江川、高津川などで行われている刺し網漁など、アユを大量に捕獲する漁法が禁止されている。瀬張りと呼ばれる漁法で、下ってくるアユを一網打尽に獲るやり方は、漁業資源の保護の点から大いに問題があることが専門家から指摘されている。四つ手網による漁獲量が、神戸川におけるアユの生産量とうまく合致しており、知らず知らずのうち漁師に受け入れられ、今日まで受け継がれてきたとすれば、持続可能な漁法として大いに注目される。

いずれにしても、非常に珍しく貴重な漁法であることから、竹や網など使用される個々の道具類や、設置場所選定のポイントなど、四つ手網に関する全ての情報をとりまとめ、記録保存するとともに、広く社会にその貴重性などについて発信していくことが望まれる。

（佐藤仁志）

■ シジミ漁

神戸川河口付近では近年シジミ漁が盛んに行われている。古来より汽水域があり生息が確かめられるが、昭和55年にシジミの試験放流を行ってからは、資源量として安定してきた。

昭和58年頃までは素手かジョレンに連尺をつけた方法に限られていたが、昭和58年以降は動力船での操業に変っている。動力船びきは、シジミ部会長の金築重夫氏が最初に導入されたようだが、船首から伸ばしたロープに竹か鋼材を柄にしたジョレンを牽引して河床に生息するシジミを砂ごと（引き上げる）方法であった。漁師は船尾近くの横でジョレンを持ち、時折上下させながら砂を除去した。

平成８年頃からは改良を加え、ロープの位置を船首から船外機の横をかすめて船尾の真後ろに移し、鋼材に付けたジョレンを牽引する方法に変化している。この方法により、漁師の体力を消耗を少なくすると共に、短時間での操業が可能となった。

（金築重雄）

第二章　神戸川の生態

■ 神戸川に生息する魚介類

１，はじめに

神戸川における魚介類の調査は、1971年に島根県が水野信彦氏に依頼して行った調査以来、筆者が確認している範囲ではこれまでに９回ほどの調査が行われている。ここでは、これらの既存文献と、筆者がこれまでに得ている知見をもとに、神戸川に生息する魚類について述べてみたい。

２，神戸川に生息する魚類

これまでに行われてきた神戸川における魚類調査は、河川全体に及ぶものと、下流部や支流に限定されたものなどがある。河川全体に及ぶ調査は過去に５回行われており、４回は範囲を限定した調査である。以下に、これらの調査結果をもとに、確認魚種やそれらの生態区分、魚類相の変化、特筆すべき魚類などについて述べる。

（１）確認された魚種

これまで報告されている文献は、調査された時代のちがいなどにより、種名の取り扱いなどが必ずしも統一されていない。また、中には若干疑義のあるものも含まれており、筆者の判断で整理を行った。

その結果、神戸川水系でこれまでに確認された魚種は、別表「神戸川に生息する魚類目録」のとおり31科77種（一部属を含む）となった。また、地方名についても、可能な限り記述してみた。地方名については、神戸川水系でも地域によってかなり異なると考えられることから、神戸川漁協の各支部単位で地方名を整理しておくことが望まれる。

（２）生態区分と生息域

神戸川に生息する魚類は、その一生を淡水域で生活する「淡水魚」と、一生の間に淡水域と海を往復する「回遊魚」、それに海や汽水域を主な生息域とし、河口域に侵入してくる「海産魚」の３つの生態区分に分けることができる。これまでに神戸川で確認された77種の魚類について、生態ごとに分けてみると、「淡水魚」はゴギ、ヤマメ、カワムツなど37種（48.0%）、「回遊魚」はアユ、サケ、ウナギなど29種（37.7%）、「海産魚」はヒラメ、ギンポ、メジナなど11種（14.3%）となる。なお、海産魚は今後の調査によりより増加する可能性が高い。

次に、これらの魚類がどのような場所に生息しているか、大まかにみてみよう。魚類の生息は、水質や水温、低質、周辺の自然環境などによって大きく左右されるが、一般的に河川最上流部にはゴギ、ヤマメ、タカハヤが生息し、稀にドンコやカワヨシノボリもみられる。少し下った河川上流部では、カワムツ、ウグイ、タカハヤ、カワヨシノボリ、ドンコなどがよくみられ、カジカ（大卵型）も生息している。

河川中～下流部では、最上流部に生息する魚類や海産魚を除くほとんどの魚類がみられる。

中でも注目されるのはアユで、代表的な漁業対象魚種となっている。主な産卵場は神戸堰直下の水域と、馬木町上流の水域で、産卵の最盛期は10月上旬から11月中旬である。産卵場は、細礫（２２～4.75㎜）～粗砂（0.425～２㎜）の組成が高い底質の水域を好むことが分かっている。

中下流部で数的に多く生息している魚種としては、オイカワ、カワムツ、ウグイ、ヨシノボリ類で、古志堰より下流では特にオイカワが多くみられる。

回遊魚の多くは、古志堰より下流に多いが、一部は堰を超え馬木当たりまで遡上してくる。

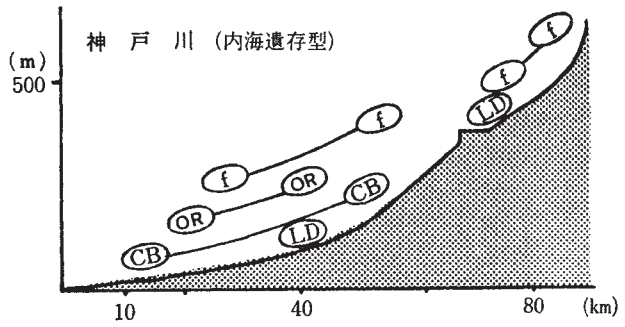
ハゼ科の魚類の多くは両側回遊魚で、川で産卵し孵化した稚仔魚が一旦海にくだり、再び河川を遡上してくる。ヨシノボリのなかまも、多くがそのような習性をもっているが、カワヨシノボリだけは大きな卵をもち、海にまで下ることなく川のなかで一生をすごし、河川の上流部を主な生息域としている。

▲ カワヨシノボリ

神戸川では、このカワヨシノボリなど、島根県内で確認されているヨシノボリのなかま６種の内、ルリヨシノボリとクロヨシノボリを除く４種が確認されている。この内トウヨシノボリは、斐伊川が西流していた時代に形成されていた「神戸水海（かんどのみずうみ）」から遡上していた遺存種の可能性がある。近年では、琵琶湖から移入したトウヨシノボリもみられる。なお、斐伊川には宍道湖まで下り再び遡上してくるトウヨシノボリが生息している。海にまで下ることのない宍道湖型とも呼ばれるこのトウヨシノボリが、斐伊川の放水路の完成に伴い、神戸川にも生息域を拡大してくることも考えられる。

▲ トウヨシノボリ（宍道湖型）

ヨシノボリの仲間は、河川環境等によって棲み分けを行うことが知られている。日本海に注ぐ小河川のようには明瞭でないものの、神戸川においても下図のように生息域の違いが見られる。神戸川の特徴としては、カワヨシノボリやオオヨシノボリが比較的下流部まで分布していることや、来島ダム上流に湖沼陸封性のオオヨシノボリが生息しているなどが上げられる。



神戸川におけるヨシノボリ類の分布状況

〔凡例〕ＣＢ：シマヨシノボリ、ＬＤ：オオヨシノボリ、
ＯＰ：トウヨシノボリ、ｆ：カワヨシノボリ

越川他（1985）より引用

河口部には海産魚や回遊魚が多く生息しており、ボラのなかまやハゼのなかまのほか、スズキやクサフグなどがよくみられる。

（３）魚類相の変化について

魚類相の変化については、過去に行われた魚類調査で確認された魚種の変化や、日頃観察している川の状況などからある程度推察することができる。

まず、1971年に行われた調査時点で、本来神戸川に生息していなかったと考えられる外来魚種としては、ニジマス、ワカサギ、モツゴ、カマツカ、オイカワが考えられる。これらの内、ニジマスとワカサギは放流によるもので、その他の魚種は、昭和24年に組合が設立され、稚仔魚放流用のアユの稚魚に混じって移入された可能性がある。なお、これらの内オイカワは、それ以前から生息していたとの情報もあり定かではない。

▲ オイカワ

その後移入された外来魚種として、ゲンゴロウブナ、ビワヒガイ、コウライニゴイ、ホンモロコ、イトモロコ、スゴモロコ、コウライモロコなどが上げられる。これらについて魚種ごとに初めて確認された調査時期をみてみると、ゲンゴロウブナは1980年、タイリクバラタナゴは1979年、ビワヒガイは1991年、コウライニゴイは2003年、ホンモロコ、イトモロコは1979年、スゴモロコは1980年、コウライモロコは2003年となる。このように、1971年以降において確認された魚類でも、比較的早くから生息し始めたものと、最近になってからみられるようになったものがいることが分かる。

一方、古くから生息しているものの、最近は全く確認されていない魚種もいる。例えば、スジシマドジョウやニジマス、サクラマス、ワカサギは、1979年の調査以降は記録がない。カワヤツメは1971年から1980年までの４回の調査すべてで確認されているが、1981年

からは確認されていない。

以上の他、過去の記録としては「レンギョ」と呼ばれるハクレン又はコクレンが上げられる。昭和38年又は41年に放流され、45年に河口で１mほどに生長した個体が捕獲されたとの記録がある。

（４）特筆すべき魚種

神戸川で特筆すべき魚類として、まずゴギが上げられる。神戸川の最上流部は、水温も低く水も清く澄んでおり、ゴギやヤマメの聖域となっている。なかでも、注目されるのがゴギだ。ゴギの名は、地方名と思われがちだが、図鑑にも出ているりっぱな魚種名である。河川の最上流部に生息するゴギは、中国地方固有のイワナで、以前は、独立した種として位置づけられていたこともあるが、現在ではイワナの一つの型として区分されている。

▲ゴ　ギ

全体にイワナとよく似ているが、頭の部分まで白い小斑点が続いているのが特徴だ。ゴギは、もともと斐伊川から高津川までの日本海に注ぐ島根県内の水系だけに生息していたが、広島県や山口県の渓流にも移入され自然繁殖している。絶滅が危惧されている稀少種で、環境庁のレッドデータブックにも取りあげられている。ゴギが生息している水系の源流部では、自然林の伐採や林道開設などの環境改変に加え、近年の渓流釣りブームに伴う乱獲により各地で減少の傾向にある。また、養殖用に持ち込まれた他地域に生息するイワナが逃げ出し、在来のイワナであるゴギと交雑してしまう恐れもある。最も南に分布するイワナであるゴギを、島根県の宝として守っていく必要があり、神戸川の源流部はその大きな役割を担っている。なお、同じ河川最上流域に生息するヤマメについては、放流に伴い従来から生息していたヤマメがほとんど見られなくなってきている。放流に当たっては、種が同じであるだけでなく、可能な限り地域の遺伝子を受け継いできた個体群による放流が望まれる。

▲カワヤツメ

北方系の魚種で、島根県が生息南限に当たるカワヤツメやサケも注目される。

カワヤツメは、ヤツメウナギ科の円口類で、吸盤状の口を持つ特異な魚のなかまである。他の魚の脇腹に吸い付き、皮膚を食い破って体液を吸ったり内蔵を食べたりする。同じなかまのスナヤツメも近年激減しており、注意深く見守っていく必要がある。

▲サ　ケ

サケは、かつては年に300～400尾とれ、標高約70mの佐田町八幡原の堰提まで遡上していたということであるが、潮発電所への導水によって流量が減少したことなどから、現在では古志堰提を越えるものはほとんどない状況となっている。近年では個体数も激減し、神戸川漁協が遡上してきた個体を捕獲し、採卵・放流を行っている。

カジカのなかまも注目したい。「カジカ」と言えば、鈴を降るような美しい声で鳴く「カジカガエル」を思い起こす人が多いが、生物種名で「カジカ」と言えば魚のカジカを指す。カジカは、河川の上流部の清流に

▲ カジカ（大卵型）

生息しているが、近年生息数が減少してきている。

地元でアイカケボッカと呼ばれるアユカケ（別名カマキリ）は、調査では毎回確認されているものの近年

▲ アユカケ（カマキリ）

減少してきている魚種の一つである。これらカジカ科の魚類は、金沢などではゴリ料理の材料とされる有用魚であり、ぜひ復活させたいなかまの一つである。

ドブガイなど、大型の貝類に産卵するといった特異な生態を持つタナゴのなかまやヒガイにも注目したい。神戸川で確認されているタナゴのなかまは、タイリクバラタナゴとヤリタナゴである。タイリクバラタナゴは外来の魚種で、以前各地に生息していたとニッポンバラタナゴに代わって現在生息していると考えられている。ヤリタナゴは在来のタナゴで、筆者の子供の頃にはキンギョブナと呼んでいた記憶がある。

▲ ヤリタナゴ

ヒガイのなかまでは、カワヒガイとビワヒガイが生息している。この内、在来のヒガイはカワヒガイで、ビワヒガイは琵琶湖からアユの稚魚に混じって入ったものと思われる。神戸川で以前「ムギソロ」の地方名で呼ばれていたカワヒガイは、極めて稀な魚になっており、何とか保護していきたい魚種の一つである。

３，神戸川に生息するその他の魚介類

神戸川で漁業の対象とされる魚類以外の生物では、モクズガニとヤマトシジミがある。この２種について取り上げてみたい。

（１）モクズガニ

地元で「ツガニ」とか「ケガニ」、「マノクツガニ」などと呼ばれているモクズガニは、アユに次ぐ重要な漁獲資源である。

９～10月ごろになり水温が低下すると、河川の上流部で生活していた個体が産卵のため川を下る。下るのは、雨の日の日没から夜明けにかけてが多く、一晩中川を下り続ける。一部はそのまま居残り、４～５月に産卵のため川を下る個体もある。産卵期間は10月ごろから翌年の６月ごろまで長期にわたり、河口域または浅海域で産卵・ふ化する。３月中旬ごろから甲長１cmぐらいに育った稚ガニが、河口域から上流へと上っていく。登る速度は、１cm程度の小型のカニで一晩に１km程度といわれている。

河川の上流部で成長した親ガニは、前述のように秋口に多くが川を下る。漁獲されるのはこの時期で、河川に仕掛けられたカニ筌で捕獲される。

▲ モクズガニ

▲カ　ニ　筌

（２）エビ類

神戸川に生息するエビ類としては、テナガエビ科のテナガエビ、スジエビ、ヌマエビ科のミゾレヌマエビ、ヒメヌマエビ、ミナミヌマエビ、ヌマエビなどが知られている。この内、テナガエビは大型で生息数も多く、漁獲対象種として注目される。

▲テナガエビ

（３）ヤマトシジミ

地元で一般的に「シジミ」と呼ばれているヤマトシジミは、最近注目されている漁業対象の貝類である。生息域は、河川下流部の海水が遡上してくる汽水域で、宍道湖産の稚貝が放流されていることもあり、最近は漁として成り立ち始めている。

ヤマトシジミは雌雄異体（マシジミは雌雄同体）で、メスが卵を産み（卵生）オスの精子で受精する。受精した卵は３～10日間水中に浮遊し、拡散して水底に定着する。これに対しマシジミは、雌雄同体の卵胎生で、母貝から生み出された後に浮遊期はなく、拡散する速度はヤマトシジミに比べ遅い。

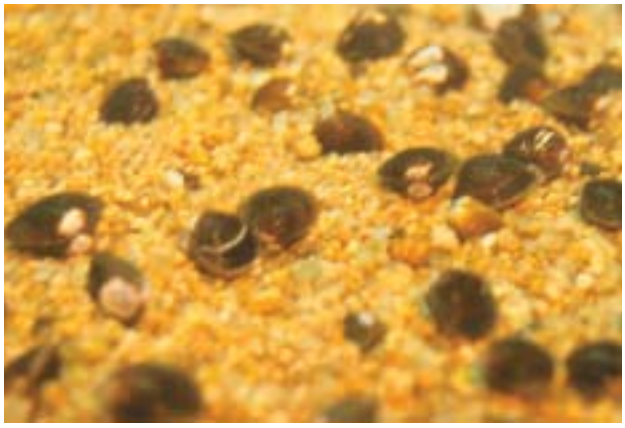
ヤマトシジミの産卵には、塩分濃度が大きく影響し、受精に最も適した塩分濃度は海水の約６分の１（５psu）といわれている。これより塩分濃度が高い場所では、浸透圧の関係から卵の水分が流出して収縮し、受精不能となる。逆に淡水では水を吸収して卵が膨らみ、受精反応しなくなることが分かっている。

このように、ヤマトシジミは神戸川河口部の限られた塩分濃度の環境下でしか産卵・受精ができない。このため、流れのある下流部においては、産卵・受精し拡散することが宍道湖のような湖に比べ容易ではないことが想像できる。

一方、稚貝にまで生長したヤマトシジミは、かなりの高塩分や淡水域でも生き延びることができる。このため、神戸川で漁業資源としてヤマトシジミを考える場合には、産卵環境の改善など自然産卵の増加を図る努力を行いつつ、当面は宍道湖など他地域からの稚貝の放流を継続することが肝要と考えられる。

なお、神戸川には上流部にマシジミが生息しているが、漁業資源にはほとんどなっていない。

近年心配されるのは、タイワンシジミなど外来のシジミの侵入である。神戸川に流入する上流部の小川では、外国から輸入されたシジミ類が一次保管されていたことなどもあり、その拡大が危惧されることから、外来種対策を徹底していく必要がある。



▲ヤマトシジミ

（佐藤仁志）

神戸川に生息する魚類目録

NO	科　名	種　名	地方名	支部流域での呼び名						
				飯南支部	窪田支部	須佐支部	乙立支部	出雲東支部	出雲西支部	長浜支部
1	ヤツメウナギ	カワヤツメ	ヤツメ、ヤツメウナギ	カワヤツメ			ヤツメ	ヤツメウナギ	ヤツメウナギ	
2		スナヤツメ	ヤツメ、ヤツメウナギ			ヤツメウナギ	ヤツメ			
3	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ		ウナギ				
4	ニシン	コノシロ								
5	コ　イ	コ　イ	コ　イ	コ　イ		コ　イ	コ　イ			
6		ギンブナ	フ ナ、マブナ	ギンブナ				フ　ナ	マブナ	
7		ゲンゴロウブナ	ヘラブナ	ゲンゴロウブナ		ヘラブナ	ゲンゴロウブナ	フ　ナ		
8		タイリクバラタナゴ	キンコ							キンコ
9		ヤリタナゴ	ニガザッコ、トノサンバエ							
10		オイカワ	ハエンゴ、アカンバエ、ザッコ、ネンバ（稚魚）	ヤナギバエ		アカンバエ	ザッコ	ハエンゴ	ハ　エ、アカンバエ	
11		カワムツ	ハエンゴ、アカンバエ、アカモチ（婚姻色の出たもの）、ネンバ(稚魚)など	アカモジ	アカンバエ	ハイゴ	アカンバイ、ザッコ	ハエンゴ	ハ　エ、アカンバエ	
12		ハ　ス	ハ　ス	ハ　ス				ハエンゴ		
13		ウグイ	ウグイ、イ　ダ	イ　ダ		ウグイ	ウグイ			
14		タカハヤ	ドロンバエ、ドロンバイ、ヤナギバエ	ドロンバエ	ドロンバエ	ドロンバエ	ドロンバイ			
15		カワヒガイ	サクラバヤ、ムギソロ							
16		ビワヒガイ								
17		タモロコ								
18		カマツカ	カマツカ、キ　ス				キ　ス			
19		コウライニゴイ	ニゴイ	ニゴイ	ニゴイ		ニゴイ			
20		タモロコ								
21		ホンモロコ								
22		イトモロコ	イシバヤ							
23		スゴモロコ								
24		コウライモロコ								
25		モツゴ								
26	ドジョウ	ドジョウ		ドジョウ		ドジョウ	ドジョウ			
27		シマドジョウ	スナドジョウ、スナコリン、カムドジョウ、メコドジョウなど	スナドジョウ		シマドジョウ	スナコリン	スナモグリ		
28		スジシマドジョウ								
29	ギ　ギ	ハゲギギ	ギーギ、ギーギー、ギータ、ギ　ギ	ギ　ギ	ギーギー	ギーギー	ギーギー	ギ　ギ		
30	ナマズ	ナマズ	ナマズ	ナマズ		ナマズ	ナマズ			
31	サ　ケ	ゴ　ギ					ゴ　ギ	ゴ　ギ		
32		ニジマス		ニジマス		ニジマス	ニジマス	マ　ス		
33		サクラマス		サクラマス				マ　ス		
34		ヤマメ	ヒラベ、ヤマメ	ヒラベ		ヤマメ	ヤマメ	ヤマメ		
35		サ　ケ		サ　ケ			サ　ケ	サ　ケ		
36	キュウリウオ	ワカサギ		アマサギ				アマサギ	アマサギ	
37	ア　ユ	ア　ユ	ア　ユ、ア　イ	ア　ユ		ア　ユ	ア　ユ			
38	メダカ	メダカ	ネンバ				メダカ			ネンバ
39	キ　ス	キ　ス	キスゴ					キスゴ		
40	コ　チ	マゴチ						コ　チ		

神戸川に生息する魚類目録

NO	科　名	種　名	地方名	支部流域での呼び名						
				飯南支部	窪田支部	須佐支部	乙立支部	出雲東支部	出雲西支部	長浜支部
41	カジカ	アユカケ	アイカケボッカ、アユカケボッカ				アイカケボッカ	ボッカ	アユカケボッカ	
42		カジカ	ボッカ（混称）			ボッカ	ボッカ			
43	スズキ	スズキ	スズキ、セイゴ（若）				スズキ			
44	ヒイラギ	ヒイラギ	グーグー							
45	サンフィッシュ	ブルーギル								
46	シマイサキ	シマイサキ								
47	タ　イ	クロダイ	スミヤキ、チ ヌ					チ　ヌ		
48		タ　イ								
49	サヨリ	クルメサヨリ	サヨリ							
50	ボ　ラ	ボ　ラ	ボ　ラ							
51		セスジボラ								
52		コボラ	ナイシ					ナイシ		
53		メナダ	エビナ							エビナ
54	ハ　ゼ	ドンコ	ボッカ							
55		ヒメハゼ	ゴ ズ					ゴ　ズ		
56		スミウキゴリ	ゴ ズ					ゴ　ズ		
57		ウキゴリ	ゴ ズ					ゴ　ズ		
58		ビリンゴ	ゴ ズ					ゴ　ズ		
59		マハゼ	ハ　ゼ、ゴ ズ					ゴ　ズ		
60		アシシロハゼ	ゴ ズ							
61		ゴクラハゼ	スナゴズ							
62		シマヨシノボリ	チョロケン（混称）				チョロケン			
63		トウヨシノボリ	チョロケン（混称）				チョロケン			
64		オオヨシノボリ	チョロケン（混称）				チョロケン			
65		カワヨシノボリ	チョロケン（混称）				チョロケン			
66		ヌマチチブ	ゴ ズ							
67		チチブ	スイツキカンポ（混称）							
68	タイワンドジョウ	カムルチー	ライギョ							
69	ヒラメ	ヒラメ								
70	ウシノシタ	クロウシノシタ	シタビラメ						シタビラメ	
71	フ　グ	ヒガンフグ								
72		クサフグ	スナフグ							
73	ニシギンポ	ギンポ								
74	メジナ	メジナ								
75	カマス	アカカマス								
76	ア　ジ	ギンガメアジ属								
77	アカエイ	アカエイ	ゴンタ						ゴンタ	
計	31科	77種								

（注）支部流域での呼び名は各支部の調査による。

（参考文献）
・斐伊川・神戸川水系生物に悪寒する総合調査（神戸川水系での魚類の生息状態）　1971、３　漁政課　水野信彦
・斐伊川・神戸川漁業調査報告書（斐伊川と神戸川の魚類）　1979（S54）、３（社）日本水産資源保護協会　水野信彦
・神戸川自然環境調査報告　1980，３　島根県水産試験場
・神戸川自然環境調査報告　1980，３　島根県水産試験場
・神戸川自然環境調査報告　1981，３　島根県水産試験場　（神戸川下流における魚類生態調査あり）
・自然環境情報整備に伴う河川調査　1991，３　島根県環境保全課
・神戸川漁業現況調査報告書　1992，２　島根県水産試験場
・放水路生物調査（ハビタットに着目した生物調査結果報告）　2003（H15）、12　国土交通省
・平成20年度　河川調査報告書（神戸川水系：稗原川、波多川、須佐川、高津屋川、小田川）　2009、３　島根県景観自然課

神戸川に生息する魚たち ①（上流～中流部）

▲ コ　ギ（サケ科）

▲ ヤマメ（サケ科）

▲ タカハヤ（コイ科）

▲ カワヨシノボリ（ハゼ科）

▲ カジカ（大卵型）（カジカ科）

▲ ウグイ（コイ科）

▲ ドンコ（ハゼ科）

▲ カワムツ（コイ科）

▲ ギンブナ（コイ科）

▲ シマドジョウ（ドジョウ科）

神戸川に生息する魚たち ②（中流～下流部）

▲ イトモロコ（コイ科）

▲ スゴモロコ（コイ科）

▲ ホンモロコ（コイ科）

▲ モツゴ（コイ科）

▲ ハ　ス（コイ科）

▲ カマツカ（コイ科）

▲ ア　ユ（アユ科）

▲ ニゴイ（コイ科）

▲ オイカワ（コイ科）

▲ シマヨシノボリ（ハゼ科）

神戸川に生息する魚たち ③（中流～下流部）

▲ カマキリ（別名：アユカケ）（カジカ科）

▲ コ　イ（コイ科）

▲ ナマズ（ナマズ科）

▲ ハゲギギ（ギギ科）

▲ タイリクバラタナゴ（コイ科）

▲ ヤリタナゴ（コイ科）

▲ カムルチー（タイワンドジョウ科）

▲ スズキ（スズキ科）

▲ ヌマチチブ（ハゼ科）

▲ アシシロハゼ（ハゼ科）

神戸川に生息する魚たち ④（下流～河口部）

▲ ゴクラクハゼ（ハゼ科）

▲ チチブ（ハゼ科）

▲ ボ　ラ（ボラ科）

▲ メナダ（ボラ科）

▲ セスジボラ（ボラ科）

▲ ゴ　チ（コチ科）

▲ シマイサキ（シマイサキ科）

▲ クロダイ（タイ科）

▲ クルメサヨリ（サヨリ科）

▲ クサフグ（フグ科）

＊カゲロウの大発生

水生昆虫についても、魚類と同様に過去に調査が行われており、斐伊川・神戸川漁業調査報告書（1979, 日本水産資源保護協会）では８目58種余が、神戸川漁業現況調査報告書（1992, 島根県水産試験場）では８目75種がそれぞれ記録されている。中でもカゲロウ目とトビケラ目が多く、全体の約65％を占めている。

水生昆虫は、河床の形体や水質、流速のほか、季節によっても変動があるが、早瀬でフタバコカゲロウが、平瀬でヤマトビケラ属の１種やウスバヒメガガンボ属の１種など小型種が目立つ傾向にあるとされている。

水生昆虫は、分類も難しく一般人にはなじみにくいこともあり、ここではわれわれがよく目にするカゲロウのなかまのアミメカゲロウについて紹介する。

神戸川では、毎年９月10日過ぎになると決ったようにカゲロウの大発生が見られる。

神戸川にかかる橋の上の街灯の下で、おびただしい数のカゲロウが飛び交ったり、橋の上に降り積り折重なってうごめいている姿を気味悪く思ってみた人も多いことであろう。時には路上に厚く堆積し、車がスリップして事故を引き起すこともあるこのカゲロウの大発生が、何故起るのか長年不思議に思って見てきた。何という名のカゲロウなのだろう？どうしてこのような大発生をするのだろう？と長い間疑問に思っていたが、やっとその正体を知ることができた。このカゲロウを採取し、アルコール標本を造って水生昆虫の専門家に見てもらったところ、アミメカゲロウであることが分かったのだ。

▲ アミメカゲロウの大発生

このアミメカゲロウは、日本の中西部の多数の河川で大発生しており、時々新聞の紙面をにぎわしている。近年、この大発生のメカニズムが研究され、その概要が分かってきた。文献によれば、幼虫の大きさは５月で平均体長が３～４㎜、羽化直前の９月上旬で18.5㎜ほどになる。川の中の砂泥中にあるはまり石の側面にそってU字型のトンネルをつくり、トンネル内を流れてくるプランクトンなどの有機物を餌として生活する。そして、９月の上～中旬の数日の内に集中して大量羽化するというとても変った習性を持っており、この大量羽化が私たちから見ると異常発生に見えるというのである。アミメカゲロウは、午後７時ごろから一斉に羽化をし始め、羽化した成虫は２個の卵塊を瀬の水面の上空から産み落す。そして、数時間後にはほとんどの個体が死んでしまうが、このように一斉に羽化することは、魚などの捕食者から逃れやすいというメリットがあるようだ。大発生するのは、このカゲロウの特徴であるとしても、どうしてこのように大量に発生するようになったのだろうか。自分の子供の頃にはこんなにひどくなかったのにという人もいる。また、水質が悪化したからではないかと心配する人も多いと思う。これまでの研究では、水質の問題よりはむしろ川の河床の状況が大きく影響することが分かっており、川底の石が３分の２ほど砂泥の中に埋っている状態を幼虫が最も好み、ごろごろした浮き石がある場所にはほとんど生息しないようだ。30～40年前の河原の状況を思い浮べ、現在の状況と比べてみると分かるように、最近の河原には石ころがごろごろしたような場所がほとんど見られなくなり、ほとんどの河原がツルヨシなどの植物で覆われている。これは、洪水が頻繁に起らなくなってきたためであり、川底も同様に浮き石がなくなり、はまり石がしだいに多くなってきている。その結果、このような河床の状態を好むアミメカゲロウが大量に生息するようになってきたわけだ。川に潜って魚や水生昆虫の調査をやってみるとよく分かるが、最近の川は汚れがひどく川底も汚れ、活力がなくなってきている。このアミメカゲロウの大発生も、川が死にかかっている証拠の一つともいえるかもしれない。このことを、自然界からの警鐘と受けとめ、環境の保全にいっそうの努力をしていくことが肝要であろう。　（佐藤仁志）

■ 神戸川で見られる鳥類

河川は、渓流から河口部にいたるまで鳥類の生活と密接な関わりを持っており、それぞれの環境に適応した鳥類が見られる。

河川上流部の渓流から、それぞれの環境で見られる代表的な鳥類を紹介しよう。

春先、ブチサンショウウオやサワガニなどが生息する自然豊かな渓流沿いの岩の上では、美しい声でさえずるミソサザイの姿が見られる。その澄んだ独特のさえずりは、多くの人たちを魅了する。渓流の上に繁った樹木のてっぺんでは、「ピリーリー、ポィヒーリー、ピールリ、ピールリ、ジィ、ジィ」と鳴くオオルリの声量のある美しい声が響き渡り、谷筋では「キョロロロロー」と鳴くアカショウビンの独特のさえずりが聞かれる。この鳥は「炎の鳥」と呼ばれるように全身が真っ赤のエキゾチックな鳥だ。夏鳥として渡来するカワセミのなかまで全長は約27cm、赤く長いくちばしを持ち、渓流に生息するサワガニやカエル、魚などを餌としている。

▲ アカショウビン

少し下った川の中では、水の中を出入りしながらさかんに水生昆虫をあさる黒っぽい小型の鳥が見られる。渓流の忍者と呼ばれるカワガラスだ。

川辺の岩の上を移動しながら餌を探している黄色っぽいスマートな鳥は、キセキレイである。尾羽を上下に振るのが特徴で、付近の切り立った岩場に巣をかけ、子育てをする。

さらに下り、川幅も広がり流れもゆるやかになると、川にせり出した枝の上で、水中の魚をねらうヤマセミやカワセミの美しい姿が見られる。ヤマセミはハトほどの大きさで、白と黒のツートンカラー、頭の毛を逆立てるのが特徴だ。冬場には、稗原川の合流地点付近まで下ってくる。

▲ キセキレイ

▲ ヤマセミ

一方、同じ仲間のカワセミはスズメよりかなり小さい鳥だが、「渓流の青い宝石箱」と呼ばれるようにコバルトブルーのとても美しい鳥で、愛鳥家を魅了する。

▲ 岩の上で休息するカワウ

川の魚を餌とする鳥たちの代表は、潜って捕獲することができるカワウやカワアイサ、カイツブリなど潜水性の鳥たちである。カワウは近年生息数が増加し、上流部にまで進出してきており、一部は夏場にも見られるようになった。

カワアイサは冬期に渡来する冬鳥で、カモの仲間ではあるが、魚を主な餌とする変わった習性を持っている。近年はカワウ同様河川の上流部でも姿が見られるようになった。特に雄は白黒のはっきりした美しい鳥で、遠くから肉眼でもたやすく確認することができる。

カイツブリは、川のよどみやため池などでよく見られる。近年、ブラックバスの放流などの影響で、ため池などに生息していたカイツブリが減少してきている。

▲ カワアイサ（オス）

上流部の水面では、潜水性のカモの他に、陸上で採餌するオシドリやマガモ、カルガモなどのカモの仲間の姿も見ることができる。中でも、オシドリはドングリ類の実を主な餌とする変わったカモのなかまで、昼間は水面で休息している姿を観察することができる。

川の中にできた砂礫の浜では、イカルチドリが営巣することがある。最近は、河川改修や氾濫の減少等に伴い砂礫の川原が減少してきたため、各地で絶滅が危惧されており、島根県でも準絶滅危惧種に選定されている。

神戸川では川辺などで時々白鷺の姿が見られる。私たちが白鷺と認識している鳥には、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギなどがいるが、川辺でよく見られるのはダイサギとコサギである。この他、青みがかった灰色の羽を持つ大きなアオサギや、ヨガラスと呼ばれペンギンと間違えられることもあるゴイサギなども、岸辺で水中の魚をねらっている。また、古志堰などでは、少し珍しいササゴイの姿を見ることもできる。

▲ 水面で休息するオシドリ（左はメス）

▲ ササゴイ

開けた川の上空では、タカの仲間のミサゴが見られることがある。湖沼や海岸部に多く生息するが、神戸川を遡りかなり上流まで餌を探して飛来する。タカ類の多くは、小型の哺乳動物や鳥類などを餌としているが、ミサゴは同じタカのなかまでも魚を餌とするちょっと変わったタカだ。ミサゴが魚を捕らえる時の様子は一見に値する。魚影を見つけると、数10m上空でホバリングと呼ばれる静止飛行をしながら狙いを定め、急降下して魚を捕らえる。この時には、翼を半開きの状態にして落ちるように水中に足から突っ込み、魚を鷲づかみにする。時には、50cmほどもある大きな魚を捕らえることもある。

▲ 魚を捕らえたミサゴ

馬木町から下流の神戸川では、時々ハクチョウ類が飛来し私たちの目を楽しませてくれる。白鳥は神話や出雲の国風土記にもその存在が記されており、古くか

ら越冬のために渡来していたと考えられる。宍道湖など島根県内に渡来するハクチョウはコハクチョウであり、神戸川にも時々姿を見せる。

宍道湖は日本列島におけるハクチョウ類の南・西限の集団渡来越冬地であり、学術的にも注目されている。神戸川は、宍道湖よりさらに南・西に位置しており、当地に集団が定着すれば南・西限の渡来地ということになる。

現在は、斐伊川改水路関連工事でその姿が見られなくなっているが、工事が始まるまでは毎年のようにコハクチョウが飛来し、川底に繁茂した水草をついばんでいた。平成３年のシーズンには、これまでで最も多い14羽が確認された。放水路工事が完工し、川の自然環境が安定すれば再びコハクチョウの雄姿を見ることができるであろう。

▲ 神戸川に飛来したコハクチョウ

▲ 餌をついばむコハクチョウ

なお、神戸川にはオオハクチョウが稀に飛来することがある。オオハクチョウは、水中にあるマコモの根茎を好んで食べることから、マコモ群落が残っている神戸川河口付近や河口上流部で姿を見ることが多く、10羽を超える群れが渡来することもある。

下流部や河口部には、冬期に渡来するカモの仲間が多くみられる。カモの仲間は、アイサのなかまを除けば、水中に潜るこができないマガモなどの陸ガモ（淡水ガモ）と、水中に潜って貝などの水中にいる生物を採餌するキンクロハジロなどの海ガモ（潜水ガモ）とに大別できる。陸ガモは河川の全域で見られ、河口部ではキンクロハジロなどの海ガモの姿が多く見られる。海ガモの中でもキンクロハジロは、中流域などにも時々飛来し、馬木町付近では数10羽の群れが見られることもある。

▲ キンクロハジロ

河口部では、ウミネコやカワウの群れをはじめ、砂浜に生息するコチドリなど多くの野鳥を見ることができる。

ウミネコは、日御碕の経島が繁殖地として有名であるが、海域で餌をとるウミネコが安定して渡来するためには、塩にまみれた体をきれいにする淡水域が必要だ。淡水が流れ込む神戸川河口部は、ウミネコたちの絶好の水浴び場となっている。神戸川河口部では、経島一帯にウミネコが滞在する12月ごろから夏ごろまで飛来し、盛んに水浴びする姿が見られる。

▲ 河口で乱舞するウミネコ

（佐藤仁志）

第三章　神戸川の流れと文化

■ 神戸川と出雲大社の巨大柱根

神戸川は、女亀山を源流に頓原川や波多川と合流し、出雲平野を貫流して日本海に注いでいる。この神戸川は、平地部における流路の変遷など多くの歴史を持っており、出雲地方の文化形成に大きく寄与してきた。中でも、水を活用した水運への寄与は非常に大きいものと考えられる。

木の文化とも呼ばれる日本の文化を支えてきたのは、スギである。スギの和名は、幹がまっすぐ伸びる木、つまり「直ぐ木」からきている。加工がしやすく、古くからさまざまな用途に使われてきた。遺跡から出土する縄文時代の丸木船も、ほとんどがスギでつくられている。登呂遺跡の水路などに使われたのもスギの板であり、酒樽材、家屋の柱材、電柱材など、スギは日本人の生活と密着したかたちで、それぞれの時代において利用されてきた。

スギは水がとっても好きな樹木である。植林を行う場合にも、谷筋にはスギ、斜面の中程にはヒノキ、尾根筋の乾燥した場所にはマツをというのが植林の原則となっている。谷筋で育ったスギは、主として水運によって山奥から運ばれてきた。出雲国風土記には、「斐伊川では、木材を検査する船が上ったり下ったりしている」と記されており、神戸川も同様の活用がされていたものと思われる。

神戸川が水運に寄与した一例として、出雲大社で発見された巨大柱根との関わりがある。このことについて少し詳しく紹介してみよう。

▲ 吉栗山と神戸川

出雲市佐田町一窪田の神戸川左岸に、吉栗山と呼ばれる標高311mの小高い山がある。天平５年（西暦733年）に書かれた出雲国風土記の神門郡の説明の中に『吉栗山　郡家の西南二十八里なり　檜・杉あり　謂はゆる所造天下大神の宮材造る山なり』との記述がある。つまり、吉栗山ではその昔出雲大社の造営材を育林していたというわけだ。

▲ 吉栗山一帯地形図

一方、平成12年４月に出雲大社の古代の神殿を支えていた巨大柱根が発見され、大きなニュースとなった。

▲ 出雲大社の巨大柱根

調査の結果、直径が135cmほどの巨大な柱根の樹種は、スギであることも判明した。発見された柱根は、鎌倉時代初期の造営のものではないかと考えられており、その時代にスギがどのような分布をしていたのか大いに興味があるところだ。

現在、島根県内に自生しているスギは、三瓶山の中腹など中国山地の標高700m以上の高地にわずかに見られる程度で、低山部の里山に自生するスギは全く見られない。私たちが谷筋などでよく目にするスギ林は、人の手によって植えられたものである。

吉栗山の山麓部の標高は二百数十メートル、現在のスギの自生状況から考えると、そのような標高の低い

▲ 三瓶山の中腹に見られる天然スギ林

場所に、はたして天然のスギがあったのかどうか大いに疑問の残るところである。過去の植生については、地層に堆積した花粉分析結果などから推定することができるが、これまで出雲地方の里山部にスギが自生していたとする確かな証拠もなく、風土記の記述を疑問視する学者もいた。

この疑問に明快な答えを出したのが、平成10年11月に発見された三瓶の埋没林である。三瓶小豆原埋没林が発見されたのは標高二百数十メートルの地点で、今から約3,500年前の縄文時代後期に、三瓶火山の活動に伴って埋没したスギを中心とする巨木林あることが明らかとなった。

このことから、少なくとも縄文時代の後期には、吉栗山山麓など標高の低い里山部にも、スギの自生林があった可能性があることが実証されたわけである。なお、当時の里山はシイやカシ林に広く被われており、スギ林が成立したのは急斜面の岩角地など、土壌条件は悪いものの、雨が多く水分条件は十分みたされるような、特殊な環境条件の場所であったと考えられている。

▲ 掘り出された三瓶埋没林の縄文スギ

このような条件下に自生するスギは、当然のことながら成長が悪く、成長の度合いを示す年輪幅も極めて狭いものである。痩せ地の斜面に自生している屋久スギが、非常に緻密で腐りにくいことなどを考えれば、理解しやすいであろう。三瓶埋没林で発見されたスギも、このことを証明するかのように年輪が詰まっており、直径160cmのもので443年の樹齢を確認している。

ところが、出雲大社で発見された巨大柱根の年輪は粗く、埋没林のスギとはほど遠いものであった。発見直後年輪数や年輪幅を測定する機会があり、詳細な測定を行ってみたところ、直径130cmのもので約100年から180年ほどと粗く、間隔が1.5cm以上もある場所も見られたのだ。また。成長が極めて良好な場合などにみられる二重年輪も多く残っていた。

前述したようなスギの自生条件から考えると、発見された巨大柱根の年輪の粗さは異常であり、天然性のスギと考えることはできないものであった。発掘された柱根すべてに同様の傾向が見られ、大きな疑問が残ったのである。

▲ 柱根スギの年輪測定

前述した天然スギの生育状況や、出雲国風土記の記述などから、筆者は出雲大社の用材として使用されたスギは、植林や育林など人が十分管理し育成した可能性が高く、その場所が吉栗山であったと考えている。もしこれが事実とすれば、従来林学などで語られてき

▲ 出雲大社スギ柱根の年輪

▲ 三瓶小豆原埋没林の年輪

た造林の始まりの歴史をかなり遡らせることになり、吉栗山が造林や育林の発祥の地といえるかもしれない。

ここで、出雲国風土記が記述された頃の、神戸川の状況について考えてみよう。神戸川の水は、昭和31年以来来島ダムから江の川に、かなりの量が分水されている。当時の神戸川は、現在とは異なり豊かな奥山に支えられ、水量ははるかに豊富であったと考えられる。

さらに神戸川の河口部は斐伊川と合流し、神門水海（かんどのみずうみ）と呼ばれる巨大な潟湖を形成していたことが分かっている。湖岸の北端は出雲大社近くまで広がっており、神門水海の名残とされる神西湖は、ほぼその西南端に当たる。

現在国宝に指定されている出雲大社の本殿は、延享元年（1744年）に建立されているが、それより77年前の寛文７年（1667年）にも正殿方式で遷宮が行われており、その時の「御造営日記」が残されている。そこには、造営のための材は130～140人の人夫を動員して兵庫県養父郡八鹿町妙見の山中から搬出し、川や日本

▲ 風土記時代の神門水海と出雲大社

海を使って運搬したことが記されている。この日記の中で注目されるのは、山から下ろす際に川をせき止め、洪水を待って「川流し」を行ったという記述である。古代に於いて、巨木を搬出するための手法として、川の水が使われていたのである。

神戸川左岸に位置する吉栗山は、「川流し」をするのには絶好の場所である。あまたある出雲の里山の中から吉栗山が選ばれたのは、神戸川の存在が大きく関与したことは間違いなかろう。切り出した巨大なスギ材を、神戸川の水を利用して川流しを行えば、潟湖であった神門水海に流れつく。湖に浮かんでいる巨木を集め、出雲大社のすぐ近くの岸に引き上げることは比較的たやすく行えたはずだ。

▲ 鎌倉時代の出雲大社本殿復元模型の一例

この事例が示すように、神戸川は古代出雲文化と非常に深い関わりをもった河川であり、出雲の文化を考える上で、神戸川の存在は欠かせない重要なものである。

（佐藤仁志）

第五編　神戸川漁協振興基金の発足

第一章　基金の発足の背景

斐伊川水系治水事業が昭和58年４月に実施計画調査を着手し、昭和63年７月に基本計画が公示されると、具体的な損失補償問題に入り、平成２年９月からは損失補償基準協定が調印される。平成４年３月13日に財団法人大社湾漁業振興基金が設立された後、平成６年３月15日に神戸川漁業補償が調印され、同年６年６月27日に神戸川漁業振興覚書調印、６月28日斐伊川神戸川治水事業に伴う漁業振興対策に関する覚書、同年10月25日財団法人神戸川漁業振興基金設立許可申請、同年11月10日に財団法人神戸川漁業振興基金設立となる。同年12月16日に寄付財産移転完了届、設立登記完了届、12月22日に斐伊川神戸川治水事業関連漁業振興事業費補助金交付を申請して平成７年１月11日に公布決定を受け、18日に請求書を提出、事業費実績報告書を提出した後、２月10日に補助金額が確定している。事業費補助金の額は２億１千万だが平成６年12月16日付けで組合から１億を寄付財産で移転して基本財産額は３億１千万円となる。

設立に向けての推移を見ると、平成６年９月21日の午後３時から組合会議室にて神戸川漁業振興基金総会が当時の組合長足立秀雄を発起人として開催されている。設立趣意書の要旨には「厳しい内水面漁業の環境に適切に対処するためには、新たに公益的観点に立ち、河川漁業の振興及び親水性レクレーションの質的向上による流域の活性化への貢献を期し、水産資源の維持拡大、漁場環境の保全及び一般河川利用者と漁業者と漁場利用の調整に努める等、神戸川が漁業者のみならず一般県民にとっても魅力あるものになるためにの諸事業を一層協力にかつ継続的に展開する必要がる」と記してある。

初代の役員は理事長足立秀雄、副理事長山本徹雄、理事には永見邦夫、土岩勲、亀滝峯定、笹倉修、石富直正、藤原繁、持田国夫、評議員に栗原敬、田部繁敏、山本秀登志、妹尾真澄、浅津勝芳、山根功が就任している。

平成６年度基金の事業活動の中で、河川資源の維持増大に関する事業においては、アユ４千尾、コイ５千尾、ウナギ300kg、シジミ400kg、モクズガニ130kg、フナ70kg、ヤマメ17千尾を放流している。河川環境の保全に関する事業では、魚類の生息場（産卵場）を整備するとともに、流下ゴミの除去を行う為に、生息場（産卵場）整備を３ヶ所、雑草刈りを含む流下ゴミの除去を５ヶ所行った。資源の管理と活用に関する事業では、遊漁者あるいは河川利用者等に対し、河川利用のマナーの指導等や漁業者とのトラブル防止の為に、漁場巡回指導員の設置、パンフレットの作成を行っている。

役員名簿

［平成６年11月７日～平成７年３月31日］

氏　名	種　別	氏　名	種　別
足立　秀雄	理事長	栗原　　敬	評議委員
山本　徹雄	副理事長	田部　繁敏	評議委員
永見　邦夫	理　事	山本秀登志	評議委員
土岩　　勲	理　事	妹尾　真澄	評議委員
亀滝　峯定	理　事	浅津　勝芳	評議委員
笹倉　　修	理　事	山根　　功	評議委員
石倉　直正	理　事		
藤原　　繁	監　事		
持田　国夫	監　事		

［平成７年４月１日～平成９年３月31日］

氏　名	種　別	氏　名	種　別
足立　秀雄	理事長	栗原　　敬	評議委員
山本　徹雄	副理事長	田部　繁敏	評議委員
永見　邦夫	理　事	山本秀登志	評議委員
土岩　　勲	理　事	妹尾　真澄	評議委員
亀滝　峯定	理　事	浅津　勝芳	評議委員
笹倉　　修	理　事	山根　　功	評議委員
石富　直正	理　事		
藤原　　繁	監　事		
持田　国夫	監　事		

［平成９年４月１日～平成11年３月31日］

氏　名	種　別	氏　名	種　別
亀滝　峯定	理事長	杉本　恒雄	評議委員
山本　徹雄	副理事長	田部　繁夫	評議委員
土岩　　勲	理　事	奥井　繁夫	評議委員
田原　正雄	理　事	福代　晃夫	評議委員
山本秀登志	理　事	岩成　陽治	評議委員
妹尾　真澄	理　事	岩成　　一	評議委員
石富　直正	理　事	浅津　勝芳	評議委員
山田　孝徳	監　事		
中尾　富夫	監　事		

［平成11年４月１日～平成14年３月31日］

氏　名	種　別	氏　名	種　別
土岩　　勲	理事長	那須　洋二	評議委員
岩成　　一	副理事長	佐々木伸文	評議委員
杉本　恒雄	理　事	石川　幸義	評議委員
山本秀登志	理　事	岩崎　芳広	評議委員
妹尾　真澄	理　事	大江　　博	評議委員
石富　直正	理　事	福代　晃夫	評議委員
浅津　勝芳	理　事	岩成　陽治	評議委員
永井　　章	監　事		
金築　重夫	監　事		

［平成14年４月１日～平成17年３月31日］

氏　名	種　別	氏　名	種　別
土岩　　勲	理事長	神田　和夫	評議委員
浅津　勝芳	副理事長	大江　　博	評議委員
佐々木伸文	理　事	片寄　　巌	評議委員
山本秀登志	理　事	堀江　　宏	評議委員
石川　幸義	理　事	山根　　功	評議委員
福代　晃夫	理　事	井上　　馨	評議委員
金築　重夫	理　事	渡邉　民雄	評議委員
三島　正人	監　事		
川本　亮三	監　事		

［平成17年４月１日～平成20年３月31日］

氏　名	種　別	氏　名	種　別
佐々木伸文	理事長	渡邉　民雄	評議委員
金築　重夫	副理事長	高見　　亮	評議委員
福代　晃夫	理　事	安食　一成	評議委員
神田　和夫	理　事	片寄　　巌	評議委員
山本秀登志	理　事	矢田　寿夫	評議委員
堀江　　宏	理　事	足立　美友	評議委員
山根　　功	理　事	伊藤　恒雄	評議委員
伊藤　　修	監　事		
鎌田　　弘	監　事		

［平成20年４月１日～平成23年３月31日］

氏　名	種　別	氏　名	種　別
山根　　功	理事長	矢田　圭吾	評議委員
片寄　　巌	副理事長	成相　友弥	評議委員
安食　一成	理　事	林　　政夫	評議委員
神田　和夫	理　事	景山　　厚	評議委員
足立　美友	理　事	岸　　修一	評議委員
高見　　亮	理　事	上田　進一	評議委員
杉山　寿美	理　事		
長島　智年	監　事		
小村　昌三	監　事		

第六編　斐伊川放水路事業

第一章　斐伊川放水路事業

斐伊川は中国山地の船津山に源を発し、三刀屋川や赤川等の支流を併せながら出雲平野を流れ、宍道湖、大橋川、中海、境水道を通じて日本海に注ぐ河川である。流域の大部分は風化花崗岩で覆われており、古くから砂鉄を原料とした「たたら製鉄」が行われてきた。原料の砂鉄は「鉄穴（かんな）流し」と呼ばれる方法で砂鉄分のみを採取するが、残りの土砂を河川に流出する為に河床が堤内地盤に比べて高くなり、全国でも珍しい天井川になった。このため、斐伊川が氾濫すると、天井川から水が溢れ、その被害が出雲平野一帯に拡大。加えて宍道湖と中海を繋ぐ大橋川の川幅が狭いため、洪水時に水が流れにくい状態にある。さらに宍道湖では洪水時の水はけが悪く、湛水期間の長期化、内水被害増大の原因となっている。特に昭和47年の豪雨では破提寸前の危険な状態になり、宍道湖の増水により松江市市街地や出雲空港などが１週間以上に亘って浸水、２万戸を超える家屋が浸水するなど、甚大な被害が発生した。

このような背景の中、洪水対策の柱として、３つの事業を総合的に行う治水計画を事業化した。①斐伊川と神戸川の上流にダム建設、②中流の斐伊川放水路の建設と、斐伊川と神戸川の改修、③下流の大橋川改修と中海・宍道湖の護岸提整備の３点である。この３点が完成すると、上流のダムで洪水を調整して下流に流れる流量を減らし、中流の放水路で洪水の約半分（最大2,000㎥／s）を神戸川に分流して安全に大社湾に流すことが可能となる。

▲ 斐伊川放水路計画

▲ 神戸堰の新たな魚道

この内の斐伊川放水路事業は出雲市大津町来原付近から、上塩冶町半分までの4.1kmの区間を96mの川幅で新たに掘削し、神戸川に合流させる事業で、平成6年5月12日から着手した。さらに神戸川の川幅を平均で1.5倍（300m～370m）に拡幅する。川幅は古志橋付近で300m、神戸橋付近で350m、妙見橋付近で370mとなる。これにより洪水時に斐伊川の水の一部を神戸川へ分流させ、斐伊川下流部や宍道湖の水位を低下させるが、神戸川は斐伊川水系となり1級河川に昇格する。

これにより古い神戸堰を撤去して新しい堰を造る。山陰本線神戸川橋梁から下流側へ旧神戸堰から約70m下流の位置に施工する。堰の形状はゲートの高さで通過水量を制御できる可動堰。平常時に起立した鋼製のゲートが、出水時に下流側に倒れて水量を調整する鋼製転倒ゲートとなる。その両側に魚類や底生動物が移動可能な斜路式、斜隔壁式を設置する。

▲ 改修前の神戸堰

神戸川堰概要

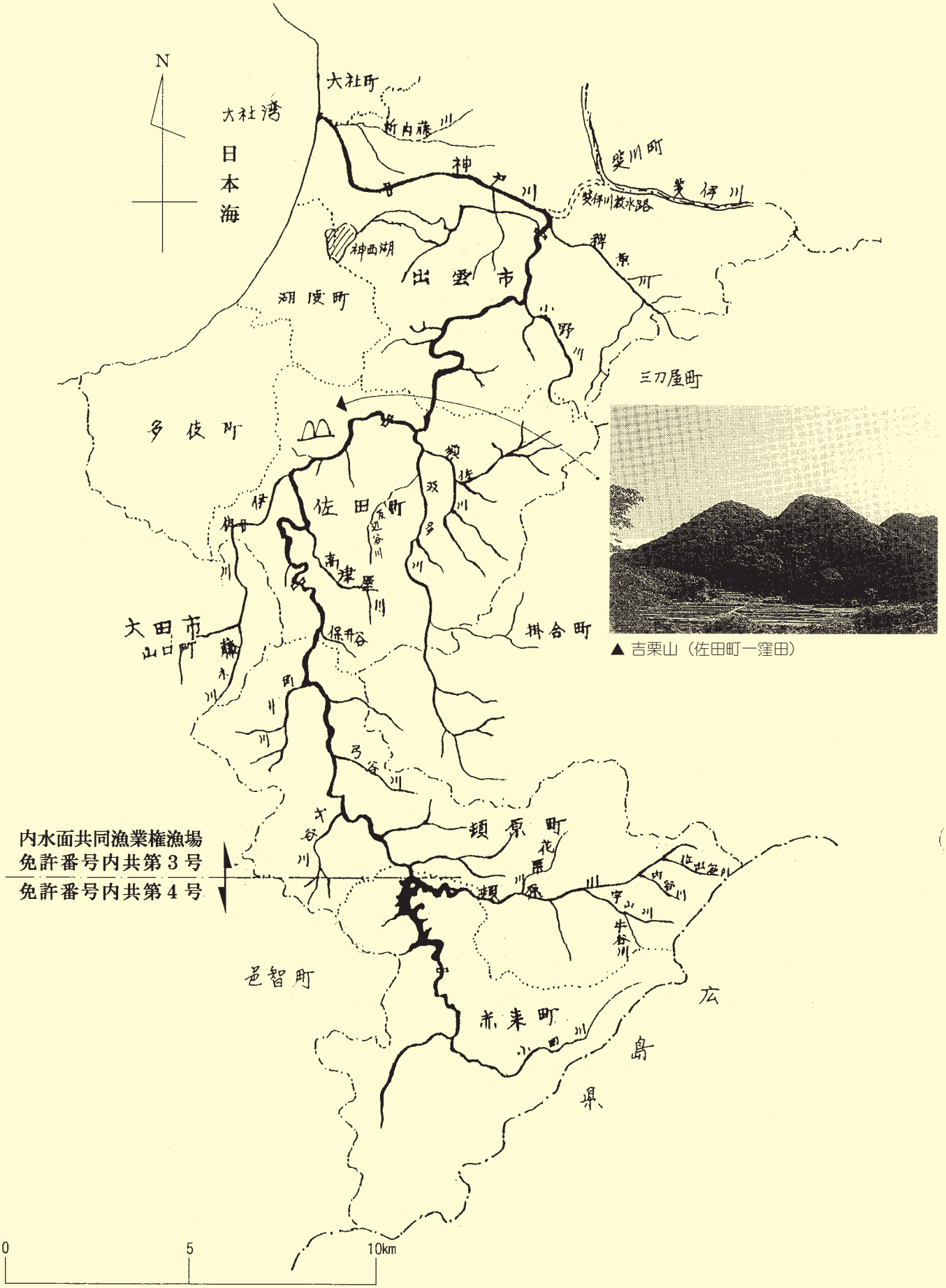
堰堤名	神門堰堤	馬木大井堰	桜　堰	木村堰	殿森堰	森原堰
設置場所	出雲市高松町	出雲市馬木町	出雲市所原町	出雲市所原町	出雲市所原町	出雲市乙立町
長さ(m)	80	100	50	45	40	25
幅(m)	40	50	15	5	5	10
高さ(m)	3	1.5	2	1.5	1.5	1.5
設置年	昭和3年	正徳3年	昭和41年	昭和38年	昭和30年	昭和40年
現状	遡上ヤヤ不良	遡上困難	遡上可能	遡上可能	遡上可能	遡上可能
管理者	出雲市	出雲市	出雲市	出雲市	出雲市	出雲市

堰堤名	八幡原堰	花壇堰堤	畑小僧前堰堤	豊田堰堤	堂原堰堤	ナゴラ堰
設置場所	佐田町八幡原	佐田町八幡原	佐田町一窪田	佐田町一窪田	佐田町下橋波	佐田町上橋波
長さ(m)	40	30	40	20	25	20
幅(m)	8	5	5	5	5	3
高さ(m)	3	1.5	2	1.5	2	1
設置年	大正8年	昭和5年	昭和2年	昭和15年	大正10年	昭和28年
現状	遡上困難	遡上可能	遡上可能	遡上可能	遡上困難	遡上可能
管理者	中国電力㈱	出雲市	出雲市	出雲市	中国電力㈱	出雲市

堰堤名	明谷井堰	御崎堰	明神堰	樋の元堰	五反田堰	大願寺堰
設置場所	佐田町明谷	佐田町反返	佐田町反返	佐田町大呂	佐田町大呂	佐田町大呂
長さ(m)	80	60	50	30	30	30
幅(m)	15	5	5	6	2	2
高さ(m)	1.5	2	3	2	1.5	2
設置年	昭和40年	昭和30年	昭和47年	昭和17年	昭和18年	昭和25年
現状	遡上可能	遡上可能	遡上可能	遡上不可能	遡上不可能	遡上不可能
管理者	出雲市	出雲市	出雲市	出雲市	出雲市	出雲市

堰堤名	須郷堰	坂本堰	井田堰	新開堰	朴の木堰
設置場所	佐田町大呂	佐田町大呂	佐田町大呂	佐田町大呂	佐田町大呂
長さ(m)	20	20	20	20	20
幅(m)	7	5	6	6	2
高さ(m)	1.7	1.5	1.5	1.5	1
設置年	昭和25年	昭和20年	昭和30年	昭和26年	昭和33年
現状	遡上不可能	遡上不可能	遡上不可能	遡上不可能	遡上不可能
管理者	出雲市	出雲市	出雲市	出雲市	出雲市

神戸川全流域河川図



▲ 吉栗山（佐田町一窪田）

神戸川漁業協同組合創立時定款（昭和24年９月５日）

第一章　総則

第一条　この組合は組合員が協同してその漁業の生産能率を挙げ、経済状態を改善し社会的地位を高めることを目的とする。

第二条　この組合は組合員のために次の事業を行う。

一、組合員の事業又は生活に必要な物資の供給

二、組合員の事業又は生活に必要な共同利用に関する施設

三、組合員の漁獲物その他生産物の運搬加工又は販売

四、水産動植物の繁殖保護その他漁場の利用に関する施設

五、組合員の漁業に必要な設備に関する施設

六、組合員の福利厚生に関する施設

七、水産に関する技術の向上及び組合事業に関する組合員の知識の向上お図るための教育並びに組合員に対する一般的情報の提供に関する施設

八、組合員の経済的地位の改善のためにする団体協約の締結

九、組合員の事業又は生活に必要な資金の貸付

十、組合員の貯金の受入

十一、全各号の事業に附帯する事業

第三条　この組合は神戸川漁業協同組合と称する。

第四条　この組合の地区は次の区域とする。

島根県出雲市、簸川郡朝山村、山口村、窪田村、神門村、神西村、稗原村、長浜村、大社町、飯石郡波多村、来島村、志々村、西須佐村、東須佐村、赤名町、頓原町

第五条　この組合は主たる事務所を島根県出雲市に従たる事務所は必要に応じて理事会で定める。

第六条　この組合が漁業協同組合連合会に加入し若しくは脱退し又は団体に対し出資をしようとするときは総代会の議決を経なければならない。

第七条　この組合の公告は組合の掲示板に掲示してこれをし且つ必要があるときは島根県新聞に掲載してこれをする。

第八条　この定款に定めるものの外業務の執行会計その他必要な事項は総代会の議決を経てこれを定める。

第二章　組合員

第九条　この組合の地区内に住所お有する漁民で1年のうち30日以上漁業を営み又これに従事するものはこの組合の正組合員となることができる。

２．右に挙げる者はこの組合の准組合員として加入することができる。

一、組合の地区内に住所を有する漁民で漁業を営み又はこれに従事する日数が前項に規定する日数に達しないもの

二、組合の地区内に住所又は漁業の根拠地を有する漁業生産組合

三、組合の地区内に住所を有しない漁民でその営み又は従事する漁業の根拠地が地区内にあるもの

四、組合の地区内に住所を有する水産加工業者で水産加工業協同組合に加入していないもの

第十条　組合員になろうとする者は氏名又は名称・住所及び引受けようとする出資口数を記載した加入申込書を組合の理事に対し提出しなければならない。但し、漁業生産組合の場合にあっては、定款、最近作成さ

れた財産目録並びに貸借対照表及び次の事項を記載した書面を添付しなければならない。

一、年月日

二、事業の概要

三、役員の住所及び氏名

四、出資の総口数

２．組合は前項の申込書を受けこれを承諾したときは、その旨を申込者に通知し出資の振込をさせた後、組合名簿に記載する。

３．出資口数を増加しようとする組合員については、第一項本文及び前項の規定を準用する。

第十一条　組合員はこの組合の承諾を得なければその持分を譲り渡すことができない。

２．組合員でない者が持分を譲り受けようとするときは前項第二項及び第二項の規定を準用する。但し、同条第二項の出資の振込をさせない。

第十二条　組合員がその資格を失う又はその資格に変動があるときは直ちにその旨を組合に届け出なければならない。

第十三条　組合員の相続人でその組合員の死亡に依り持分の払戻し請求権の全部を取得した者が直ちに組合に加入の申込をし、組合がこれを承認したときはその相続人は被相続人の持分を取得したものとみなす。

第十四条　組合員が次ぎの各号の一に該当するときは総会の議決を経てこれを除名することができる。この場合、その組合員に対し総会において弁明する機会を与えなければならない。

一、一年間組合の施設を全く利用しないとき

二、出資の振込経費の支払その他組合に対する義務の履行を怠ったとき

三、組合事業を妨げる行為をしたとき

四、法令又はこの組合の定款若しくは規約に違反しその他組合の信用を失わせるような行為をしたとき

五、除名を決議したときは、その理由を明らかにした書面をもってこれを組合員に通知しなければならない

第十五条　組合員が脱退した場合には第二十六条第一項第二号の規定に依り算出した持分額を払戻すものとする。但し、除名によって脱退した場合には同号の規定に依り算出した持分額の半額とするものとする。

第十六条　組合員はやむを得ない理由があるときは理事の過半数の承認を得てその出資の口数を減少することができる。

第三章　費用分担及び積立金

第十七条　組合員は出資一口以上を持たなければならない。但し、五口を超えることが出来ない。

第十八条　出資一口の金額は二百円とし全額一時振込とする。

第十九条　この組合は第二条第四部から第八号までの事業並びにこれらの事業に附帯する事業の経費に充てるために組合員に経費を賦課することが出来る。

２．前項の賦課金額徴収の時期及び徴収方法は総代会でこれを定める

３．前二項の規定に依り、既に徴収した賦課金はこれを返還しないものとする

第二十条　賦課金を滞納する者があるときは、組合長は期限を指定してこれを督促しなければならない。

２．督促を受けた組合員が指定期日までにこれを納付せないときは期日後一日に付き滞納金額の百分の一以内の過怠金を徴収することが出来る。

第二十一条　この組合は損失の補填に充てるため出資総額と同額に達するまで毎事業年度の余剰金の五分の一以上準備として積立てるものとする。

第二十二条　過怠金及び第二十六条の規定に依り算出した持分で払戻をしないものの額はこれを準備金に繰入れるものとする。

第二十三条　この組合は第二条第四号の事業の費用に充てるため毎事業年度の剰余金の十分の一以上を教育情報事業資金として翌事業年度に繰越するものとする。

第二十四条　この組合の剰余金から特別積立金を積立てすることが出来る。

２．特別積立金は損失の補填に充てるものとする。但し、総代会の議決に依り臨時の支出に充てることが出来る

第二十五条　この組合は職員退職給与規定に定めるところに依り、毎年職員退職給与積立金を積立てるものとする。

２．職員退職給与規定は理事がこれを定める

第二十六条　この組合の財産についての組合員の持分は次ぎの標準に依りこれを定める。

一、振込んだ出資金の総額に相当する財産に応じて算出する。但し、その財産が振込んだ出資額より減少したときは各組合員の出資額に応じて減額して算出する

二、其の他の財産についてこの組合の解散の場合に限って算出するものとし、その算出の方法は総代会でこれを定める

２．持分の算出するにあたり計算の基礎となる金額で一日未満のものは切り捨てるものとする

第四章　役　職　員

第二十七条　この組合に役員として理事二十人、監事五人を置く。

第二十八条　理事は組合員の中から選挙する。但し、総会の議決により理事のうち二人は正組合員以外から選挙することが出来る。

２．組合長・副組合長及び専務理事は前項の選挙に依り理事に当選した者の中から理事会において選挙する

３．前二項の規定するものの外、外役員の選挙は選挙規程の定めるところによる

第二十九条　組合長はこの組合を代表し理事会の決意に従って業務を処理する。

２．組合長に事故あるときは副組合長がこれに代り、組合長及び副組合長共に事故あるときは専務理事がこれに代る

３．専務理事は組合長を補佐し自ら組合事務を掌握する

第三十条　　監事は少なくとも毎事業年度当組合の財産又は業務の執行の状況を監査しなければならない。

２．監事は前項の監査の結果につき理事会に報告し、意見を述べなければならない

３．監査についての細則は監事がこれを定める

第三十一条　役員の任期は一年とし前任者の任期満了の日の翌日から起算しる。但し、創立当時の役員の任期は昭和二十五年四月末日までとする。

２．水産産業協同組合法第四十四条の規定に依る全員の改選によって就任した役員の任期はその改選によって退任した役員の残りの期間とする

３．定員の補充又は水産協同組合法第四十四条第二項但し書の改選に依って就任した役員の任期は現在役員の残りの期間とする

第三十二条　役員の報酬その他の給与は総代会の議決によってこれを定める。

第三十三条　この組合は参事及び会計主任各一名を置くことが出来る。

２．参事及び会計主任の職務は理事がこれを定めるものとする

第三十四条　この組合には職員若干名を置き業務の処理を行わせる。

２．職員の任命は理事会の承認を得て組合長がこれを行う

第五章　総会及び総代会

第三十五条　理事は次の場合に臨時総会を招集する。

一、理事が必要と認めたとき

二、正組合員がその五分の一以上の同意を得て第四十二条第一項各号の事項又は既に総代会において議決した事項のうち会議の目的としようとする事項及び招集の理由を記載した書面を理事に提出して招集を請求したとき

三、正組合員がその五分の一以上の連署をもって役員の改選を請求したとき

２．前項第二項又は第三号の場合は理事は請求のあった日から二十日以内に臨時総会を招集しなければならない

３．監事は次の場合に臨時総会を招集する

一．理事の職務を行う者がないとき理事が第一項第二号又は第三号の請求があって正当な理由がないのに招集の手続きをとらないとき

二．監事が財産の状況又は業務執行について不整の点あることを発見した場合においてこれを組合に報告するための必要を認めたとき

第三十六条　総会は正組合の二分の一以上出席しなければ議事を開いて議決することができない。

２．前項に規定する正組合員の出席がないときは組合は二十日以内に更に総会を招集しなければならない。この場合には前項の規定にかかわらず正組合員の四分の一以上の出席をもって議事を開き議決することが出来る。但し、第三十七条第一号から第四号までに挙げる事項についてはこの限りではない

第三十七条　総会では予め通知した事項に限って議決するものとする。但し、たの事項を除くの外、急に実施する必要のある事項はこの限りでない。

一、定款の変更

二、解散又は合併

三、組合員の除名

四、漁業権又はこれに関する物権の設定得喪又は変更

五、既に総代会において議決した事項

第三十八条　総会の議長は総会に出席した正組合員の中から正組合員が選任する。

第三十九条　正組合員が議決権を行わせようとする代理人は、その組合員と同じ世帯に属する成年者又はその他の正組合員でなければならない。

第四十条　正組合員が次ぎに挙げる場合、総会当日は自ら総会に出席して議決権を行使することができないときのは書面を以って議決権を行うことができる。

一、業務又はやむを得ない用務のため遠隔地にある場合

二、疾病若しくは負傷の場合

第四十一条　前条の規定により書面を以って議決権を行使する場合、その書面が総会の開会までにこの組合に到達しないときは無効とする。

第四十二条　この組合は総会に代るべき総代会を設けるものとする。但し、総代会においては次の事項を議決することはできない。

一、定款の変更

二、解散又は合併

三、組合員の除名

四、事業権又はこれに関する物権の設定得喪又は変更

五、役員又は総代の選挙

六、水産業協同組合法第七十一条第一項の規定により設立委員の選任

七、総代会において既に議決した事項につき総代会の議決の日から三ヶ月以内に正組合員の五分の一以上の同意により請求があった場合は総会に於いて更にこれを議決することができる。この場合、総会において総代会と異なる議決をしたときは総会の議決し従う

第四十三条　総代会は正組合員により選挙された総代によってこれを組織する。

第四十四条　総代の定数は五十名としたもの各区毎に住所のある正組合員がその区に住所ある正組合員の中から選挙するものとする。第一区　飯石郡頓原町一名、第二区同赤名町一名、第三区同来島町一名、第四区同志々村一名、第五区同波多村一名、第六区簸川郡窪田山口村十二名、第七区飯石郡東須佐村二名、第八区同西須佐村五名、第九区出雲市六名、第十区簸川郡朝山村二十名、第十一区同稗原村一名、第十二区同神門村四名、第十三区同神西村二名、第十四区同長浜村四名、第十五区同大社町二名の合計六三名

第四十五条　総代の選挙については役員選挙規程を準用する。

第四十六条　総代の定員補充は次の場合行うものとする。

一、定数の五分の一以上の欠員を生じたとき

二、理事が必要と認めたとき

第四十七条　総代の任期は一年とする。

２．前条の規定に依り定員の補充によって就任した総代の任期は現在総代の残りの期間とする

３．総代会は総代の後任者が就任するまではなほその権限を行使するものとする

４．総代については役員改選の請求に関する水産業協同組合法第四十四条の規定を準用する

第四十八条　理事は毎事業年度一回、三月通常総代会を招集するものとする。

２．理事は次の場合に臨時総代会を招集する。

一．理事が必要と認めたとき

二．総代が五分の一以上の同意を得て会議の目的たる事項及び招集の理由を記載した書面を理事に提出して招集を請求したとき

３．監事は次の場合に臨時総代会を招集する

一．理事の職務を行うものがないとき及び理事が前項第二号の請求あっても正当な理由がないのに招集の手続きをとらないとき

二．監事が財産の状況又は業務の執行について不整の点あることを発見した場合においてこれを総代会に報告するために必要と認めたとき

第四十九条　総代会は総代の二分の一以上が出席しなければ議事を開いて議決することができない。

２．前項の規定する総代の出席がないときは理事は二十日以内に更に総代会を招集しなければならない。この場合には前項の規定にかかわらず総代の四分の一以上の出席をもって議事を開き議決することができる

第五十条　総代会では予め通知した事項に限り議決するもとする。但し、急に実施する必要があり事項はこの限りでない。

第五十一条　総代会の議長は総代会に出席した総代の中から総代が選任する。

第五十二条　総代が議決権を行わなせようとする代理人は他の総代でなければならない。

第六章　事業の執行及び会計

第五十三条　この組合の事業年度は一年とし四月から翌年三月三十一日までとする。

第五十四条　この組合の一組合員に対する貸付金の最高額は毎事業年度総代会の議決を経なければならない。

第五十五条　この組合は一年以内の期間において組合員が組合の施設の一部を専ら利用しなければならない旨の契約を組合員と締結することができる。

２．前項の契約は書面でこれをしなければならない

第五十六条　この組合は組合員の利用に差支えない限り組合員以外の者に第二条第一部から第三号まで及び第五号・六号・十号の事業並びにこれらの事業に附帯する事業を利用させることができる。

第五十七条　この組合の施設の利用について需要の者が多くある場合にはその利用の基準は理事の過半数でこれを定める。

第五十八条　組合員以外に者により徴収する利用料は該当施設についてく組合員より徴収すべき額と同程度で理事がこれを定める。

第七章　剰余金の処理及び損失の処理

第五十九条　剰余金から準備金に積立てる金額及び第二十三条に依り繰越す金額を差引き、なお残余あるときは特別積立金振込んだ出資金に対する配当金事業分量に対する配当金又は繰越金とする。

第六十条　振込んだ出資額に対する配当は事業年度の終わりにおける組合員の振込済額に応じてこれをするものとしてその率は年五分以内とする。

２．事業分量に対する配当はこの事業年度内において取扱ったものの数量価額その他事業分量を参配して利用者の事業分量に応じてこれをする

３．第二十六条第二項の規定は配当金の計算にこれを準用する

第六十一条　組合員以外の者に対する事業分量の配当は組合員に対する場合と同程度で理事がこれを定める。

第六十二条　損失の補填はまず特別積立金をもってし、次に準備金をもってする。

第八章　漁業権管理行使

第六十三条　組合員は漁業権行使規定の定める処によりこの組合の管理する漁業権又は入漁権に属する漁業を行うことができる。

２．組合員が前項の漁業を行うとする時は組合に届け出て理事の承認を受けなければならない

３．漁業権の行使規定は総会の議決を経て定めるものとする

昭和26年　財務諸表

貸借対照表　（単位：円）

資産の部		負債の部	
科目	金額	科目	金額
現金	2,372	出資金	183,400
預金	25,000	借入金	240,000
備品	37,093	未払金	92,700
事務施設	187,078		
仮払金	134,000		
立替金	10,467		
売掛金	1,059		
未収賦課金	53,400		
貸付金	3,000		
特別賦課金	58,458		
当期損失	4,173		
合計	516,100	合計	516,100

損益計算書　（単位：円）

損失の部		利益の部	
科目	金額	科目	金額
会議費	25,917	賦課金	208,800
広告費	500	入漁料	300
通信費	18,162	補助金	133,000
旅費	2,270	雑収入	13,190
消耗品費	1,390	当期損失	4,174
印刷費	700		
接待費	6,440		
図書費	1,433		
傭人費	5,450		
給料	66,000		
事務所費	10,559		
事業雑費	17,605		
支払利息	38,221		
雑費	1,990		
報償費	540		
諸税公課	2,820		
販売営業費	3,025		
負担金	23,000		
設計費	7,000		
減価償却費	27,896		
前期損失金	8,545		
諸損金	90,000		
合計	359,463	合計	359,464

損　益　計　算　書

平成20年12月31日

区分		金額	合計	摘要
(1)事業収益	売上高	1,334,490		購買品売上高　993,490 かに売上高　341,000 計　1,334,490
	指導収益	39,336,857		
	事業収益合計		40,671,347	
(2)事業直接費	売上原価	1,145,187		購買品仕入高　804,343 かに仕入高　340,844 計　1,145,187
	指導事業費	21,135,501		
	事業直接費合計		(−)22,280,688	
(3)事業管理費	人件費	9,588,255		
	旅費交通費	1,349,206		
	業務費	2,833,705		
	諸税負担費	1,515,931		
	施設費	724,944		
	減価償却費	1,011,543		
	雑費	593,929		
	事業管理費合計		(−)17,617,513	
(4)財務収支	受取利息	178,440		
	財務費用	(−)　15,454		
	差引財務収支合計		162,986	
(5)その他収益	受取配当金	0		
	雑収入	10,000		
	退職給付引当戻入	48,600		
	役員退任引当戻入	620,000		
	その他収益合計		678,600	
(6)その他費用	繰延勘定	73,585		
	諸税引当金	700,000		
	役員退任引当金	260,000		
	退職給付引当繰入	443,100		
	その他費用合計		(−) 1,476,685	

当期剰余金　138,047円

年　表

昭和15年	神戸川沿岸漁業組合連合会創立
昭和20年９月17日	大井堰決壊
昭和23年12月15日	水産業協同組合法公布
昭和24年２月15日	水産業協同組合法施行
昭和24年９月５日	定款作成
昭和24年９月５日	神戸川漁業協同組合定款作成
昭和24年９月10日	出雲市より職員の出向許可指令。出雲市長　森山繁樹　から井原協一組合長
昭和24年10月５日	電源開発計画に対する陳情　神戸川産業開発協会
昭和24年10月15日	水産業協同組合法の制定により、漁業会は解散
昭和24年11月５日	神戸川漁業協同組合設立会議、理事監事選挙
昭和24年11月５日	神戸川漁業協同組合設立目録見書作成
昭和24年11月５日	神戸川漁業協同組合役員選挙
昭和24年12月17日	神戸川漁業協同組合設立許可
昭和25年４月	稚魚10,000尾を放流
昭和25年２月16日	神戸川漁業協同組合登記完了
昭和25年２月20日	徳蓮養魚場設置会議
昭和25年２月28日	電話開通　番号435番
昭和25年５月７日	第１回監査会議及び第１回決算報告会
昭和25年５月８日	第１回総会
昭和26年２月16日	島根観光と物産展　東京都渋谷区　東横百貨店７階催事場
昭和26年５月３日	神戸川漁業協同組合第２回総会
昭和26年８月29日	島根県内水面漁業調整規則公布
昭和26年９月１日	共同漁業権免許取得　昭和36年８月31日まで
昭和27年５月３日	第３回神戸川漁業協同組合総会
昭和29年３月１日	中国電力株式会社　潮発電所水利利用協定締結
昭和29年３月10日	中国電力施設変更（潮発電所新設）に関する主意書提出
昭和29年３月10日	中国電力施設変更に関する主意書に申立　通商産業大臣　愛知揆一に井原協一組合長
昭和29年５月	神戸川漁業協同組合総会
昭和29年11月６日	来島ダム建設に伴う第１回漁業補償交渉会議
昭和29年11月６日	来島ダムに関する電源補償問題第１回打合せ会　黒崎旅館
昭和29年12月６日	電源補償問題第１回打合会　黒崎旅館にて
昭和30年３月11日	神戸川高松堰堤補強工事の関する工事中止願打合会　簸川地方事務所
昭和30年３月11日	神戸川高松堰提補強工事中止要請
昭和30年４月17～18日	来島ダム建設に伴う第２回漁業補償交渉会議
昭和30年６月11日	電源開発補償問題打合会　松江市開拓会館
昭和30年６月11日	来島ダム建設に伴う第３回漁業補償交渉会議
昭和30年６月21日	電源開発補償問題打合会　出雲市立久恵町錦水館
昭和30年６月27日	来島ダム建設に伴う第４回漁業補償交渉会議
昭和30年11月21日	来島ダム建設に伴う第５回漁業補償交渉会議
昭和30年11月22日	電源開発補償交渉会　出雲市黒埼旅館
昭和30年11月22日	来島ダム建設に伴う第６回漁業補償交渉会議
昭和30年12月５日	第７回電源補償交渉会　松江市赤木館
昭和30年12月５日	来島ダム建設に伴う第７回漁業補償交渉会議
昭和30年12月19日	来島ダム建設に伴う第８回漁業補償交渉会議（最終）
昭和31年３月８日	神戸川養魚場設置期成同盟会　陳情
昭和31年３月23日	神戸川漁業協同組合第１回総会
昭和31年４月６日	第６回通常総会　出雲市公会堂
昭和31年４月16日	中国電力株式会社　潮発電所来島ダム設置に伴う漁業補償に関する協定締結
昭和31年４月16日	中国電力株式会社協定書締結
昭和31年９月18日	鳥取県日野川水系溝口漁業協同組合視察
昭和31年11月10日	養魚場建設委員会開催　古志町うどん屋

昭和32年１月20日	専業者に関する特別委員会開催　今市町駅通り　黒崎旅館
昭和32年３月５日	古志町字徳蓮に土井豆組、高橋工務店で施工開始
昭和32年３月27日	第７回通常総会　出雲須佐中学校
昭和32年４月26日	臨時総会（役員改選）　出雲市公会堂
昭和32年５月23日	専業者資格審査委員会　黒崎旅館
昭和32年７月11日	神戸川漁協古志養魚場落成
昭和32年８月12日	養魚場生産鯉児を支部への分譲開始
昭和33年	第８回通常総会
昭和33年４月28日	中電補償金受領
昭和34年１月28日	第９回通常総会
昭和34年９月24日	臨時総会　出雲須佐中学校
昭和35年１月31日	通常総会　出雲市公会堂
昭和36年１月29日	通常総会　出雲須佐中学校
昭和36年７月９日	第２回立久恵峡つり大会　主催出雲市観光協会、一畑電鉄㈱、共催神戸川漁業協同組合、出雲市つり道具商組合
昭和37年１月28日	通常総会　出雲市体育館
昭和38年９月１日	共同漁業権免許取得　昭和48年８月31日まで
昭和39年４月６日	定款改正
昭和39年４月８日	更改協定書締結　中国電力との補償額変更
昭和44年３月２日	通常総会
昭和44年５月10日	定款改正
昭和44年５月11日	つり堀大会
昭和44年５月11日	第１回つり大会　組合釣り堀にて
昭和45年５月17日	第２回つり大会　組合釣り堀にて
昭和46年６月６日	第３回つり大会　組合釣り堀にて
昭和46年７月１日	立久恵峡安全祈願祭並びに魚霊祭
昭和47年２月29日	定款改正
昭和47年３月26日	第15回総代会　出雲酒販協同組合　会議室
昭和47年５月21日	第４回つり大会　組合釣り堀にて
昭和48年２月14日	通常総会　簸川郡湖陵町　国引荘
昭和48年３月16日	第16回総代会
昭和48年５月18日	第24回通常総会　島根県信用漁業協同組合連合会
昭和48年６月２日	漁業権免許取得に関する中国電力㈱との協定書締結
昭和48年６月３日	第５回つり大会　組合釣り堀にて
昭和48年９月１日	共同漁業権免許取得
昭和49年３月10日	第17回総代会　出雲酒販会館
昭和49年５月26日	第６回つり大会　組合釣り堀にて
昭和50年３月９日	第18回総代会　出雲酒販会館
昭和50年８月２日	臨時総代会（書面決議）　カニ筌許可申請について
昭和51年３月７日	総代会開催　出雲酒販会館
昭和51年３月７日	第19回総代会　出雲酒販会館
昭和52年３月６日	第20回総代会　出雲酒販会館
昭和53年２月15日	神戸川漁業協同組合総代会選挙　出雲市古志町徳蓮
昭和53年３月５日	第21回総代会　出雲酒販会館
昭和54年３月４日	総代会開催　出雲市体育館中ホール
昭和54年３月４日	第22回総代会　出雲市体育館中ホール
昭和54年８月11日	水戻す運動　頓原町議会との会合
昭和54年11月14日	島根県恒松知事に「神戸川へ水返して」の陳情
昭和54年11月14日	水戻す運動　県知事陳情
昭和54年11月27日	斐伊川神戸川治水対策説目会
昭和55年２月24日	第23回総代会　生活センター大ホール
昭和56年２月22日	総代会　出雲市農協生活センター
昭和56年２月22日	第24回総代会　生活センター
昭和56年12月14日	斐伊川・神戸川治水計画説明会

昭和57年２月19日	長浜工業団地汚水排水現地視察
昭和57年４月２～３日	山口県阿武川ダム視察
昭和57年10月20日	熊見発電所　ダム視察
昭和57年10月22日	地域振興整備公団（出雲長浜中核工業団地）との雨水排水に関する協定締結
昭和58年２月27日	第26回総代会
昭和58年４月１日	中国電力株式会社　潮発電所水利利用協定更新
昭和58年９月１日	共同漁業権免許取得
昭和59年２月26日	第27回総代会　生活センター
昭和59年９月６日	中電との調印
昭和60年１月31日	志津見ダム建設説明会（建設省より）
昭和60年２月15日	神戸川漁協移転協議
昭和60年２月24日	第28回総代会　出雲市体育館中ホール
昭和60年11月11日	出雲市下古志町の移転先埋立開始
昭和61年２月23日	第29回総代会　生活センター大ホール
昭和61年５月10日	新事務所上棟式
昭和61年７月４日	新事務所竣工
昭和61年７月12日	新事務所定礎式
昭和61年７月27日	島根県内水面連合会つり大会　日原
昭和61年８月５日	出雲市下古志町に新組合事務所完成
昭和61年９月３～４日	新事務所移転
昭和61年９月６日	養魚池説明会
昭和61年10月27日	臨時総代会　定款変更について
昭和61年11月１日	定款改正
昭和62年２月22日	第30回総代会　出雲市民館301号会議室
昭和62年３月20日	出雲市下古志町に新養魚場完成
昭和62年４月４日	養魚場竣工式
昭和62年８月９日	島根県内水面連合会つり大会　江川
昭和63年２月28日	第31回総代会　出雲市民会館301号会議室
昭和63年４月20日	養魚場で中間育成した雅アユ7万尾を放流
昭和63年７月10日	島根県内水面連合会アユ友釣り大会　佐田町
平成１年２月26日	第32回総代会　出雲市民会館　301号会議室
平成１年７月２日	島根県内水面連合会つり大会　斐伊川
平成１年12月24日	桜内国会議員陳情（治水問題について）
平成２年２月25日	第33回総代会　出雲市民会館　301号会議室
平成２年３月24日	第34回総代会　生活センター
平成２年４月６日	愛媛大学教授　水野先生講演会
平成２年７月８日	島根県内水面連合会つり大会　三隅川
平成３年７月７日	島根県内水面連合会つり大会　八戸川漁協
平成４年２月23日	第35回総代会　出雲市民会館　301号会議室
平成４年３月５日	定款改正
平成４年６月６日	島根県内水面連合会つり大会　高津川漁協
平成４年10月13日～14日	奈良県布目ダム視察
平成５年２月28日	第36回総代会　ふれあい会館
平成５年６月４日	漁業権切替許可申請
平成５年７月25日	島根県内水面連合会つり大会　神田チーム優勝
平成６年１月23日	臨時総代会　治水事業の経過報告　出雲市民会館
平成６年２月10日	建設省広島地建へ放水路関係の陳情
平成６年２月27日	第37回総代会　ふれあい会館
平成６年３月15日	志津見ダム漁業補償調印式
平成６年５月12日	斐伊川放水路起工式
平成６年６月27日	斐伊川神戸川治水事業に伴う漁業振興対策覚書締結
平成６年７月３日	島根県内水面連合会つり大会　佐田町八幡原
平成６年９月21日	財団法人神戸川漁業振興基金設立総会

平成６年９月21日	神戸川漁業振興基金総会　基金設立について
平成６年11月７日	財団法人神戸川漁業振興基金設立許可
平成６年11月10日	財団法人神戸川漁業振興基金設立
平成６年12月13日	財団法人神戸川漁業振興基金設立登記
平成６年12月16日	神戸川漁業協同組合から財団法人神戸川漁業振興基金寄付財産移転
平成７年２月10日	財団法人神戸川漁業振興事業費補助金確定通知
平成７年２月26日	第38回総代会　出雲市民会館　301号会議室
平成８年１月23日	第２回神戸川サミット　赤来町
平成８年２月25日	第39回総代会　出雲市体育館中ホール
平成８年８月29日	島根県内水面連合会つり大会　周布川
平成８年12月18～19日	四日市へ産業廃棄物処理施設の視察
平成９年２月23日	第40回総代会　出雲市市民会館　301号会議室
平成９年４月９日	出雲地区産業廃棄物処理場建設調印式
平成10年２月22日	第41回総代会　出雲市民会館　301号室
平成10年８月５日	島根県内水面連合会つり大会　高津川漁協
平成10年11月18日	新内藤川水門竣工式
平成11年２月21日	第42回総代会　出雲市民会館　301号室
平成12年２月20日	第43回総代会　佐田町中央公民館大ホール
平成12年７月23日	島根県内水面連合会つり大会　神戸川漁協優勝
平成12年12月５日	中国電力㈱漁業補償覚書締結
平成13年２月25日	第44回総代会　出雲市民会館　301号室
平成13年７月７日	島根県内水面連合会つり大会　橋波遊流会優勝
平成14年２月17日	第45回総代会　出雲市民会館　301号室
平成15年２月23日	第46回総代会　佐田町ゆかり館
平成15年４月８日	内共第３号第１種、内共第３号、４号第５種漁業権免許申請
平成16年２月12日	リサイクルセンターに関する出雲市産業誘致課との協議
平成16年３月14日	第47回総代会　佐田町ゆかり館
平成16年６月19日	島根県内水面あゆ友釣競技大会　窪田地内
平成16年７月１日	コイヘルペス陽性結果の為に回収作業
平成16年９月３日	赤来地内丸大ハム養豚場より汚濁放水現場立入調査
平成17年３月４日	神西支部解散会
平成17年３月13日	第48回総代会　佐田町ゆかり館
平成17年３月24日	新旧組合長引継ぎ会
平成18年３月19日	第49回総代会　佐田町ゆかり館
平成18年５月22日	神戸川1級河川昇格説明会
平成18年７月18～19日	大雨による河川氾濫
平成19年３月18日	第50回総代会　佐田町ゆかり館
平成20年３月16日	第51回総代会　佐田町ゆかり館
平成21年３月８日	第52回総代会　出雲市西新町　フローラルいずも
平成21年３月29日	神戸堰竣工・神戸堰橋開通式
平成21年７月５日	新係留場安全祈願祭

あ　と　が　き

神戸川漁業協同組合は平成22年２月16日で創立60周年を迎えることから、この節目を記念し60年史を刊行しようと言う話が前組合長佐々木伸文氏時に起こったが、任期中に組合理事の年齢制限70歳定年制度の施行、また製作費用等の問題もあり、具体的に動き出すまでは至らなかった。しかしながら、斐伊川・神戸川治水事業も終盤を迎え、神戸川河川事業の志津見ダム、神戸堰は完成し、残す放水路関連事業も平成22年度～24年度に完成予定となり、新しい神戸川の誕生も目前となったこの機に、前組合長さんらの意を引き継ぎ創立以来風化しようとしている先輩諸賢の貴重な足跡をつづった60年史を発刊することが一年前に決まりました。

しかし、前参事勝部勝義氏の退職等もあり、実質的に編纂体制が整ったのは平成21年７月でありました。さっそく史料の収集等を開始しました。また、組合員様方から史料提供して戴き、昭和61年に発刊された「神戸川40年のあゆみ」を参照しながら写真も可能な限り収集し、組み入れ、形にはまらず出来るだけ読みやすく親しまれる内容で編纂に取組みました。史料不足のところは、流域各地の市町村誌等を参考にさせて戴き、加えて国土交通省出雲河川事務所、斐伊川・神戸川総合開発工事事務所、島根県出雲県土整備事務所の協力を仰ぎました。

専門家の立場で島根野生生物研究会・魚類学会会員　佐藤仁志氏（馬木町在住）に「神戸川水系の生態と漁法の変化」と題し寄稿して戴き、また、漁協各支部の歴史、地域概要、活動状況等については支部長の皆様にも執筆をして戴きました。また、巻頭には祝辞を戴いた出雲市長長岡秀人様、飯南町長山碕英樹様をはじめとして寄稿戴いた方々は小誌に花を添えるものであり、感謝に堪えません。心からお礼申し上げる次第であります。

多くの方々から資料提供や協力を受け、編纂スタッフの尽力で何とか発刊の運びとなりましたことを深く感謝いたします。短期間の編纂でもあり、不十分な箇所は皆様の指摘、ご叱正を仰がざるを得ないと思っています。史料の中に故三谷栄一氏により昭和31年の神戸川の景色や流域各地の淵や瀬の景観を詳細なスケッチ画と共に、川の深さ、幅、大きさ等の状態を調査された貴重な資料の発見もあり、小誌に多く掲載しました。

末筆ながら、組合60年史の発刊に当りまして松栄印刷有限会社には終始ご理解とご指導を戴き、また再三にわたる無理難題を引き受けて戴き、深く感謝の意を表します。当組合参事松尾治幸氏には通常業務と並行しながら、休日返上で編纂に卓越した手腕を発揮して戴きましたこと、付記し、お礼申しあげます。

平成22年５月21日

編纂委員長　片　寄　　巌

編纂委員長	片　寄　　巌
副編纂委員長	山　根　　功
副編纂委員長	佐々木　伸　文
編纂委員	高　見　　亮
編纂委員	矢　田　圭　吾
事務局	松　尾　治　幸
	森　脇　晴　子

【寄稿】佐藤仁志（島根野生生物研究会・魚類学会会員）；神戸川水系の生態と漁法変化
【監修】里見軍之（大阪大学名誉教授）
【協力】島根県水産技術センター浅海部
中国四国農政局島根農政事務所統計部統計企画課
【写真提供】佐藤仁志
島根県立古代歴史博物館
国土交通省
出雲市古志コミュニティセンター
山本写真スタジオ（飯南町）

創立60周年記念
神戸川漁業協同組合史

平成22年（2010）5月21日
編集者　神戸川漁業協同組合史編纂委員会
発行者　神戸川漁業協同組合
出雲市下古志町1655-3
印刷者　松栄印刷有限会社
松江市西川津町667-1